ペロロンチーノの煩悩

ろーつぇ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ペロロンチーノ様が単身異世界転移してたらどうなるのかな、という妄想です。

黄金時代の武装無し、ナザリック無し、そしてひとりぼっちで目覚めたペロロンチーノは環境と自身の変化に戸惑いながらも、成り行きからカルネ村を助けることに。

モモンガ様とは違って『慎重さ〈好奇心』な彼らしい（？）物語を楽しんでいただければ幸いです。

目次

はじまりの日
第一話：大地に立つ　1
第二話：少女と幼女　7
第三話：カルネ村　16
第四話：戦士長と隊長　24
第五話：爆撃の翼王　34
この世の強者
第六話：探索その1　41
第七話：王国の場合　57
第八話：探索その2　67
第九話：法国の場合　76
第十話：蒼の薔薇　85
守りたいもの
第十一話：死都エ・ランテル　前編　101
第十二話：死都エ・ランテル　後編　112
第十三話：密会　127
第十四話：漆黒聖典　138
第十五話：桃色の戦乙女【最終話】　153

はじまりの日

第一話：大地に立つ

いつの間に眠ってしまったのだろうか。

そうだ、昨夜は積みに積んだエロゲを消化するべく徹夜していたんだった。

部屋の照明をつけたまま仰向けに寝転んでいるためか、とても眩しい。

いや、この光量はそんなものじゃない。……朝の日差しが窓から射し込んでいる？

しかし、それはありえない。太陽が昇っていようと、その陽光は有害物質を含んだ濃霧に遮られ、いつだって霞んでいるじゃないか。少なくとも俺はそんな太陽しか知らない。

今まで感じたこともない光線を片手で遮りながら、睡眠不足で重くなった瞼を煩わしながらも開けていく。

「知らない天井――じゃない……空？」

未だチカチカして視界はハッキリしないが、それは青く、どこまでも透き通った青だった。知識では知っている。これは紛れも無く空だ。

なんでこんな澄み切った空があるのか……。

次に視界の端に映る緑に気が付く。空に向かって針の様に、しかし柔らかく、しなやかなそれは朝露を蓄え僅かに揺れながら自身を取り囲んでいる――草だ。生まれてこの方、こんなにも大量な植物は見たことがない。

「明晰夢って初めて見たぞ……こんな自然に囲まれた夢っていうのも乙なものだが、どうせなら沢山の幼女に囲まれた夢が良かったなぁ……」

そして、逆光で今まで影だった面前の自分の手が異質なことにようやく気が付く。

「羽毛に覆われた手……ユグドラシルか、懐かしい」

そうか、これはもう2年以上前に引退したユグドラシルの夢。このバードマンのアバターは当時使っていた〝ペロロンチーノ〟のものだな、と冷静に分析したところで違和感を感じる。

いくら明晰夢にしたって思考がハッキリしすぎやしないか。それに意識を外側に向けてみれば、聴覚は風が撫でる草の擦れ合う音、嗅覚は湿った土の臭い、触覚は全身の羽毛がいなす風の流れや太陽光に含まれる熱線、加えて自身の体に圧し潰されている4枚の翼の窮屈さを伝えてくる。

まだ寝起きの冴えない頭だが、これだけは断言できる。夢ではない。

では、ここはゲームの、ユグドラシルの中なのだろうか。

ユグドラシルとはサイバー技術とナノテクノロジーの粋を集結した脳内ナノコンピューター網――ニューロンナノインターフェイスを通じて、仮想世界で現実にいるかのごとく遊べる体感型ゲーム、その中でも最も人気を博したＤＭＭＯ―ＲＰＧのタイトルのひとつである。

確かに同じシステムを利用してエロゲ――風営法により厳しい制限が掛けられているが――をしていたことまでは覚えている。

しかし、現実世界の身体に何らかの異常――例えば睡眠による意識消失、いわゆる寝落ちをすれば、自動的にネットは遮断されセーフティモードに移行するはずで、このように他のゲームへ勝手にログインすることなどはあり得ない。

寝ぼけて自分で操作した、という可能性も捨て切れないが、膨大な量のダウンロードとインストールを必要とする過程の何一つ記憶に思い出せないのは流石に信じられない。

まさか、電脳誘拐。そんなフィクションにありがちなことが頭の片隅によぎる。

ここにきて自分の置かれている状況や、その意味不明さ理解不能さにじわじわと焦りを感じ始め、ガバッと起き上がる。

仰向けに寝転んでいた時から予想できたように、辺りには見渡す限りの草原と背丈の2倍ほどある木が点々と生える景色が広がってい

た。
視界にＵＩの類は浮かんでいないが、念のため空中に手を滑らせ、コンソールを表示しようとするが――やはり出ない。
「おいおいおい……」
焦りの火種は徐々に強さを増していく。
システムの強制アクセス――応答なし。
チャット機能――応答なし。
ＧＭコール――応答なし。
強制終了――応答なし。
「え？　嘘でしょ……？　どうなってんのこれっ!?」
今まで様々なゲームをしてきたがこんなトラブルは初めてだった。考えうる対処法も早々に全滅で打つ手無し。
心臓の鼓動はピークに達し、それに合わせて頭がズキズキ痛む。呼吸は荒く、やたらと煩く感じる。
激しい焦燥に駆られること数分。少し冷静になったペロロンチーノは絶望の中にいた。

◇

「味覚と嗅覚がある。広い視野に翼の感覚。ゲームのデータ容量的にもありえない……」
ペロロンチーノは口に含んだ雑草を吐き出し、自分自身に聴かせるように独り言を続ける。
「それに……うん、あるな。リアルの俺よりデカイかもわからん」
腰に装備してあったフォールドをずらし、羽毛に埋もれた己のナニの感触を確かめる。
最後の検証を経て、穴だらけだった今までの仮説がひとつの答えに集約されていく。
「ユグドラシルがそのまま現実になった……ということか。ははっ

……どんなファンタジーだよ」
姉に言わせれば『ついに現実とゲームの区別もつかなくなったか』と罵られそうだし、自分でもそう思う。
しかし、大地に広がる植物の一本一本は背丈や葉の付き方、虫食いの痕等もそれぞれが違っていて、全く同じ個体はひとつとしてない。先ほど摘んだ草の根には一粒一粒の土が付き、その間には微細な虫の幼虫やダニのような生物が住んでいた。青さが広がる空も、ただ一色ではなく、薄い雲が形を変えながらゆっくりと流れている。まだ昇りきってない太陽は日光の当たる面だけをポカポカと温め、心なしか先程より熱量が増えてきた気がする。
これほどまでの自然を感じて、電脳法や風営法が適用されていない事実を踏まえて、まだゲームだと言い張る奴が居たら見てみたいものだ。
「ハァ……さて、どうしようかな。というかここどこだよ」
改めて周囲を見渡してみても、人影はまるで無し。あるのは点々とした小高い木々と遠くに鬱蒼と茂っている森が見えるだけだった。
でかい森だ。どこまで続いているんだと目を凝らしてみると、突然意識した景色が拡大して視界の真ん中に広がった。慌てて意識を逸らすと元の視界に戻るが、再び意識を集中すると、なんなく望遠の視界を手に入れることができた。
「これは特殊技術（スキル）《鷹の目（ホーク・アイ）》？」
だとすれば外見だけでなく、特殊技術（スキル）やステータス、装備やアイテムもユグドラシルのままということか。
――うっすらと笑みが溢れた。
分かってしまったのだ。
すぐさま腕を何もない空間にねじ込み、装飾のほとんど付いていない一張のコンポジット・ボウを引き出した。
《下位狩猟具作成　火の矢（ファイア・アロー）》
鏃（やじり）の先から矢羽まで真っ赤な矢を右手に生成すると、５０ｍほど離れた高さ３ｍ弱の木に狙いを定め――構え――そして射る。
真紅の直線が空中に描かれ、寸分違わず木の真ん中に突き刺さる同

時に、炎が木全体を覆い尽くす。普通の発火ではありえない速度で焼け焦げ、跡には炭化した残骸が残るのみだった。
「うはっ！　まじかよ！　すげえっ!!」
　矢の射線、射程、速度、効果がどの程度かを完璧に把握できた。そういった自分の能力への確信が、吹き上がるような高揚をもたらす。これが自分の力だという満足感であり、充実感だ。こんな気分はユグドラシルでも味わったことがない。
　先程までの絶望感が一転、小躍りしたくなるほどの幸福感に満たされながらも、浮ついた心を努めて諌めながら思考を巡らす。
　ここまでユグドラシルと類似した世界であれば、周りにモンスターやプレイヤーがいてもおかしくはないはずである。
　その危険性に思い至り、緊張が走る――が、すぐにそんな気持ちも霧散する。
　ここは遮蔽物もなにもないだだっ広い草原だ。寝ている間いくらでも襲うチャンスがあったのに、今まで襲ってくるものがいないのであれば、それはいないと同義……だろう。たぶん。
　それにおそらく働いている〈敵意感知（センス・エネミー）〉にも反応がないことからも裏付けできる。
　しかし、いざというときの戦闘に備えて、今一度アイテムボックスと装備品について確認しておいたほうが良いはずだ。

　……迂闊だった。ここまでショボイ装備しか残っていないなんて。
　そう、ペロロンチーノはユグドラシルを引退している。そして引退時、親友のモモンガにメイン装備と換金できる物のほとんどを金貨に替えて、託していたのだ。
　先程までの満ち満ちた幸福感からさらに一転、今度は不安に苛まれる。
「いや、待て。モモンガさんもこっちに来てるかも？」
　その可能性は高い。なぜなら彼はユグドラシル・イズ・マイライフとでも言うような大廃人様だ。サービス終了前に辞めた自分がここ

にいて、ユグドラシルを誰よりも愛した彼がいない道理はおかしい。
彼に会えたら謝らなければいけないな……。
コンソールが開けないのであれば――
〈伝言（メッセージ）〉
――繋がらない。そもそも機能しているのか確証もないが、そのままアインズ・ウール・ゴウンの他メンバー３９人全員に〈伝言（メッセージ）〉を試みる――が、繋がらない。
ただの閃きだったが、一つ選択肢が消えてしまったことへの落胆は大きい。
「まあ、なんにせよ情報収集だな。死んだら元に戻るってオチもあるかもしれないし……」
気持ちを切り替え意識を背中に向ける。４枚の翼はまるで手足を動かすように思い通りに動かすことが出来た。
それを確認すると、まだ昇りきっていない太陽の元、ペロロンチーノは大空へと舞い上がった。

第二話：少女と幼女

空を翔けるのがこんなにも気持ち良いだなんて。

もし自由に空を飛べたら――なんて、誰しも一度は考えることだろう。

しかし、人の身のままでは乾燥で目は開けられず、呼吸は苦しく、高高度の寒さに耐えることはできない。確かに、ゴーグルを付け、ボンベを背負い、防寒具を着こめば、その問題は解決するかも知れない。

でもそれは本当に自由に飛べると言えるのだろうか。

声を大にして言いたい。

生身で。この身一つで空を翔けるのが最高に素晴らしいんだ、と。

ペロロンチーノは絶頂の最中にいた。雲を突き抜け、上空の気流を全身で捉え旋回する。そして雲の隙間を縫うように急降下を繰り返す。

全てが新鮮だった。仮想現実でもこの手のフライトシミュレーションは人気だったが、この圧倒的リアルさの前ではやはり玩具だったと言わざるを得ない。

５度目の急降下からのカット・バック・ドロップターンを決め、再び上昇しようとした時、視界の端に下界の開拓村のようなものが映った。

「ふぅ。やばいなコレ！　それはそうと、村かー……ＮＰＣならいるかな？」

もしユグドラシルが現実化した世界であるのなら、あのような見すぼらしい村にはきっと村人Ａや村人Ｂ、といったＮＰＣが居て、これからの冒険の方向性を示すヒントが得られるのではないかと思ったわけだ。

翼で風を受けゆっくりと滑空しながら村に近づいていくと、やがて喧騒で慌ただしい村全体の様子が目に飛び込んできた。何かのイベントが発生してるのか。まずは事態を把握するために風下に回り込み、村から離れた大木の上に身を潜ませた。

そこでペロロンチーノが見たものは残忍な殺戮だった。村人と思

しき人々に、全身鎧で武装した騎士風の者たちが手に持った剣を振るっている。村人はなんの抵抗手段も持たないのだろうか。一人、また一人と切り倒され、その度に鮮血が、血飛沫が上がる。

まるでリアルだ。追い立てる騎士も、逃げ惑う村人も、とてもプログラムされたものには見えない。

そんな光景を目にしながら、ふと、ペロロンチーノは戸惑いを覚える。なぜ平然と見ていられるのだろう、卒倒していてもおかしくないはずなのに、と。

それだけではない。僅かながらこの周囲にも血の匂いが漂って来ている。本来なら吐き気を催すところだろう。しかし逆に、食欲が掻き立てられるのだ。

人間を食料と見なすバードマン、そのアバターに身を扮しているだけで、自分は人間であるはずなのに。

（俺は人間を止めてしまったのか……？）

頭では理解できないが、心では理解しつつある自分自身に悶々としている間にも、村内では刻一刻と血の匂いが濃くなっていく。

村全体を俯瞰できるこの位置からは騎士たちの動きがよく把握できた。

騎士達は村の外周から村の中心へ村人を追い立てるように連携し、徐々に包囲を縮めようとしているようだ。さらにその包囲から漏れた村人を仕留めるため、見張りの騎士達も配置している周到さ。その手際はよほど繰り返してきたものなのだろう。

しかし、暴れる騎士たちの剣速や身のこなしを鑑みるに、どうにも強そうには見えない。とはいえ相手の強さが明確で無い以上、下手に手を出すこともあるまい、と傍観を決め込んでいると――

◇

「なめないでよねっ!!」

「ぐがっ！」
カルネ村の村娘、エンリ・エモットは必至の覚悟で騎士の兜に拳を叩き込む。骨も砕ける勢いで放たれた不意の一発は、逃げるための僅かな時間を稼ぎ出すはずだった。だが、無情にもすぐに振られた剣によって背中を切られその場にうずくまってしまう。
エンリは眼前で再び振り上げられた剣を鋭く睨む。
しかし、エンリは理解していた。数秒後にはその剣に引き裂かれ死ぬことを。そしてそれに抗う術は何も無いということを。
だけど、せめて幼い妹のネムだけは逃がしてやりたい。思いつく手段は自らの肉体で剣を受け止め、抜けなくするという最悪な最終手段のみ。
それでも、やるしかない。来るであろう痛みへの恐怖で瞼は固く閉ざされた。
トスッ――
命の危機を前に脳が活性化されたためか、やけに間延びして感じられる時間が経過した後も、剣は振り下ろされてこなかった。
恐る恐る瞼を開けてみると、やはりそこには先程の騎士が剣を振り上げて立っている。
しかし、微動だにしない騎士の胸には斜め上方から黒い瘴気が漂う矢が刺さっているように見えた。
「おいっ！　どうしたんだ」
石像のように動かなくなった騎士を不審に思い、二人目の騎士が駆け寄ってくる。そしてその肩に手を置くと、そのまま傾き始め――けたたましい音と共に、全身鎧の騎士は剣を振り上げた姿勢のまま大地に転がった。
「お、お前！　何をしたぁぁぁぁぁっ!!」
驚愕と混乱の表情が張り付いた騎士は、慌てて姉妹から距離をとり、剣を構え直しながらも横目で倒れた仲間の様子を伺おうとする。
トスッ――
再び、羊皮紙に穴が開くような音がしたかと思うのと同時に、全身鎧の騎士は青白く発光する。光は即座に薄れ、二人目も大地に転がっ

た。鎧の下の肉体が焼け焦げ、異様な臭いが微かに漂う。
弓矢による狙撃。カルネ村にも弓の使い手はいるが、せいぜい小動物を狩れる程度である。それに対して、胸への一撃で騎士の全身鎧を撃ち抜くなんて相当な手練に違いない。
だけど、二人目の脳天に突き刺さった矢……それにあの光は一体何なのだろうか。
頭がクラクラする。血を流し過ぎたのかもしれない。背中の痛みがズキズキと、もう休めと訴えてくる。
（せっかく助かったのに、もう駄目かも。ごめんね、……ネム）
エンリが意識を手放そうとしたその瞬間、風が大地に叩きつけられ、一つの影が舞い降りる気配がした。
「ひぃっ」
ネムから小さく震えた声が漏れ、しがみつかれた服が強く引かれる。そんな妹の怯えた様子に応え、まどろみの意識の中から無理やり覚醒すると、そこには――
それは、背中に2対4枚の鷲のような翼を持ち、人間のような骨格を有していた。
しかし、全身は白い羽毛で覆われ手足には鋭い鉤爪。そして立派な嘴が顔に生えている。
獰猛な視線が姉妹を襲う。顔、首筋、胸元、胴周り、臀部、大腿部、脹脛そして足先。全身を舐めまわすようなネットリとした視線だ。さながら今晩の食卓に見合うか値踏みしているかの様に見えた。
人外のモンスター。絶対的強者。人間の捕食者。
――直感してしまった。対峙したら最後、生きては帰れぬモノだと。
悟ってしまったからか、股間が濡れていく。呼び水のようにネムも併せて……

◇

こちら側に向かってくる４つの気配に意識を集中する。
先頭を走るのは、年の頃１５歳といったところか。少女は胸元ぐらいの長さに伸ばした栗毛色の髪を三つ編みにしている。日に焼けた健康的な肌は恐怖のためか血の気が引いている。黒い瞳には涙を浮かべていた。
少女に手を引かれる幼女――１０歳といったところか。幼女は赤茶色の髪をおさげにしており、少女と同様に黒い瞳には涙を浮かべている。今にも足がもつれて転んでしまいそうだ。この二人は姉妹なのだろう。
内角と外角の際どいところではあるが……もちろんどちらもストライクゾーンである。
後ろに続く追跡者は騎士が二人。その手には血に濡れた剣。嫌がる少女と幼女を追い回すなんて、紳士の風上にも置けない輩達だ。
そうこうするうちに姉妹はバランスを崩して転びかけるが、なんとか持ち直す――が、その隙に目と鼻の先までひとりの騎士が距離を詰めようとしていた。
《上位狩猟具作成　死毒の矢（デスパライズ・アロー）》《精密射撃》《遠隔痛撃》
すぐさま一日に１０本しか生成できない死毒の矢（デスパライズ・アロー）を弓に番え、更に命中性能やクリティカル率が上昇する特殊技術（スキル）を発動させる。
この矢はクリティカル発生時に即死効果を与え、例え即死を免れても麻痺の追加効果を付与する、初手として使い慣れた矢だ。もし抵抗（レジスト）されるようであれば、メイン装備が無い現状、即刻離脱を考えている。
いざ射ようというところで、少女の可憐な怒鳴り声が響く――
「なめないでよねっ!!」
なんと、騎士の頭に一発叩き込んだのだ。思わず「おおっ」と感心してしまう。
しかし悲しいかな。少女の渾身の一撃はダメージを与えるまでには至らなかったようで、すぐに反撃を受けてしまった。
あんな、か弱い少女が格上の騎士に挑んでいるというのに、自分はなんて弱腰なのだろうか。思惑が外れたら姉妹を置き去りにして逃

げ出そうとしてた、己の矮小さを反省しつつ、必殺の気合を入れ直す。
彼我の距離６００ｍ――構え――そして射る。
結果は当然の死であった。小さく拳を握って手応えを噛みしめる。
そこに人を殺めたことに対する感慨は何一つない。
お次は――と。
《下位狩猟具作成　電撃の矢（ライトニング・アロー）》《弾道予測》《曲射》
腰をぐっと落とし、上体を反らして、弓を上空に向けて引き絞り――そして射る。
風の流れまで把握しきった射線は大きな弧を描きつつ、騎士の頭に突き刺さる。
「よしっ！　ツーストライク！」
だいぶ余裕がでてきた。
もちろん今の騎士がたまたま弱かった可能性は十分にある。しかし目測で感じ取った実力との差異に狂いはなかったように思える。大きい収穫だ。
「さてと、正義の紳士の登場といきますかね」
ペロロンチーノは意気揚々と飛び立った。

◇

少女の目の前に降り立ったペロロンチーノ。
間近でよく観察してみれば……なるほど、少女の傷は思ったより深いようだ。
少女の背中からは濃密な血の匂いが沸き立つ。その影に隠れるような少女たち本来の匂いも合わさり……そして今、絶妙にブレンドされていた。
食欲と性欲をごちゃ混ぜにしたような、今まで経験したことの無いような興奮が内側から膨らんでいく。そこに更なるひと味、アンモニア臭が加わって……ん？

（いやいやいや。待て、待つんだ俺。今何を考えていた？　性的な目で見るのは仕方がない。平常運転だ。問題はそこじゃない。さっきも感じたが、食欲？　……嘘だろ？）

思いもよらない願望の出現に混乱するが、今は考え込むより先にやることがあると思い直す。

（とりあえず失禁については紳士的にスルーしておこう。しかし、怯える姉妹になんて切り出すべきか……まずは、変質者ではないことを説明して……いやいや、それではまるで自白しているみたいじゃないか？　そうだな……俺が君たちを助けたんだよ、というアピールが無難か）

「危ないところだったね、お嬢さんたち」

姉妹はビクンッ肩を震わせ、荒い息をついている。恐る恐る見上げては見るものの、直視するのが怖いのか視線は泳がせてばかりだ。

甘えるような上目遣いもいいものだが、これもこれでいいものである。

「怪我をしているようだね、これを飲むといい」

そう言うと無限の背負い袋（インフィニティ・ハヴァサック）から一本の赤いポーションを取り出して、差し出した。

少女は震える手で受け取ると、躊躇いながらも意を決したように口を開く。

「い、言われたとおり飲みます！　だから、どうか妹だけは――」

「お姉ちゃん！　だめだよ！」

「ネム、いい子だから、……ね？」

……完全に信用されていない。なんでピンチを救った上に、親切心で取り出したポーションを前にして、こんな家族愛が展開されるのだろう。

あれか。見た目が駄目なのか？　ユグドラシルでは多くはないが決して珍しい種族でもなかったはずだが。

それとも自分の感性がおかしいのだろうか。自身の手足をまじまじと見直してみるが、生まれた時からバードマンだったと言えるほどしっくり馴染んできている。

はたまたここは、ユグドラシルを基本ルールとした全く別の世界だからなのか。
取り敢えず話が進まないため、望まれる返事を与えてやることにした。
「ああ、わかった。妹ちゃんには指一本触れたりしないよ」
その言葉で覚悟を決めたのか一息でそれを飲み干す。そして驚きの表情を浮かべた。
「うそ……」
信じられないといった様子で背中を擦ったり叩いたりしている。
「痛みは無くなったかな？」
「は、はい」
唖然とした様子ながらも、血の気がよくなった顔でコクコクと頷く少女。
「それはよかった。それで君たちに幾つか訊きたいことがあるんだけど……あー、俺の名はペロロンチーノだ」
「は、はい。エンリ・エモットといいます。こっちは妹のネムです」
「エンリにネムだね。そうだな、まずは――」
取り敢えずは周囲の地理について尋ねようとしたところでエンリに遮られる。
「あ、あの！　助けてくださってありがとうございます！」
なに気にすることはないと、話を戻そうとすると再び――
「あ、あと、本当に図々しいとは思います！　で、でも、ペロロンチーノ様しか頼れる方がいないんです！　どうか、どうか！　村の人を、お父さんとお母さんを助けて下さい！　お願いしますっ！」
矢継ぎ早に言い終えたエンリは両手と頭を地面につけたまま動こうとしない。ネムも姉に倣って「お願いしますっ！」と頭を下げた。
逞しいものだ。先程まで震えていた少女が、恐怖を感じてたであろう自分に対して、このような態度に出れるのだから。
騎士を殴りつけた時だってそうだ。自分には無い何かを持っているんだろうな……と、ふと思う。
何らかしらの情報を得られれば、村のことなんてどうでもいいかと

思っていたんだが……。少女と幼女にお願いされるのであれば、仕方があるまいっ！

「わかった。引き受けよう。　ところで――この俺の姿は怖いかい？」

「「……」」

姉妹はお互いの顔を見合わせ、どう答えていいか決めあぐねている様子だ。

「……そうか、そうか。よくわかった。君たちはそこから動かないでいてくれよな」

そう告げると、ペロロンチーノは村全体が俯瞰できる高度まで一気に飛翔した。

第三話：カルネ村

少し思考を整理しようと思う。
まず、この世界だが……もはや疑いようもないが、ゲームではない。言葉にするのもバカバカしいが、これが異世界ってやつだ。つまり現実だ。
では、この異世界は勝手よく知るユグドラシルが現実化した世界なのか。共通点は多いと思うが、そっくりそのままでは無いだろう。
じゃあ、エンリやネムは何者なのだろうか。自分の意志で考え行動し、家族を思いやる姿には確かに人格が宿っていた。決してゲーム世界のＮＰＣとは思えない。
なら、自分と同じプレイヤーか。貧弱さに加え、あの過剰とも思える反応から考えれば……ノーだ。この地に産まれ、この地に生きる現地人というのが一番しっくりくる。
そして、俺とは一体何なのか。ユグドラシルの姿、能力をそのままに、突如として現れた異質な怪物……この世界から浮いた存在。
そうじゃない。俺は単なるエロリーマンだ。エロゲーをこよなく愛し、ロリを愛でる紳士である。会社での付き合いは悪くなかったし、決して多くはないが友情をわかちあい、腹を割って話し合える友がいる。顔を合わせればいつも喧嘩ばかりだが、大切な家族がいる。そんな人間らしい人間が、俺。
それなのに、どうして、何故。
人間を殺めたことに対して何一つ感慨がわかないのか。
……いや、僅かにあったな。あれは愉悦だった。
そしてあの姉妹はとても旨そうに見えた。淫猥な意味で、ではない。いや、それはまあ当然あるとして……そうではなくて、食欲が訴えてきたのだ。旨そうだと。
考えたくもない。人間を喰らいたいなどと……それだけは絶対にダメだ。俺の人間だった頃の残滓がそう訴えている。
「やっぱ肉体のみならず心でも人間を止めたということかー……」
血の匂いを嗅いだ時から、なんとなく分かってはいたのだ。ただ認

めたくなかっただけで。
そしてまたその人間たちに対して、さも当たり前のように弓を引こうとしているのだから笑えてしまう。
ペロロンチーノは村の中央、上空おおよそ１００ｍ地点まで一気に到達した。２対４枚の翼を器用に動かし、空中でほとんど上下することなく静止する。眼下には村の広場、そこには６０人弱の生き残った村人とそれを取り囲む様に２０名の全身鎧を身につけた騎士たちが映る。まるで蟻の巣を観察している気分だ。
どうやらあえて生き残らせた村人を、ここから間引いていこうという局面に差し掛かっているらしい。
おもむろに１本の矢を番えた弓を下界に構えて矢を放つ。
放たれた矢はそのまま直進し――刹那、２０の矢に分裂した。
それぞれの矢は予めターゲティングされていた通りに、騎士の脳天めがけ突き刺さる。
全射的中。遅れて全身鎧が崩れ落ちる音が幾重にもなって広場を満たした。
（速度・威力ともに落ちる《分散射撃》ですら全員即死か……こりゃＬｖ換算で１０以下というところかな……）
もはや完全に緊張感がなくなってしまった。「はぁ…」と一息つくと、再び構え――単調な作業の様に淡々と４度射る。
村の周囲に散開していた、馬に乗ったままの騎士たちは――こちらに気付いていたものも居るようだったが――そこで何をしていたのか、そして何をされるのか解らぬまま絶命していった。
村人たちは困惑の中、矢が飛来してきた方向――頭上を仰ぎ見る。
そこで確かに見た。上空に佇む翼の生えた微かな人影を。

◇

ひと仕事終えたペロロンチーノはエンリとネムの元へと舞い降りた。
村にいた全ての騎士を倒したと報告すると、また律儀で畏まった礼をされる。
（抱きついてくれてもいいのに……）
さてと、待ちに待った女の子達とキャッキャウフフなお喋りタイムといきたいところだが、流石に今度は空気を読もう。
村人たちと合流するために、姉妹を立ち上がらせ、村の広場へ歩を進めた。

今だに状況を把握しきれず、困惑の渦にいる村人たちは、家の影から顔を出した姉妹の姿を目にして愁眉（しゅうび）を開く。
「エンリ！　ネム！　無事だったかっ――ひぃッ!?」
直後、その背後から現れた異形の姿に言葉を詰まらせた。
（予想はしていたけどさぁ……どうしようこの空気……）
目を見開き固まる村人。さながら蛇に睨まれた蛙。もとい鷹の前の雀である。
「あ、あの、このお方は、私達を助けてくれて……えっと、その、命の恩人なんです！」
静寂の中、エンリが慌てて切り出した。そんな恐ろしい物を見たかのようか顔をしてはいけないと、失礼な真似は許されないと、訴えるように。
そんなエンリの気持ちなんて露知らず、ペロロンチーノはエンリの対応にグッジョブ！　と心の中でサムズアップを向けて見せている。
「えーゴホン。怯えることはないですよ、安心してください。あなた達を襲った騎士は全て私が倒しましたから」
「あ、あなた、あなた様は……」
ペロロンチーノの左手に握られている人間が扱うには大きすぎる弓に視線をくれながら、村人の代表者らしき人物が口を開く。
「たまたま通りかかったら、この子らが騎士に襲われるのを見かけてね。助けに来たんですよ」

「「おお……」」
ざわめきが上がり、村人は顔を見合わせ表情を緩ませる。だが、そんな中にあってもまだ、不安の色は消え失せてはいない。
見返りに何が要求されるのか。金銭や貴重品ならまだいいが、労働力としての奴隷、はたまた……そんな不安が透けて見えてくる。
「あー……そうだな。助けた代わりと言っちゃなんだけど、食料を分けてくれませんか？」
「しょ、しょくりょう、でございますか!?」
村長は絶望の表情を張り付かせる。
やはり何か勘違いされている気がしてならない。
「いや、なに。あなた達が普段から口にしているもので構わないから」
「そ、そうですか。お口に合うかわかりませんが、すぐに、ご用意させて頂きます！　で、では、どうぞこちらへ……」

通されたのは広場からほど近い村長の家。入ると土間のような場所が広がっており、隣接して炊事場が作られている。そんな土間の真ん中にはみすぼらしいテーブルと数脚の椅子が置かれていた。
その椅子の1つに座り、ペロロンチーノは室内を観察する。どこを見渡しても機械製品の類は見受けられない。
科学技術はさほどこの世界では発達していないな、と判断してすぐに浅薄だなと気がつく。
「ところで、この村に魔法を使えたり、詳しい者は居るのかな？」
「申し訳ございません。あいにくこの村には魔法を使う者も、魔法に明るい者もおりません。時折村を訪れる冒険者の中には、魔法を使える者もいると聞いたことがありますが……」
なるほど……この世界にも魔法は存在している。嘴（くちばし）の本来なら顎があったであろう辺りに鉤爪を添え、ペロロンチーノは思考を巡らす。便利な魔法があれば科学技術は発展しないというのも、さもありなん話である。それに冒険者か……興味深い話だ。
「あ、あの。ペロロンチーノ様……とお呼びしてもよろしいでしょう

か」
「ん？　ああ。構わないよ」
「この度は命を救っていただき、ありがとうございました！」
　村長は頭をテーブルに叩きつけるのではと思うような勢いで下げた。遅れて後にいた村長の妻も感謝の言葉と共に頭をさげる。
「ペロロンチーノ様が来てくださらなければ、村の皆が殺されておりました！　感謝いたします！」
　強く心のこもった感謝の言葉に、ペロロンチーノは瞠目する。
　人生を振り返っても、これほど感謝されたことは一度もない。いや、先ほどの少女と幼女には同じように感謝されたっけ。まあ、命を助けたことなんか無いのだから当たり前だが。
　純粋な感謝を向けられ、気恥ずかしいと思う反面、嫌な気は決してしなかった。まだ、このように感じられるのは人間らしさが残っている証拠だろうか。
「顔を上げてください。えーと、そうだ。そういえば、あの姉妹は？」
　気恥ずかしさをごまかすように、話を逸らしてみる。
「今は村の残りの者と片付け等をしているかと思いますが、お呼びいたしましょうか？」
「あー……いや、邪魔をしては悪いよな」
　今や村は、少なくない数の人達が殺され、また家屋にも多大なる被害が出ている悲惨な状況である。男も女も子供も老人も、皆総出でその復旧作業に追われている。誰ひとりとして暇を持て余している者などいないのだ。
　飯を食いながらエンリとネムとおしゃべりしたいなー、なんて我儘は許されないだろう。情報収集という主目的を達成するためには、むしろ村長に問うたほうが成果が上がりそうでもある。
　そんなふうに考えている内にも、部屋の奥の勝手口から次々と干し肉や野菜に果実、パンや酒などが運び込まれている。村中から可能な限りかき集めてきたのだろう。相当量な貢物だ。さながらこれで腹を膨らませて、どうか私達を食料の対象にしないでくれと言わんばかりに。

これには流石にペロロンチーノも悪いことをしたなと、苦笑いをこぼす。
「そんなに沢山も食べれないので、そのへんで結構ですよ。　そうだ、せっかくだからこの場で調理してくれませんか？」
村長の妻は緊張した顔を村長に向け、しばらく顔を見合わせていたが意を決したのか炊事場に向かっていった。

正直言ってめちゃくちゃ旨かった。塩気が足りなく多少物足りない気もするが、素材の味が活きている。
普段の食生活で食べてきたものといえば、化学合成されたタンパク質に味をつけたようなものか、食物繊維に栄養素・ミネラルをぶちこんだダンボールみたいなものだ。天然の食物なんて年に何度も食えるもんじゃない。
食うことに夢中になりながらも村長に話題を振っていく。
ペロロンチーノが魔法の次に聞いたのは周辺国家についてだ。その答えは聞いたこともない国の名前だった。少なくともユグドラシルと何らかの関連性があるのでは、と考えていただけに……いや、むしろいっそ清々しい。
周辺の国家である、リ・エスティーゼ王国、バハルス帝国、スレイン法国。これらは人間のみで構成された国家であり、大森林や山岳地帯を避けるように、平地に街や村を築いている。
もし、他にプレイヤーが来ているのであれば、この3国と関係を持とうと考える者が多いのではと思われる。なぜならばユグドラシルプレイヤーの多数は種族として人間を選択していたからだ。加えて元々が人間であることも考慮すれば、間違った推論ではないだろう。
出来れば同郷の者同士仲良く、情報交換や協力関係を築きたいところだ。
そこで、はたと気づく。先程の騎士達――バハルス帝国の紋章入りだが、あからさま過ぎて逆に疑わしい――を殺してしまったのは悪手だったのではないかと。あの程度の騎士達なら千人だろうが万人だ

ろうが、数を増やしただけなら相手にならない。しかし、その国に肩入れをしているプレイヤーがいたら……自分はＬｖ１００のカンストプレイヤーだが、装備の質はその水準以下だ。真向から殺り合うのは分が悪すぎる。

これからはできる限り周囲と敵対するような行為は控えなくては、と思い直す。先程の騎士達は……襲われていたから助けた、仕方がなかったんだと、自分に言い聞かせた。

ちなみに、モンスターという存在もいるようだ。森林奥にも魔獣、特に『森の賢王』と呼ばれる存在もいるし、山小人（ドワーフ）、森妖精（エルフ）などの人間種、小鬼（ゴブリン）、豚鬼（オーク）、人食い大鬼（オーガ）に代表される亜人種たちもいる。亜人たちが国家を作っている場合もあるらしいが、どこにどんな亜人種の国があるかなどは分からないとのことだった。

これらはユグドラシルにもいた存在だが、ファンタジーの定番とも言える。魔法があるのなら当然なのかもしれないが。

しかし森妖精（エルフ）か……いい響だ。よもやリアルの森妖精（エルフ）を拝めるチャンスが来ようとは。豚鬼（オーク）に囚われた森妖精（エルフ）の姫――そこへ颯爽と現れる謎のバードマン。いいじゃないか。夢がひろがりんぐ。

村長の話は冒険者という存在へと移っていく。これらモンスターを報酬次第で退治しているのが冒険者で、大きい都市には冒険者達によってギルドという組織がつくられているのだそうだ。村長は言葉を濁していたが、バードマンもそのモンスターに分類されるのであろう。つまり討伐対象である。迂闊に人間の都市に近づくのは危険ということだ。

となれば、これ以上の情報収集は亜人種や異形種の国家に主軸を置いて行うほうが良いかもしれない。文明レベルが高いと良いのだが。

途中、葬儀のため中断されながらもペロロンチーノが周辺のことや、ある程度の常識を学んだ頃には結構な時間が経過しており、格子戸から差し込む夕日が空を真っ赤に染め上げようとしていた。

そして最後に尋ねてみる。『ユグドラシル』、『アインズ・ウール・ゴウン』、『プレイヤー』という言葉に聞き覚えはないか、と。しかし村長は全ての単語に首を横に振った。

村長の家を後にすると両手両足、４枚の翼を広げ、ぐーっと伸びをする。存外、時間を奪われたものだ。
ただ、それに見合うだけのメリットはあったように思える。特にこの世界を知れば知るほど、わからないことが増えていく。それが把握できただけでも十分だと言えよう。
目の前には綺麗な夕日が広がっていた。天空のパレットには青から紫そして赤色のグラデーションが彩られている。初めて見る景色にペロロンチーノから感嘆のため息が漏れた。後一時間もしないで辺りは闇に沈むことだろう。
夕日を眺めながら、ふとあることに気がつく。帰る家が……寝床がない。この体なら野宿でも問題ない気がするが、やはり屋根ぐらいは欲しいものだ。
とりあえず、今夜は空き家でも借りて泊めてもらうとペロロンチーノは村長を捜して歩き出した。
村長はすぐに発見できた。広場の片隅で数人の村人達と真剣な顔でなにやら相談している。ただそこには緊迫感があった。不安な表情を浮かべている。
「どうかされました？」
ペロロンチーノが近づくと村長以外の村人達は、恐れおののき一歩後ずさる。
「おお、ペロロンチーノ様。実はこの村に馬に乗った戦士風の者たちが近づいているそうで……」
「なるほど。んと、一晩寝床を借りたいと思っていたのですが」
「それは勿論構いませんが……」
「よし。では、安眠の妨げとなる芽は早めに摘むとしますかね」
その場に居た村人全員の顔が引きつるのを横目に「追い払うだけですよ」と冗談ぽく告げると、大地に風を打ち付けペロロンチーノは夕日の空に舞い上がった。

第四話：戦士長と隊長

草原に長い影を落としながら、総数２０名強の一団が馬で駆けていた。

「戦士長！　カルネ村が見えてきました！」

「ああ。間に合っていてくれ……」

リ・エスティーゼ王国の誇る戦士長ガゼフ・ストロノーフを先頭に、道中幾つもの村を巡回していたが、それらの村全ては既に焼き尽くされた後だった。

僅かに生き残った村人を最寄りの城塞都市エ・ランテルまで護衛するため、少ない人員をさらに切り詰めつつ、ここカルネ村までやってきたのだ。

遠目で見る限り、家屋は姿形を残しており、火の手も上がっていないように見える。疲労しきった隊員たちの顔にも希望が宿った。

しかし、村の入口まであと僅かというところでガゼフの怒声が飛ぶ。

「総員！　止まれッ!!」

急な停止動作に嘶(いなな)きを上げる馬を沈めつつ、視線を前に送る。

「副長ッ！」

「はい！」

「残りは周囲を警戒！　陣形を整えろ！」

そこには大地に転がるひとつの死体。その全身鎧にはバハルス帝国の紋章がハッキリと刻まれていた。

「報告にあった帝国の騎士で間違いないかと。……眉間から後頭部にかけて何かが貫通した痕があります。首も折れていますが、土の跡からして落馬した際のものでしょう」

「まさか村人がやったのか……？」

視線を村の方向へと戻したその瞬間、上空から矢が飛来し死体の前方に突き刺さった。

「ッ!!　敵襲！　防御陣け――うおッ!?」

刺さった矢を中心に突如火柱が、轟々と周囲の空気をかき混ぜなが

ら、天空めがけて吹き上がった。
目の前で起こった爆発的熱量に誰もが腕で顔を庇い、影が落ち始めていた周囲を明るく照らす。
しかし、それも一瞬。何事もなかったかのように、火柱は消失。熱波も光線も嘘のように消えていった。残るのは地面を焦がした炭化した跡のみだ。
歴戦の戦士達といえど、あまりの出来事に近くにいた者は落馬。馬は暴れ、とても陣形と呼べるものは維持できていなかった。
そんな中にあっても騎乗を保ったまま、火柱があった向こう側に舞い降りる人影をいち早く発見出来たガゼフは流石と言えよう。
今だ目が眩んで視界がぼやける中、視線の先から声が掛けられる。成人の、男の声だ。
「こんな辺鄙(へんぴ)な村に何のご用かな？　騎士さんたち」
あくまで優しい声色だった。しかし僅かに敵意も込められているように感じる。
（先程のあれは警告か……）
慌てて抜刀し、剣を構えようとする部下達をガゼフは片手を上げて制する。
「――私は、リ・エスティーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士を討伐するために王の御命令を受け、村々を回っているものだ」
「……王国戦士長？」
「お前が何者なのか聞かせてもらおうか」
「……ペロロンチーノ。この村がそこの騎士達に襲われていたのでな。助けに来た者だ」
ガゼフは驚嘆した。
間に合わなかったガゼフの代わりに村を救ってくれたというのだ。ならば、武装して近づく我々に対して村を背に庇い、警戒するのも頷ける。
本来であれば、知らずにとはいえ王国戦士長という地位の高い者に刃を向けたことは、罪に問われる事案だ。しかし、この場に口うるさ

い貴族どもはいないし、ガゼフもつまらないことで一々腹を立てるほど度量の小さい男ではない。
むしろ、どのような身分の者であろうとも礼を尽くすべきだと、馬を降りようとしたところで部下のひとりが口を挟む。
「戦士長！　あ、あの者……人間ではありませんッ！」
ガゼフよりも後ろにいたおかげか、いち早く視界を回復させた部下が引き攣った声で報告する。
黄金色の草原に佇むその姿は、確かに人間のそれではなかった。全身を覆い尽くしている羽毛は夕日に照らされ赤く染まっている。頭には猛禽類を思わせる立派な嘴が生えており、鋭い鉤爪が伸びるその手には、全長が身の丈ほどもある大きな弓を携えていた。
部隊全体に緊張が走る。
「おま……失礼。貴殿がそこの騎士も殺したのかな、ペロロンチーノ殿」
「ああ、そうだ。既に村は襲われていたから仕方なく、な。そいつは見張りだったようだけど……」
それを聞くと今度こそ馬から飛び降りて、重々しく頭を下げた。
「カルネ村を救っていただき、感謝の言葉もない」
長年に渡りガゼフ戦士長の元、共に王国に仕えてきた隊員達はガゼフの人柄をよく知っている。
だが、まさか。このような異形の者にまで敬意を示すとは思わなかった。
暫し沈黙が流れる――
「……。お前らの目的は騎士の討伐だと言ったよな？　なら、目的は達成されたろう。さっさと帰ってくれないか」
こちら側に敵意が無いことを示すと、相手も少し姿勢を崩し、弛緩した雰囲気を漂わせた。
「すまないが、この目で実際に村の様子を確認するまでは、王の御命令を遂行したとは言えないのだ。ここを通してもらいたい」
「……この村は襲われたばかりだ。村の人達の気持ちを思うのであれば、お引き取り願いたいのだが？」

「仰るとおりだ、ペロロンチーノ殿……しかし我々にも責務がある。村の状態を確認したらすぐに立ち去ることを約束しよう」
嘘は言っていない。しかし、村に入れさせたくない理由が他にあるとガゼフは直感した。
「はぁ……そもそも、本当に王の命令だとか、王国戦士長だとか、証拠はあるのか？　……いやまあ、見せられたところで俺には判断出来ないけどな」
「もちろん証拠はあるが、信用出来ないのはお互い様だな……どうしてもここを通してくれる気はないか？」
「ああ。通さない。素直に帰るんだな」
「どうしてもか……」
「どうしてもだ」
再び沈黙が流れる――
「……どいて頂けないのであれば、力ずくで通させてもらおう」
「じゃあ、全員ここで死ぬことになるぞ？」
その言葉はハッタリではないのだろう。正直、勝てる相手とは思えない。
あのモンスターは空中から矢を放ってきた。背中に生えた翼で自由に飛び回り、決してこちらの得意とする剣の届く距離では戦ってはくれまい。
では、弓での応酬となる場合はどうか。通常であれば、遮蔽物のない空中に浮かんだ時点で射落とせばいい。〈飛行（フライ）〉を使った人間相手であれば、だ。はたして空飛ぶ鷲を撃ち落とすことが出来る者がこの中にいただろうか。
それに、極めつけは矢に込められた魔法だ。あのような爆裂を伴う火柱は、皆目見当もつかない。ただでさえ肉体的能力で人間に勝るモンスターが、高位の魔法を行使する。これがどんなに恐ろしいことか、想像しただけでも戦慄する。
さらには、奴がたった一人だけとも限らない。伏兵を警戒せずにはいられない。
奴の言葉を信じたい気持ちはある。その言は村を守ることに終始

一貫していて、誠意も感じられたからだ。
であれば一度こちら側が折れ、日を改めて確認しに来れば無用な争いを避けられるかもしれない。だが一方で、得体の知れない存在を信じたばかりに、背後から狙撃されでもしたら目も当てられない。
奴の目的は一体どこにあるのだろうか。純粋に村を、人間を守ること――それは楽観的すぎる。どう見てもあれは人間を襲う側の存在だ。
先程の直感は無視出来ない。
我々を村に入れたくない他の理由……例えばモンスターの多くは人間を食料と見なす。であれば、今まさに村中で食事の最中かもしれない。
嫌な想像ばかりが次々と浮かんでくる。
戦力が足りない。情報が足りない。時間もない。
ペロロンチーノの弓を持った腕がゆっくりと上げていく。
「……お前とは平行線だな。ならば、仕方がないというやつだ」
その言葉に覚悟を決め、ガゼフは剣に手をかけると一息に抜き放つ。
そして、その刃をペロロンチーノに突きつけた。
「貴殿に一騎打ちを申し込む!!」
「……？」
今まで獰猛な眼光を放っていた目が、一瞬見開かれたように思えた。
「受け入れていただけるのであれば、後の者たち全員を一騎打ちの立会人とさせて貰えないだろうか」
「戦士長！　それは！」
「俺達も戦います！」
「最後まで戦士長と共に！」
我らが戦士長は己の身も顧みず、部下を守り、この場を切り抜けようと。そう言うつもりか、と悟った隊員達が次々と声を張り上げる。
「この情報を王都へ持って帰るんだ、いいな？」
ガゼフはそんな部下達を振り返りもせず小声で返した。

「私が勝てばここを通してもらう。負ければ部下達は必ず引き下がらせる。さぁ、ペロロンチーノ殿！　返答は如何に!?」
「はぁ……そっちが退くなら俺からは手を出すつもりは無いんだがなあ。それなら一騎打ちした後で結局皆殺しにされるとは考えなかったのか？」
「フッ。私の勘が正しければ、ペロロンチーノ殿はさぞ名高い戦士とお見受けする。ならばその誇りに掛けて反故にはされまい」
　それを聞いたペロロンチーノは一度視線を外し、どこか一点を見据えた素振りをしたかと思うと、手をヒラヒラと泳がせた。
「まったく……その真っ直ぐ過ぎて不器用なところ、誰かさんみたいで懐かしいな……。わかったよ、通っていいぞ」
「一騎打ちは……」
「もういいって。脅すような真似をしてすまなかったな。さあ、とっとと行ってくれ」
　不審な目線を浴びせられながらも、ガゼフ一行を見送ったペロロンチーノはひとりぼやく。
「それにしても来客の多い村だなぁ……」

◇

　カルネ村にほど近い茂みの中、息を潜める者たちが居た。その数45名。
「隊長！　ガゼフ・ストロノーフが現れました。真っ直ぐカルネ村に向かっています」
「よし……獲物が檻に入るまで決して悟られることの無いよう、注意を怠るな」
　陽光聖典隊長であるニグン・グリッド・ルーインはこの瞬間をずっと待っていた。
　というのも騎士に村を襲わせ、おびき寄せることに成功するも、包

囲するまでには至らず、これまで４度取り逃している。
だがそれも今日で最後。
ニグンは視界に捉えたガゼフ達王国の一行の動きに注視する。
カルネ村まであと少し、そんな局面で急にガゼフ達は馬を止めた。
まさか、こちらの策がバレたのか。ニグンの額に薄っすらと汗が滲みだす。
しかし、どうやら様子がおかしい。ここからでは見えないが、足元の何かを調べているようだ。
ガゼフ達の一挙手一投足に目を見張る。
次の瞬間、突如として火柱が吹き上がった。自然の発火ではありえない、魔法的現象。
そしてニグンはひとつの魔法の名に思い至る。
「〈焼夷（ナパーム）〉……だと……!?」
知識としては知っている。周囲を明るく照らす爆発的火力、１０ｍの高さにも及ぶ円柱状の火柱。
そしてその魔法は第５位階に存在するということを。エリートの中のエリート、陽光聖典の指揮官であるニグンでさえ、そんな高位な魔法は扱えない。
まさか本国からの応援か。
確かにこの任務は、亜人種の村落などの殲滅を得意とする陽光聖典とって、適切な采配とはいえない。応援を寄越すこともあるだろう。
しかし何の連絡も無いだけでなく、我々の作戦を台無しにして攻撃を仕掛けるなど、許されることではない。
胸を炙られるような焦燥感がニグンを襲う。
だが、それも一瞬。中空から舞い降りるひとつの影を見つけ、あんぐりと開けた口から空気が漏れた。
「……バード……マン……?」
なぜ、このようなところにバードマンが。
バードマンは手強い。背中に生えた翼で縦横無尽に飛び回り、ひとたびその鋭い鉤爪に掴まれば、成人男性をも軽々しく宙へ連れ去ることが出来る。

その嘴も脅威だ。突かれれば、鉄の鎧に風穴を開けることも容易だろう。
「……ここ最近でバードマンの目撃情報はあったか？」
「いえ、最近はおろか、この近辺での目撃情報は記録に無いはずです……」
状況から考えて先ほどの〈焼夷（ナパーム）〉は、あのバードマンが放ったものだろう。
で、あれば、これは脅威だ。都市の。国家の。いや人類存続の危機。
もしやこれが予言された破壊（カタストロフ・ドラゴンロード）の竜王の復活なのか。
そこまで考えて頭を振るう。
ふぅ、と細く短い息を吐き出すと、懐に収まったスレイン法国の至宝の一つを上から押さえつけ、その存在を確かめる。今回のガゼフ抹殺の任に就く際に、神官長から必勝の切り札として渡されたものだ。
それはクリスタル。その中に封印されているのは、最高位天使・威光の主天使（ドミニオン・オーソリティ）を召喚する魔法。かつて、魔神と言われる存在が大陸中を荒らしまわった際、魔神の一体を単騎で滅ぼした最強の天使だ。
威光の主天使（ドミニオン・オーソリティ）が放つ第７位階魔法〈善なる極撃（ホーリースマイト）〉をもってすれば、バードマンなど葬るのは容易い。
「ただし動きを封じる必要がある……か」
いくら強力な攻撃魔法でも、その射程内に相手を収めなければ意味が無い。
視線の３００ｍ先、状況は硬直状態。狙うならば決戦の火蓋が切られた瞬間。天使の数でバードマンを拘束し、ガゼフもろとも善なる極撃（ホーリースマイト）の餌食にする……！
「各員傾聴。戦闘の開始を合図に天使を召喚……バードマンを捕らえろ。最高位天使を召喚しガゼフもろとも吹き飛ばす。汝らの信仰を神に捧げよ」
急な作戦変更指示。しかし的確な指示が下されたことにより、隊員全員の顔に動揺は微塵もない。
その表情を見渡し、ニグンは作戦の成功を確信するのであった。

――様子がおかしい。
ガゼフが剣を抜いたところまでは良かった。しかし、バードマンがこちらを見た気がした。いや、確かに目が合った。
奴はこの距離で気付いたのか……？
再びガゼフに向き直り、数度言葉を交わしたかと思うと、驚いたことにガゼフ一行はそのままバードマンの横を通り過ぎていく。
「なぜだ！　なぜ、人類の敵を前にして戦おうとしない！　ガゼフ・ストロノーフッ!!」
怒気を漲(みなぎ)らせ唸る。
（まさかバードマンと取引を?!　愚かだ。愚かすぎる。大局も見えぬ王国のクズどもめ！）
まだまだ罵倒を浴びせ足りないが、今は考える時だ。思考を巡らせろ。
――作戦は続行か？
いや、既にこちらに気がついている。奇襲は効かない。
――では撤退か？
ありえない。人類に仇なす人外の脅威。それを前にして、人類の守り手である陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインが逃げ出すわけにはいかない。
――勝算はあるのか。
ある。魔神をも倒す必勝の切り札が。
――奴は、群れからはぐれた、放浪するバードマンか？　……斥候の可能性は？
奥歯を噛み締め、絞りだすように告げる。
「……撤退だ！」
隊員の間に動揺が走る。
予想外の行動とは言え、強敵はガゼフと謎のバードマン、1人と1体という状況は変わらないはずなのに、と。
部下からは口々に追撃を進言されるが、ニグンはそれを黙らせる。
ニグンは揺るがない。

なぜならば、知っているからだ。人間は弱い。この世界には自分たちを上回るモンスターが多くいることを。
乱入者が同じ人間だったなら、退くこと無く任務を完遂できていただろう。
しかし状況は違うのだ。
「5班に分かれて撤退する。あれが斥候の可能性も考慮して、遭遇には十分注意しろ！　必ずこの情報を持ち帰れ！　散開！」

◇

「行ったか……」
あの集団は何だったのだろうか。
戦士長の前に降り立った瞬間から、〈敵意感知（センス・エネミー）〉に予想を超える量の反応があったのだ。
どうやら敵意は俺へだけじゃないような気もしたけど……。追いかけて問いただしてみるか？
いや、それも面倒だ。まあ、元より追い払うつもりだったから、勝手に逃げてくれたのは良しとしよう。
そんなことよりも、だ。
今日、俺がここまで頑張ったのは何のためだ？
そう。言わずもがな、あの少女と幼女のためだ。
さっさと戻ろう。ご褒美の1つや2つぐらい願ったところで罰は当たるまい。
太陽は地平線に飲み込まれ、一日の終りを告げようとしていた。
しかし、ペロロンチーノの一日はまだ終らない。
ペロロンチーノは村へ戻ってからの妄想に期待を膨らませつつ、心と翼をはためかせた。

第五話：爆撃の翼王

夜の帳が下りて、辺りはすっかり闇に包まれた。
謎の集団が去っていくのを十分確認したペロロンチーノは再び村へと舞い戻る。
村の中央では真剣な表情の戦士長と村長が何やら話をしている。どうせ内容は村で何が起こったか、そしてあのバードマンは何者なのだ、という辺だろう。
もういい加減、他人から自分がどんな風に見られるのかが大体分かってきた。
ペロロンチーノが近寄るとガゼフは村長との話を切り上げ、改めてペロロンチーノに頭を下げる。
それにしても、こうして間近で見てみるとなんともイイ男だ。
日に焼けた彫りの深い顔立ち。その黒い瞳には鋭い剣の輝きが宿っている。胸当て（プレストプレート）の上からでもその体が分厚い筋肉で覆われているのが分かる。そんな屈強という言葉がよく似合う男だ。
他の隊員達もそうだ。鼻筋はよく通り、ほとんどが金髪碧眼。どこぞの映画俳優だと言われても頷き、男であっても見惚れてしまうのは仕方がないことかもしれない。
それがこの世界の水準なのだろう。村人達だって一様にして皆整った顔立ちをしているのだから。
ペロロンチーノに残る僅かな人間の残滓が少し嫉妬しているような気がした。
だが、なにも男に限った話ではない。エンリ・ネム姉妹だってかなりの可愛さだ。鬱々とした気分が一転、まだ見ぬ美少女たちへの期待で胸が高鳴るのだから現金なものである。
どうやらガゼフらは騎士の全身鎧の一部を回収して、これから村を発つらしい。
なんでも、「すぐに立ち去るという約束をしたからな」ということだった。
（そんな約束しましたっけ？）

ともあれ、そんなガゼフ一行の後ろ姿を見送った後、村長が口を開く。

「ペロロンチーノ様……あまり綺麗とは言えませんが、空き家をご用意出来ました」

◇

村長が用意してくれたのは村の外れにある暫く誰も住んでいなかった家だ。集落の中心から遠く離れているのは、やはり心理的に近くで寝起きしたくないというものなのだろう。

まあ、そんなことは気にしない。そんなことよりも、さらにひとつ村長に頼んだことがあった。

夕飯もご馳走になることになったのだが、それをエンリとネムの二人に持ってきてもらうように、さり気なく、ごくごく自然にお願いした。

本当の狙いはそっちにあったなど誰も気付くまい。

食事が届くまでまだ時間がある。暫し姉妹の攻略法について考えてみるとしよう。

まず一言に姉妹と言っても、その形態は千差万別である。

ペロロンチーノは目を閉じると脳内データーベースへ静かにダイブしていく……。

やはり基本となるのは、主人公を挟んで年上の姉と年下の妹だろうか。この場合メインヒロインは同級生が別にいて、姉妹はサブヒロインとなる。

次に3姉妹。長女がおっとり、次女が同級生でツンデレ、三女がクーデレ。このパターンは姉妹要素を全面に押し出しているタイトルによく見られるのではなかろうか。

勿論、双子や三つ子も忘れてはならない。見た目が同じようでも中身が全く違うのはもはや定番である。

関係のあり方も様々で、オーソドックスで言えば級友や幼馴染の姉妹。
はたまた、再婚した親の連れ子の姉妹、つまり義理の姉妹。
捻りがないが、実の姉妹。（姉がいる身としてはなかなか認め難いところではあるが、有りか無しかで問われれば、エロゲでなら有りだ。大有りだ）
余談だがペロロンチーノはオールジャンルプレイヤーである。
しかし、その中でも姉妹モノはよく選ぶ傾向にある。それはなぜか――
妹というのはぶっちゃけロリ要素の塊だからである。しかし、だからといって妹属性を蔑ろにしているわけではない。「おにいちゃん」とか「にぃにー」とか呼ばれたい。「バカお兄ぃ」でもいい。その響きは荒んだ心を浄化し、自然と笑顔を作らせる素晴らしいものだ。
では、妹属性＝ロリが成り立つかと問われれば、もちろんそれは否である。共存している場合も多いが、似て非なる別物なのだ。
と、まあ。姉妹というのは、エロゲを語る上で切っても切れない要素の一つであると言えよう。
そして何より、姉妹の魅力はドンブリである。分かりやすく言うなら、姉妹丼だ。
嗚呼、話が脱線してしまう。
今、考えるべきはエンリ、ネム姉妹のことだ。
しっかり者で気丈な一面を持つ姉のエンリちゃんと、まだまだ甘えん坊でいつも姉の後をついていくネムちゃん。
そんな二人に一致した作品が確か合ったはず……
そう、それは――夏休み、親の実家へ一人帰省した際に出会った近所の姉妹達との甘い物語――
作品自体は数あるタイトルに埋もれてしまうような良作とも駄作とも言えない、ごく普通なものだ。
ペロロンチーノはいつものように妹ルート、姉ルート、さらには従姉妹ルートを滞り無く消化していった。
残すシーンもあと少し。だがハーレム姉妹丼エンド、これが難関

だった。
基本的にいずれか一人のキャラにターゲットを絞れば、エンディングまで辿り着くことは容易だ。
しかし、ハーレムを狙うには絶妙なさじ加減が必要になる。単純に八方美人に振る舞えば、結局誰にも相手にされなくゲームオーバーとなるからだ。
ことは慎重に運ぶ必要がある。ペロロンチーノは脳内の更に深い記憶を漁っていく。
……人懐っこい妹を先に籠絡した場合、妹の幸せを願う姉は身を引いてしまった……。
……まずは姉ルートを盤石なものとした後に妹にフラグを立てる。これだ。
つまり先に攻めるべきは姉、エンリちゃんだ！　ペロロンチーノは強く確信した。
そこまで思考を巡らせた時、部屋の扉をノックする音が静かに響く。
「どうぞ！」
「し、失礼します……」
慌てない。慌てない。高鳴る衝動をぐっと抑えて、ここは大人な振る舞いをしなくては。
命の恩人、村を救った救世主という立場を使えば無理やりに従わせることはできよう。
しかしだ。仮にも紳士の端くれと自負しているペロロンチーノにとって、それは避けたい。
目の前に現れた少女と幼女は両手にバスケットを下げ、その中に干し肉やパン、蒸かした芋が入った容器が覗いている。
体を清め着替えをしたのか、流石に最初に会った時のような、血の芳しい匂いや鼻にツンとくるようなあの臭いはもうしなかった。
結局のところ、エンリとネムの両親は既に殺されていたため助けてやることは出来なかった。
葬儀の後も泣き腫らしたのか、その目は軽く充血している。

「あの……お食事をお持ちしました」
「ありがとう。あ、ところで二人はもう食事を済ませたのかな？」
「……いいえ。まだです」
テーブルの上にバスケットを置いた姉のエンリは、入ってきたドアの前までそそくさと戻りながら答えた。
まずい。ここで帰してしまっては計画が全て水の泡だ。
「そ、そうだ！　なら、一緒に食べないかい？　一人で食事をするのは……その、寂しいものだし」
村の恩人に提供される食事とあって、昼に村長宅で振る舞われたものと同様に、見た目はともかく十分な量がある。村の生活水準から察するに、普段食べるよりも豪華な食事であるといえるだろう。
そんな誘惑に先に食いついたのは姉エンリではなく、妹のネムだった。
「食べていいの!?」
反射的にエンリが「ネム、止しなさい」と窘めるが、目の前の美味しそうな匂いには耐えられなかったようだ。
「もちろんだよ！　さあエンリちゃんも一緒にどうぞ」

食卓を囲み、色々な話をした。
普段の食事のことから、畑仕事の内容、森に入って薬草を採ることもあるらしい。
特に娯楽もなく、一生のほとんどを村の中でずっと過ごす生活というのは寂しく、少し気の毒にも思えた。
しかし、昨日までのペロロンチーノの生活とどっちがマシかを考えると悪くない気持ちもしてくる。
そしてエンリやネムの小さい頃の話になった時だった。
両親のことを思い出したのか。いや、考えないようにしていたのだろう。感極まり、エンリの頬を涙が伝う。
ペロロンチーノはおもむろに空間からハンカチを取り出すと、その手をゆっくりとエンリの顔に近づけた。

目の前に迫る鋭い爪に、エンリは一瞬驚いてびくりと肩を震わせたが、すぐに意図を理解しハンカチを受け入れる。
ペロロンチーノは不器用ながらも、優しく頬の涙を拭ってやった。
「ありがとうございます。ペロロンチーノ様……」
その表情には緊張と驚きと、そして笑顔があった。
(エンリちゃんかわぇぇぇ)
「……やっと笑ってくれたね」
くっさい。実際口に出してみるとなんて恥ずかしいセリフなのか。身悶えしそうになる。
しかしエンリは、その言葉にさらに笑顔で返した。
(いい。実にいい娘です)
ペロロンチーノはハンカチをエンリの手に握らせると、そのまま空いた手をエンリの頭にのせ優しく撫でてやる。
完璧だ。頭ナデナデは攻略の基本。今まさに親密度ゲージがぐんぐん上昇している頃であろう。エロゲでならそうだ。
(いや待て……ユグドラシルの能力が引き継がれているのだから、エロゲという要素も組み込まれていてもおかしくないのでは!? 実際、この世界に来る直前までやってたのはエロゲなんだし)
そんなことを頭の片隅で思いつつ、傷つけないように優しく撫でていると、嗚咽する声が聞こえてくる。
「うぐっ……わたし……あの、ごめんなさい……」
エンリは泣き続けた。一度は止まった涙だったが、再び止まることはなかった。
そんな様子を眺めながら撫で続けていると、脚に何かがしがみつく感触が――ネムだ。
なんということだ。ついついエンリちゃんに夢中でネムちゃんをなおざりにしてしまった。「ネムちゃん、あのね。お兄さんはエンリお姉ちゃんをいじめているわけじゃないんだよ」と弁解するまでもなく、はたと気づく。甘えたいのだ。そして、自分も撫でて欲しいと涙目が訴えている。少なくともペロロンチーノにはそう見えた。

どのぐらいの時間が経っただろうか。日中はポカポカと日差しが温かいが、日が沈むとまだ肌寒い。そんな時期だ。
ネムは泣きつかれ、今はペロロンチーノの温かい羽毛に包まれ膝の上でぐっすり眠っている。
エンリもその温もりを感じる腕に抱き寄せられ、ペロロンチーノに体を預けている。
面前に広がる光景に息を飲むペロロンチーノ。
股の上には小さく丸まった小動物のようなネムの重みがしっかりと感じられる。
そして腕に抱えられたエンリの息遣いは妙に色っぽい。
この状況で色々と奮起してしまわないペロロンチーノはここにはいない。
しかし――
「だいぶ遅くなってしまったね。家まで送るよ」
最後にもう一度頭を撫でてやる。顔を上げたエンリの頬は仄かに赤みが差していた。少なくともペロロンチーノにはそう見えた。

◇

姉妹を送り届けたペロロンチーノはひとり振り返る。男ならあそこはいくべきだったか。
――いや。傷心した乙女を勢いで押し倒すなんて無粋な真似は出来ない。あれで良かったんだ。チャンスはまだある。そんな今だ興奮冷めやらぬ己を慰める。
そしてペロロンチーノの長い一日がようやく終わったのだった。

この世の強者
第六話：探索その1

「知らない天井だ……夢じゃない」

ペロロンチーノは屋根の隙間から差し込む日差しを眺めながら呟く。

寝て起きてみれば、そこはいつもの自分の部屋――そんな可能性も考えなくはなかった。だが視界に広がるのは石で作られた壁と木で骨組みされた天井だ。ここはカルネ村の離れにある空き家。背中の窮屈さが鬱陶しい。そういえば昨日の朝もこうして仰向けで目が覚めたことを思い返す。

そう、昨日は様々なことがあった。

知らない草原で目が覚めたと思えば、体は昔ハマっていたＤＭＭＯ―ＲＰＧ、ユグドラシルのアバターであるペロロンチーノの体になっていた。

最初こそ困惑したものの、ゲームと同じように……いや、それ以上に自由に使える魔法や特殊技術（スキル）。コンソールを用いないで大空を翔ぶことが出来る翼。全てが新鮮で、驚きで、我を忘れて楽しんだ。

そんな中で見つけたのは小さな村、カルネ村。

まだゲームか夢か現実か、判断のつかなかったペロロンチーノはそこで起きている争いがイベントの一種かと初めは思った。しかし、実際はリアルな虐殺。そこでエンリとネムという姉妹を助けることに成功し、ついでに村も救った。食欲をそそる血の匂い、人を殺すことで感じた愉悦。それは自分が既に人間を止めていることの証明だった。そしてそんな自分自身の存在がこの世界では異質ということも知った。

近辺の情報を村長から貰い、あとは助けた姉妹とイチャイチャしたいなーと思っていたところで邪魔が入る。正直面倒だった。さっさと追い返そうとするが、しぶとく引き下がらない。そんな男が王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。どうやら本当に村を助けに来たようで、

先に折れたのはペロロンチーノだった。また、正面から対峙した戦士長とは別に遠くからこちらを観察する集団も……結局のところ、彼らが何者だったかは分からない。

だがそんなことよりも――

昨晩の充実した記憶が蘇る。

股の上で丸まる小動物のような温もりと重み。その顔には無垢な寝顔を湛え、まるで天使のようだった。落とさぬようにと添えた手は確かに柔らかい感触を捉えていた。

そして腰から腕を回し、抱き寄せた少女。ペロロンチーノからすれば、か細くも感じられる体だった。だがその確かな肉感はまさに少女が女性へと成長している過程を示していたと言えよう。

……ふぅ。

今日もいい天気だ。

ペロロンチーノはドアを開け放つと息を大きく吸い込み、そして吐き出す。風は草と土と家畜の匂いを運んでいる。

手足と翼を大きく広げて伸びをすると、ポキポキと心地よい音が響く。

目の前に広がる青と緑の世界に十分満足すると、ペロロンチーノは大空へと舞い上がった。

◇

カルネ村で得られた情報には限りがあった。

もう少し大きな集落、出来れば街にでも行って、これからの方針を決める足がかりを見つけたいところだ。だが、昨日の村長との話で分かったように、迂闊に人間のコミュニティと接触するのはそれなりに危険が伴うかもしれない。であればこの地を離れ、バードマンに忌避感の無い亜人種、もしくはバードマンの生活圏を探るべきだろうか。

とはいえ、せっかく手に入れた寝床だ。このまま暫くは活動拠点を

カルネ村に置いて、近場からゆっくりと世界を見て回るのも悪くは無いだろう。
さてと。まだ見ぬ美少女を探しにいざ、トブの大森林へ――
村のすぐ北側から広がるトブの大森林は、遠くに見えるアゼルリシア山脈の南端の麓を取り囲むように広がる森林である。
これだけ広大な森だ。きっと居るに違いない。お目当ては森妖精（エルフ）だ。
ペロロンチーノは上空から森を俯瞰する形で生物の気配を探していく。だが、開始早々に大きな失敗をしていたことに気付かされる。
どこもかしこも密集して自生する木々は太陽の恵みをいっぱいに得ようと、枝を上へ横へと伸ばし、絡み合い、青々とした葉を蓄えている。大型生物の姿はおろか、地表部分もまともに見通すことが出来なかったのだ。せっかく得たこの翼があるのに、まさか広大な森の中を歩いて探索しようなんて気持ちにはさらさらなれなかった。
それにユグドラシル時代、森妖精（エルフ）の森に進入するには専用ＮＰＣの案内を受けるか、イベント用のアイテムの所持が必要だったはず……そんなことを思い出す。まあもちろん、全てがユグドラシルと同じだとは思わないが、結界に守られ外からの発見は困難であっても不思議ではない。
出鼻をくじかれ、ため息をひとつ。それでもまあ、雄大な空の遊覧飛行は2日目にしてもまだ飽きることはない。
バードマンの水平飛翔の速度はかなりのもので、程なくして山脈の麓にある大きな湖の上空に到達する。やはり文明が栄える条件に水は欠かせないためか、湖と湿地が入り混じった場所には点々と建造物も伺えた。しかし文明といっても人間の村よりもはるかに原始的な造りに見えるそれらは、ペロロンチーノの欲している情報源としてあまり期待が出来なさそうに思える。
「んーむ。蜥蜴人（リザードマン）とトードマンか……もう一巡りして何もいなかったら接触してみようかな」
上空から確認できた種族は2種類。どちらもそこまで興味が湧いてこない。ペロロンチーノは上空で大きく旋回すると進路を東に変

え、湖を後にした。

しばらく飛行を続けると、ペロロンチーノの目の前に奇妙な光景が現れる。それは森の一部に、ぽっかりと穴が空いたような木々が枯れ果てた場所だ。火事の痕か病気の類か……。地表に舞い降り、その様子をじっくり観察していると――

「ね、ねえ君！　なにしてるのさ！　危ないよ！」

「うおおっ!?」

背後から突然掛けられた声に驚き、思わず声を上げるペロロンチーノ。それもそのはず、高度を下ろす前に広い範囲ではないが特殊技術（スキル）を使用して索敵を行っていた。まさかこんな間近から声が掛かるとは夢にも思わない。

慌てて上空へ翔び退き弓を構える。看破出来なかった隠密系特殊技術（スキル）の使用者か、索敵範囲外からの転移術者か。緩みきっていた緊張感を引き締め直す。

「わっ、わわ、待って待って！　撃たないで！　驚かすつもりじゃなかったんだ！」

そこに立っていたのは、人ともエルフとも表現できそうな姿の少女だった。より正確には超がつくような一級の芸術家が木から作り出した裸婦像のように、肌は磨かれた木の光沢を持ち、髪は新緑を思わせる鮮やかな緑。そして大事な所だけが葉に隠されている。これだけ情報があってペロロンチーノにその正体が判らない訳がない――森精霊（ドライアード）である。

言葉を忘れてただ見つめるペロロンチーノに彼女は続けて話しかける。

「と、とにかく、そこはとーっても危険なんだ！　こっちこっち！」

「森精霊（ドライアード）……これもいいな……」

古い森の木に宿る精霊たる森精霊（ドライアード）であれば、普段は自らの木の中に姿を隠し、木と一体化しているため発見できなかったのも納得がいく。

すぐにでも今は無き百科事典（エンサイクロペディア）に色々と書き込みたい衝動を抑え込み、ペロロンチーノは彼女の手招きに応じた。
「……えっと、君、前に来た人じゃないよね？」
「ん？　俺は初めてここに来たけど、前に来た人って？」
「そっかー……そうだよね。んとね、前に魔樹の一部が暴れた時に、それをやっつけて封印してくれた人達の一人かなって……でも違うみたいだね」
ペロロンチーノの頭に疑問符が浮かぶ。
（魔樹？　封印？　それに自分と間違えたということは前にバードマンがここにいたってことか？）
「どういうことか、詳しく聞かせてくれるかな？」
「いいよ。んーと、……若い人間が3人、大きい人が1人、年寄り人が1人、君のような羽の生えた人が1人、ドワーフが1人、全部で7人の人達さ。世界を滅ぼせる魔樹を倒してくれるという約束をしてくれたんだけどね……」
その森精霊（ドライアード）――ピニスン・ポール・ペルリアは語ってくれた。
世界を滅ぼせる魔樹――大昔、幾多の化け物が突然空を切り裂いてこの世界に現れた事があった。その化け物それぞれが世界を滅ぼせるほどの力を有していたが、竜王達との戦いの末、全て討伐された。しかし、実際には一部が深い眠りに就いたり封印され今なお生きているという。この木々が枯れ果てた場所の中央にいる化け物もその内のひとつ。名は魔樹ザイトルクワエ。そして時折体の一部が目覚めて暴れることもあるという。
以前、魔樹の一部が暴れた際はその7人組がこれを退治し再び封じ込め、もう一度これが目覚めたときには戻ってくるという約束を残していったという話だ。
先ほどの警告の意味を理解し、ユグドラシルの記憶を思い返す。
（魔樹……イビルツリーのことか？　ザイトルクワエは聞いたことも無い名だ。それにしても世界を滅ぼせる、か……流石にワールドエネミーなんてことは無いよなあ……）
「さっき危険と言っていたけど、今はまだ封印されて眠っているんだ

ろ？」
「それがそうでもないんだ……。本体が目覚めるために周りの木々の命を吸い上げているんだ。ここのところ枯れ木の範囲がどんどん広がってきてて……蘇るのも時間の問題だろうね。次の太陽が昇った時か、その次か……はたまたもっと遅いのかもしれない。でも、もう少しで完全な状態で蘇るよ……。自分の本体の木から長期間離れる事も出来ないし、君にその７人を探して来てもらいたいんだけど……」
「ん、……それって何年ぐらい前の話なんだ？」
「何年……？　太陽がたーくさん昇ったぐらい前……かなぁ？」
　ペロロンチーノは思わずうなだれる。時間の概念がまるで違うらしい。何十年どころか何百年も生きる彼女らの感覚から考えれば、その７人組が今だ生存している可能性は低いだろう。
「でもまあ、カルネ村にも近いし放置は出来ない……か。面白そうでもあるし、倒せるようなら倒してみるさ」
「ええーー!?　倒すって君がかい？　相手は世界を滅ぼし尽くすことも出来る魔樹だよ!?　前に来てくれた７人組だって、その一部とも苦戦したんだからね!?」
　この世界における強者。これからの立ち振る舞いを考える上で知っておかなければならないことだ。ピニスンの言からすれば、その７人組も十分な実力者なのだろう。彼らでは勝てない相手、魔樹を物差しにすれば己の実力を測れるというものだ。
「ここの中央だったよね？　んじゃ始めてみますか――《下位狩猟具作成　蟇目矢（ひきめや）》」
　ペロロンチーノの右手に生成されたのは、鏃の代わりに円柱状の朱い筒がついた矢だ。それを枯れた木々が広がる中央めがけて射る。
　ギュィィィィィンン――
　静寂に包まれていた森に空気が割れんばかりの、けたたましい音が鳴り響く。蟇目矢は周囲の敵対値（ヘイト）を集める効果がある補助効果を有する矢だ。パーティ戦において後衛であるアーチャーが使用する機会は決して多くないが、前衛が崩れた時などには一時的に敵対値（ヘイト）管理

する際に使用された。
「ッ！　急になんて音を出すんよっ！　君ぃ!!　魔樹が気付いたら……あわ、うわわああっ！」
　ピニスンが猛烈な抗議を始めたところで大地が揺さぶられた。
　地響きと共に地中から現れたのは高さおよそ１００ｍを超える巨木。だがもちろんただの巨木ではない。その巨体に似合った木の枝めいた触手は６本。そのどれもが長さ３００ｍを超えている。幹の下腹部ともいえる辺りには巨大な鋭い牙を生やした口が、その上部には邪悪な目玉が並んでいる。歪んだトレント。ザイトルクワエがその全貌を現した。
「おおー……こりゃまたでっかいなー」
「な、なな何呑気なことといってんのさっ!!　あ、あわわわ……ほほ本体がっ本体が蘇っちゃったじゃないかっ!!　どうしてくれるのさっーー!!」
「まあ、これならなんとかなるかな。きっと削りきれるだろう……たぶん」
　慌てふためくピニスンの頭にポンと手を乗せたペロロンチーノは落ち着いた口調で宥めにかかる。だが手の下の少女姿の精霊は、涙目になりながらも怒りを込めた苛烈な瞳で睨み上げる。
　嗚呼。どんな表情をしていたって絵になるのだから、美少女というのはたまらない。
　ペロロンチーノはその熱烈な視線と、もうひとつ。触れることが出来たという事に満足して、俄然やる気を出していた。というのも具現化した森精霊（ドライアード）の姿が実体なのか霊体なのか、それによって触れることが出来るのか出来ないのか、彼にとっては重要なことだったからだ。
　その間にもザイトルクワエは触手を器用に使い、周りの枯れ木を引っこ抜いては口に運んでいる。
「ところでピニスンちゃん、君の本体ってどっちにあるの？」
　まるで忠告を聞こうとしないこの男に対して、まともに抗議するのも無駄だと諦めたピニスンはわざとらしい大きなため息を吐いて方向だけを指し示す。

ペロロンチーノは鷹揚にひとつ頷き、魔樹ザイトルクワエの面前に躍り出たのだった。

◇

ユグドラシルにおいて、飛行状態で戦闘を行う事は勧められたものではなかった。

ただ直線的に飛行する場合、『飛行用コンソール』の操作は簡単だ。というのも動かす必要が無いからだ。しかしながら、ひとたび戦闘となれば状況に応じた立ち回りが必要なために『飛行用コンソール』を複雑に操作しなければならない。そこに魔法や特殊技術（スキル）を発動させるための『アイコン』操作が加われば、難易度は飛躍的に高まる。確かに毒沼や溶岩といった地形ダメージを回避するメリットには繋がるが、遮蔽物がなくなり狙われやすくなるというデメリットの方が大きい。故に囮や誘導、後衛職が一時的に射角を得るために使われる程度だったが――

振り上げられた触手は鞭のようにしなりながら轟音と共に大気を切り裂く。巨大な質量が通り過ぎた空間には周りの空気が吸い寄せられ、乱気流が発生する。

縦横無尽に振り回されるその触手は６本。直撃せずとも巻き起こされる乱流の渦の中では立っていることさえ困難だろう。しかし、その領域を器用に掻い潜る影がひとつあった。

影は針の穴を通すような見事な回避をしばらくみせた後、触手から逃れ上昇していく。

「ふーっ！　神回避だったろ、今の！」

猛禽類を思わせるその顔に表情はない。

だが、抑え切れない高揚感を全身から醸し出していた。

ペロロンチーノは２対４枚の翼を巧みに動かし上空５００ｍ地点で静止する。眼下には巨大な魔樹ザイトルクワエを捉え、その距離、

直線にして７００ｍ程度。
「攻撃範囲は周囲３００ｍといったところか……多少伸び縮みすることを考慮しても、ここなら安地だな」
それはザイトルクワエの攻撃がペロロンチーノには届かない事を意味する。対してペロロンチーノの射程はというと……最大で２ｋｍに達した。
しかし、それは彼の神器級武器――太陽を射殺した英雄の名が付く『ゲイ・ボウ』を、同じく神器級装備で全身固めた時に成せる技だ。現状の装備では《射程距離延長》を併用したところでその半分がせいぜいだろう。しかも、彼が異世界に来てから消耗品節約のために使用していた矢師特殊技術（スキル）《狩猟具作成》で得られる矢の有効射程は更に短い。
「流石に出し惜しみはしてられんね」
ペロロンチーノが空間から取り出したのは、手にしたコンポジット・ボウと同様に装飾のほとんど施されていない矢筒だ。この矢筒はゲーム内で販売される消耗品の矢を収納する専用のインベントリとなっている。放てばその分だけ消費するため、補給の目処が立つまでは温存するつもりでいたのだ。
腰に備えた矢筒から同時に４本の矢を抜き取ると、そのうちの１本を弓に番え――射る。
斜め下方に放たれた矢は二重螺旋の軌跡を残しながら一直線に大きな的へと突き進み――直径にして１ｍ以上の大穴を穿った。
「グガァァァァァァッ!!」
ザイトルクワエの苦痛な叫びが森中に響き渡る。触手を伸ばしペロロンチーノを打ち落とそうするが虚しくも空を切るばかりで、まるで届いていない。
手応えを感じたペロロンチーノは続けて３連射。その全ては吸い込まれるようにザイトルクワエに突き立てられ同じような穴が４つ並ぶ。
全盛期、属性ダメージの塊を直接放つことができる『ゲイ・ボウ』を主武器としていたペロロンチーノにとって、この結果はあまりにも地

味だった。射程、ダメージ量、そして何より派手さが圧倒的に足りていない。それでも、特殊技術（スキル）で生成した矢をチマチマ射つよりかは、遥かに効果的ではあるのだが。

ゲームとは異なり高度制限も一切ない環境からの一方的な攻撃。和マンチ対策も施されていない現実の戦い。正直なんだかなー、という思いもある。だが、これは生死を懸けた命のやり取り。ＨＰ１を残して勝てたとしてもそれは勝利ではない。無傷での完全勝利こそ最善。

余計な考えを振り落とし、再び矢を弓に番えたところで異変に気付く。

（何かを撃ち出そうとしているのか……？）

次の瞬間、ザイトルクワエの口から球状の物体がマシンガンのように射出された。比較対象が大きすぎたため豆粒のように見えたそれらは近づくにつれ、その全貌が明らかになる。

成人の人間ほどもある巨大な種子だ。

雨あられのごとくペロロンチーノに迫るが、間近でその触手を掻い潜り抜けた彼にとって、ただ真っ直ぐに飛来するだけの弾丸は止まって見えるのも同然。

直前まで引きつけたところで身を翻し、その回転に合わせ一射。立て続けに迫る弾丸も同様に回避し、《貫通矢強化（ペネトレートショット）》を上乗せした矢を降り注がせた。

壮絶な撃ち合いは程なくして決着を迎えた。ザイトルクワエに開けられた幾多もの風穴は、重なり合い、もはや『穴』と表現出来ないほどに削られ、抉られていた。

足元から声が掛かる。

「ぺーぺろーーーんっ!!」

喜びを全面に押し出したそんな声音だ。

「ペロロンチーノな」

地上に降り立つと、半ば浮いた状態で駆け寄って来たのはもちろん

森精霊(ドライアード)のピニスンだ。
「うんっ！　ぺろろんすごいよっ!!　たった一人であの魔樹を倒しちゃうなんて!!」
そう言うやいなやペロロンチーノの胸に飛び込んでくる。
（おっほぉおお！　いいぞーーこういう素直な反応！）
小柄な精霊の体はペロロンチーノにぶら下がるような形になったが腰に手を回すことで支えてやる。『櫓立(やぐらだ)ちち』のようなスタイルだ。分かりやすく言えば『駅弁』だ。
その肌の色艶から木のような感触も想像できたが、伝わってくる実際の感触はぷにぷにといった女の子特有の柔らかさ。そして顔が近い。
「お、おう！　大丈夫って言ったろ？」
内心の興奮とは裏腹に、急なスキンシップのお出迎えという展開にしどろもどろになるペロロンチーノ。そんな様子から彼の女性経験の豊かさが窺い知れるというものだ。
「あっ！　でもどうしよう。私、こんなお礼を用意できないよ……」
――魔樹を倒したお礼。息のかかる距離で困ったように薄い眉を八の字に曲げる少女は、対価を支払うには身に余ると言う。
ここはカルネ村と違い、他に誰の目もない。であれば、ムフフなお願いを対価として要求することも可能ということだ。なかなかどうして、割と現実的な落とし所では無かろうか。ごくりと喉が鳴る。そう……いつもの様に、選択肢にカーソルを合わせるだけ……。
だが、言葉が出ない。一体なんて言えばいいんだ。直球に『お礼にエッチさせて』とか？　いやいやダメでしょ！　お巡りさん私です。
ではもっとオブラートに包んで言ってみるとして、果たしてその意味するところが通じるのだろうか。この明らかに無垢で、男女の営みの、エッチの『え』の字も知らなさそうなこの少女に対して。というか森精霊(ドライアード)に性別ってあるのだろうか。生涯、自然というものにほとんど触れることがなかったペロロンチーノにとって、植物に対する知識なんて雄しべと雌しべがあるぐらいだ。もちろん教科書はエロゲだ。
仮に意味が通じたとしよう。ワタワタと動揺して顔を真っ赤に染

め上げる姿を見れたら万々歳だ。というかそれはもう勝ちだろう。もしかしたら『助けてくれてありがとう！　抱いて！』なんて言い出すかもしれない。まぁ実際にそんなチョロインなんて存在しないと思うけど。

だが逆にドン引きされてしまったら……。ペロロンチーノは自分の容姿を思い出す。

そして捻り出した言葉はこうだ。

「……お礼なんて要らないよ。俺が勝手にやったことだしね」

なんというヘタレか……いや、我ながら紳士すぎる。だが、恩義は感じてくれているんだ。時間を掛けて雰囲気を作り、自分から言わせるように仕向ければいいのだ。それに変態発言にドン引きされてこの密着状態が解消されるのも困る。せっかくだしもう少し味わいたい……。

「わぁーっ！　寛大だねえ！　そうだ、ちょっと待っててー」

尊敬の眼差しを送ったピニスンは何かを思いついたのか、スルリとペロロンチーノの腕から逃れ森の奥へと消えていく。

（あぁ……）

ペロロンチーノの腕が空を切り、力なく垂れ下がった。

「お待たせーって……どうしたの？　もしかして怪我とかしてた!?」

なにやら両手に抱えて戻ってきたピニスンは、座り込んでうなだれるペロロンチーノの顔を下から覗きこむ。

「いや、なんでもないよ……ん？　俺に？」

「そうだよっ　どう？　お腹すいてない？」

沢山の木の実や果実を大きな葉に乗せ、首を傾げて見上げてくるその姿は精霊と書いて天使と読むに違いない。

出会った当初こそ持ち前の活発で陽気な性格は鳴りを潜めていたようだが、生を受けて以来の悩みの種から解放されたピニスンはそれはもう、ペロロンチーノもついていけないほどのハイテンションだった。座ったと思ったら立ち上がり、周りを飛んだり跳ねたり。ペロロ

ンチーノのあぐらの上にちょこんと座ったかと思えば、腕で捕える前にスルッと抜け出し踊り出す。
昼下がりの木漏れ日の下、二人の時間はそれはもう賑やかに過ぎていった。

◇

ペロロンチーノが一方的なお喋りから解放された時には既に日が傾き始めた頃だった。帰り際に見せてくれた「また会いに来てね」の寂しそうな笑顔は決して忘れないだろう。そして、後ろ髪を引かれつつもカルネ村への帰路についた。
村へ戻ったペロロンチーノは、これからもしばらく世話になる旨を伝えるため、ピニスンから貰った森の恵を手土産に、村長の元へと向かった。
朝から姿を見せなかったためか、少しばかり期待させてしまったかもしれない。そんな村長の気持ちもわからなくもない。村を救ってくれた恩人であるのと同時に、その牙がいつ自分たちに向くか分からない恐怖があるのだろう。なんとも微妙な表情をされたが気付かない素振りで挨拶を済ませた。
友好的に接していれば、いつかは誤解も解けるはず。くよくよする理由はない。なんたって今のペロロンチーノは最高に気分が良いのだから。
借り受けている空き家の前に差し掛かると、窓からは既に室内の明かりが漏れている。不審に思いながらも扉を開けると――
「あっ！　ペロロンチーノさま戻ってきたー！」
「こ、こんばんは。ペロロンチーノ様」
「おっ、こんばんは。エンリちゃん、ネムちゃん。どうしたのこんなところで」
な、なんだこの展開は。下校の際に校門前で待ち伏せする後輩みた

いなシチュエーションは。いや、自宅に上がり込んでいるのだからそれ以上か。自分の知らないところで、まさかここまで関係が発展していたとは。ただいまとか言ったほうがよかっただろうか。
　妄想があらぬ方向へ暴走しそうになるのを必至に抑えるペロロンチーノ。嬉しさのあまり声のトーンが一段上がったような気もするが、ここは努めて平静を装わねばなるまい。
「はいっ、お食事をお持ちしたので中で待たせてもらってました」
「ましたーっ！　もぅ、ペロロンチーノさまどこ行ってたんですか？　朝も昼も探したんですよー」
「こ、こら、ネムっ！」
　なんということだ。朝方何も言わずに出て行ってしまったから、余計な気を使わせてしまったらしい。この様子だと朝も昼も食事を用意して待っていたのだろう。
「それは……その、すまなかった……」
「い、いえっ！　ペロロンチーノ様。私達が勝手にしたことですし……その、どうかお気になさらないでください」
　机の上には昨日と同じようにバスケットにパンと、スープが入っているのだろうか鍋が用意されていた。
「ペロロンチーノさま！　わたしも手伝ったんだよ！　食べて！　食べて！」
「お口に合うといいのですが……」
　こんな可愛い姉妹から手料理を振る舞われる。男冥利に尽きるというものだ。断ろうはずがない。ましてや『外で済ませてきてもうお腹いっぱいです』なんて言えるはずがないのだった。

　昨夜、肌も触れ合う時間を共に過ごしたおかげだろうか。ペロロンチーノと二人の姉妹との距離は更に縮まったように思える。
　談笑の中、ひとつの話題が一区切りついた時にエンリが意を決して切り出した。
「ペロロンチーノ様……その、お羽根が乱れて……」

エンリの指差した所を目で追うと、確かにペロロンチーノの羽根は不揃いに重なっていたり捲れたりしている。まるで寝癖のように。遠目では分からない程度の細かな乱れであったが、よく見れば全身の羽根がそうであった。

「あー。今日はよく翔び回ったからかな……自分では気付かなかったけどボサボサだな」

苦笑交じりに応えるペロロンチーノ。人間であった頃はシャワーを浴びるところなのだろうが、このバードマンとなった今の身体ではどう手入れをすればいいのか分からない。このままにしておくのも身だしなみとしてどうかと思うし、だからといってバードマンの羽根の手入れについて訊ける相手などいない。

大空を羽ばたける翼を手に入れた代わりに些細な問題が付き纏う。こういうところがやはり現実味あるなとしみじみ思う。

まあ、しかし今更だ。羽根の手入れについては姉妹が帰った後にでも考えるとしよう。そう結論付けたところで、エンリが再び口を開く。

「あのっ、もし羽づくろいされるのでしたら、お手伝いしましょうか……？　あっ！　えっと、背中の方とか大変かと思いましてっ！」

少し頬を赤らめながら、そして最後の方はかなり早口になりながらも言い終えると、顔を隠すように俯いてしまった。

（羽づくろい？　毛づくろいみたいなものだろうか。羽づくろいをしてもらう……これはバードマンの常識的に有りなのか無しなのか。……分かるわけがないけど、せっかくの申し出だ。断るわけがない！）

「ん。じゃあ、お願いしようかな」

「は、はいっ」

パッと花が咲いたような笑顔をみせるエンリ。席を立ち上がりペロロンチーノの背後に回ると、指先で翼をなぞるような感触が伝わってくる。なんだかこそばゆい。

最初は恐る恐る触れていたエンリも勝手が分かってきたようだ。羽根の付け根から羽先に沿って優しく指が通される度に、羽根の収ま

りが良くなるように感じる。
「おぉー……案外うまいじゃないか」
　案外どころかめちゃくちゃ気持ちいいです。
「ありがとうございます！　森の鳥達がやってるのを見よう見まねなのですが……喜んでいただけて嬉しいです」
　なるほど。骨格は違えどバードマンの羽根の作りは鳥のものと同じだ。自然溢れる環境で育ったエンリが上手なのも頷ける。
「お姉ちゃんばっかりずるいっ！　私もー」
　今まで様子を見ていたネムも、負けじと姉の横に並んで羽づくろいを始める。そして時折「気持ちいいですかー？」と後から顔を覗かせてくるところがまた微笑ましい。
（だが、ネムよ。そんな前の方はやらなくていいぞ。いろいろとマズイですからっ）

　もはや定位置だと言わんばかりに、ネムはペロロンチーノの膝の上で居眠りを始めてしまった。
「もう、ネムったら。すみません妹が……」
「なに、構わないよ」
「……ペロロンチーノ様。私達、本当に感謝しているんです。村の皆はまだ……」
「ああ。わかっているさ」
「はいっ。ありがとうございます。それと……急にいなくなったりしないでくださいね……心配しますから」
「……分かったよ。約束する」
　まだ背後に立って羽づくろいを続けてくれているエンリの顔は見えなかったが、きっと満面の笑みだったに違いない。
　こうしてペロロンチーノと二人の姉妹の静かな夜は過ぎていった。

第七話：王国の場合

リ・エスティーゼ王国、王都リ・エスティーゼ。古き都という言葉がよく似合う、総人口９００万とも言われる国の大都市だ。

古き良きという意味では、歴史ある落ち着いた佇まいを思わせる景観。それは、骨董品のような深みのある味わいを呈しているとも言えよう。

逆に悪い意味では、繁栄のピークは既に過ぎ去ってゆっくりと衰退を辿る、そんな落ち目を迎えた街並みとも言えるかもしれない。その証拠に細い路地に入れば、たちまち空気の淀んだスラム街へと行き着くのだから。

このような王都であるからこそ、石畳で舗装された大通りの横手に佇む綺羅びやかな宿は一層に人の目を引いた。外門の左右には屈強な警備兵を配置し、その奥には広大な敷地を贅沢に使った建造物が窺える。その窓には透き通ったガラスがはめ込まれており、素晴らしい外観から内装の美しさも容易に連想することが出来る。宿泊施設の他には馬小屋や、顧客のほとんどが冒険者ということもあり、剣を振るうに十分な広さの庭も備えられている。まさに最上級の宿屋だ。

そんな宿屋の一階部分は広い酒場兼食堂となっており、お昼時だというのにその広さからすると少なすぎる数の冒険者しか居なかった。それは決して、この宿が繁盛していないという訳ではない。単純に、腕に自信があり高額の滞在費を支払える、ごく一部の冒険者しか利用できないという敷居の高さを表している。

店内の一番奥には、ひときわ異彩を放つ集団がいた。この場に、いや、この王都に知らぬものは居ないだろう。王国に２つしか無いアダマンタイト級冒険者チームがそのひとつ、女性のみで結成された〝蒼の薔薇〟の面々だ。

丸テーブルに腰掛ける人影は４つ。その内の一人は巨石とも例えられるほどの大柄な体格で、他の３人をすっぽりと隠しても余りあるほどだ。ただ大きいだけではなく、全身の筋肉は見事に鍛え上げられており、一部でも柔らかさそうな部分がない。そんな男より漢らしい

女性――ガガーランが話を持ち出す。
「なぁ、聞いたか？　リ・ロベルのおばけの噂」
「ああ。ガガーランにしては耳が早いじゃないか。夜の海から上がってきたという話もあるな」
　答えた声音（こわね）は不可思議なものだった。若いのか年寄りなのか、感情も掴み取れず、かろうじて女性だと判断出来る程度のもの。異様な仮面と漆黒のローブで全身をすっぽりと覆った、ガガーランとは対象的に小柄な人物――名はイビルアイ。
「ん。初耳」
「同じく。怪談の類？」
　土色の外套（クローク）を纏っているが、その内側は体にぴったりとフィットした黒装束が覗いている。鏡に映したような容姿の二人の女性――ティアとティナが揃って首を傾けた。
「ははっ！　頭脳派ガガーラン様の情報網を甘く見てもらっては困るねぇ」
　得意気に大胸筋を反らせるガガーラン。隣からは「む。脳筋のくせに」「どうせ盗み聞き」とか聞こえて来る。ガガーランに代わり、イビルアイが人差し指を一本立てながら話を引き継ぐ。
「私も今朝方冒険者組合で仕入れた情報なんだが、数日前からリ・ロベル近郊で夜間に謎の人影が徘徊する事案があってな。……まあそこまでは組合が扱うような話でもないんだが、どうもそいつが塒（ねぐら）にしている洞窟に入った冒険者が立て続けに戻って来ないらしいのだ」
「……その冒険者のプレートが気になる」
「うむ。はじめは鉄級（アイアン）、次が金級（ゴールド）。リ・ロベルの組合では早急にミスリル級冒険者で捜索チームを派遣するそうだ」
「でよぉ、その海から上がってきたってのはなんなんだ？　マーマンとかか？」
「自分で言っておいてなんだが、そいつが通った後に残された痕跡を見た者の憶測にすぎん。直接姿を見たものはまだ居ないのだからな……」
　大都市リ・ロベル。王都リ・エスティーゼより南西の海岸沿いに位

置する、漁業や聖王国との貿易で発展した街だ。海は広大で底が知れず、未知そのものである。近郊の海にはシー・リザードマンやマーマンの生息域が確認されている他、水生モンスターも数多く生息している。これらが人間の領域を脅かすことは珍しいことではない。

イビルアイは最後に「まあ、私達まで話が回ってくることはまず無いだろうが警戒しておいても損はないだろう」と締めくくった。

そこにひとりの女性が、入り口から店の奥のテーブルに向かって一直線に歩いてくる。

「みんなー！　お待たせー」

「お疲れ、ボス」

「よぉ、リーダー！　早かったじゃねえか。王女様との茶飲み話はもういいのか？」

ボスともリーダーとも呼ばれた、生命の輝きを象徴したような美しい女性――ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラは〝蒼の薔薇〟のリーダーであると共に、その名が示す通り王国貴族アルベイン家の令嬢でもある。

昼過ぎから〝蒼の薔薇〟のミーティングを行うため、このいつもの場所に全員が集合した形だ。

「ええ。早急に調査しないといけないことが出来たの」

「まさか、リ・ロベルの件か？」

テーブルに座る皆の視線が一斉にラキュースの顔に向けられる。

だが、当の本人はきょとんとした表情を浮かばせていた。

「向かうのはエ・ランテル近郊の村よ？」

◇

幾多もの巨大な塔が防衛網を形成し、城壁によって広大な土地を囲んでいるロ・レンテ城。その一画に王族の住まう場所――気品に満ちたヴァランシア宮殿がある。

その一室に置かれたテーブルの上には淹れられたばかりの紅茶が湯気を立てている。これを挟んで座る二人の淑女の姿があった。
一人は招かれた客人――貴族として相応しい麗しいドレスを身に纏った〝蒼の薔薇〟のリーダーのラキュース。
そしてもう一人はこの部屋の主であり、リ・エスティーゼ王国第三王女。艶やかな金の髪と深みのある青の瞳に象徴される美貌、奴隷廃止や冒険者組合の改革など画期的なアイデアで、〝黄金〟の二つ名を持つ女性――ラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフである。
「ごめんなさいね、ラキュース。急に呼び立ててしまって」
「気にしないで、ラナー。ま、それにいつものことじゃない」
皮肉で答えるラキュースの言葉に非難の意味はもちろん無い。「それもそうね」とラナーも返し、笑顔をたたえる。
「それで、今回は〝蒼の薔薇〟としての用件よね？　聞かせてもらえるかしら」
「そうね。では早速だけど……王国戦士長様が帝国との国境付近で任務に当たっていたのは知ってる？」
「確か、帝国の騎士が村を次々に襲っていたという話よね。でも、無事に件の騎士達を倒して帰還したと聞いたわよ？　なぜ生け捕りにしなかったのかって貴族達が騒いでいたようだけど」
「そう。表向きはね」
「……どういうこと？」
ラキュースは訝しげな顔をして、手に持ったままだったティーカップを皿に戻した。対してラナーは一口含み、唇を湿らせ話を続ける。
「暴れる騎士達を倒したのは、実は戦士長様ではないの」
「でも、それって……にわかに信じられない話ね。あの戦士長様なら他人の功を自身の手柄にはしないと思うけど。武功を上げた本人に報酬を進言してもおかしくないのに……なにか言えない理由がある？」
ラナーはひとつ頷き、二人しか居ない室内だというのに声のトーンを少し下げた。

「相手が人間であれば、そうしたでしょうね。騎士を倒し村を救ったのは、たった一体の異形の者……バードマンというのは知ってるかしら？」
「バードマン……ええ、知識だけは。確かに公に出来ないわね。どこまでの人がこの話を知っているの？」
「戦士長様とその部下の方達を除けば、私とお父様。そしてラキュース、貴方だけよ」
　後日行われる宮廷会議の正式な場でも真相は明かさず、秘匿にしておくという。それは愚かな貴族達が何を言い出すかは火を見るよりも明らかだからだ。
「村人を救った善良なバードマン……ね。無傷で帰還したってことは村人から話を聞いて？　それとも直接話をする機会があったのかしら？」
「後者よ」
　答えたラナーの顔は今だ固い。ラキュースは不思議に思う。親友のラナーは人間以外の種族に対して排他的な考えの持ち主だっただろうか。
「だったら、国としてお礼が出来ないのは残念だけど……人間とも仲良く共存できる種族はいるわ。別段問題があるようには思えないけど……」
「……もしそのバードマンが、第５位階の魔法を使えるとしたら？」
「……冗談よね？」
　頬を引きつらせるラキュース。対してラナーは頭を振り、戦士長が見た話を伝える。
「戦士長の話を元に調べてもらった結果、第５位階魔法〈焼夷（ナパーム）〉によく似た魔法を使ったそうよ。私にはどのぐらい凄いのかよくわからないけど、戦士長様も、例え完全武装だったとしても勝てる気がしないと振り返っていたわ」
　ラキュースも同じ第５位階の魔法の一部を使えること、また数多の戦闘をこなしてきたアダマンタイト級冒険者としての経験から、そのバードマンの脅威を知る。それに……愚かでなければ牽制に切り札

を出したとはとても考えられない。イビルアイと同等、もしくはそれ以上を想定するべきか。
「伝説や英雄譚（サーガ）に出てきてもおかしくない化け物ね……それを私達にどうしろというのかしら」
「そんなに怖い顔をしないで、ラキュース。まずは現地での詳しい情報の収集。旅をしている様子でもあったから、まだ留まっている可能性は低いけど……。目的と動向の一端でも掴んできて欲しいの」
「もしまだその村に滞在していた場合はどうするの？」
「友好的な関係の構築よ。何よりもスレイン法国より先に接触してもらいたいところね」
「法国？　……確かに。彼らなら問答無用で敵対するでしょうね」
　以前に法国の特殊工作部隊のひとつ〝陽光聖典〟が、罪なき亜人種の集落を襲撃するのを阻止したことがある。人間至上主義の法国が攻撃を仕掛けた場合、対話の糸口が絶たれてしまうだろう。それだけでなく人類全体が敵と見なされ、王国にまで飛び火しては最悪だ。
「それじゃあ善は急げね。皆を集めて出発するわ」
「ごめんなさい、ラキュース。いつも危険な役目を押し付けて……」
「水臭いこと言わないの。私達の仲じゃない！　それに人類のためにも、他人には任せてられないわ！」

　部屋に一人となったラナーは、温（ぬる）くなった紅茶を飲み干すと窓の外を眺めた。まだ昼前の太陽に明るく照らされた中庭には短く綺麗に刈り込まれた芝や、美しい彫刻のように剪定された植木が目に入る。ヴァランシア宮殿に相応しい見事な庭園と言えよう。
　しかしそれも外見だけ。今の王国の惨状を本当に理解している者から見ればさぞ滑稽だろう。貴族社会においては、力を示すために見栄を張ることも必要ではあるのだが。
「ほんと、くだらない……」
　大きな溜息が漏れる。
「けど……」

ラナーは嗤う。
そもそもガゼフが無事に帰ってくる可能性は限りなくゼロだと考えていた。
権力闘争に明け暮れる大貴族派閥による罠――いや、その派閥争いを利用したスレイン法国による王国弱体化を狙った偽装工作。聡明な彼女は全てを看破していたところで、それを止める手立てはなかった。
そう、ガゼフの死は必然だったはずだ。
しかし、ガゼフは部隊に一切の損失もなく王都まで無事帰還した。何も無いわけがない。その知らせを聞いたラナーは悟った――必然を覆すだけの『何か』があったのだと。
ラナーは求めていた。
この国の未来は暗く、また自分の望む未来も遠い。
故に求めていた。
現状を打開せし得る可能性を。どんなものでも構わない。利用できるものは全て利用するだけ。
求め続けていた。
――愛する犬を飼い続ける未来のために。例え王国がどうなろうとも。

◇

『蒼の薔薇』一行が王都からエ・ペスペルを経て、城塞都市エ・ランテルに到着したその日の夕暮れ。
ここはエ・ランテルのポーションなど、薬品を多く扱う区画にある最も大きな店。と言うよりも工房そのものな外見の『バレアレ薬品店』。
「ニュクリが6にアジーナが8……ングナクが4……と」
この日も一日の業務が終わり、店先のプレートは閉店を意味するも

のに切り替えてある。ここで働くのはンフィーレア・バレアレ。男にしては長い金髪は顔の半分を隠してしまっているが、そこから覗かせる目には力強いものを感じさせる。彼が何をしているのかというと、ポーション生成の原料となる薬草の在庫確認だ。
「どうだい、ンフィーレア」
「今月分は持つと思うけど、そろそろ仕入れにいった方がいいと思うよ、おばあちゃん」
リイジー・バレアレは孫の返事に満足気に頷く。ポーション作りの技術はもちろんのこと、取引先との付き合いや勘定、在庫管理を完璧にこなしている。この様子なら自分が引退しても店を守っていけるだろう。とは言え、生涯現役のつもりではあるが。
「そうかい。それじゃあ、私は薬師の会合に顔を出してくるよ」
「うん。いってらっしゃい」
薬草置き場で一通りの確認を終え、工房の奥へと戻るンフィーレア。新しいポーション開発の研究に余念がないバレアレ家は、店を閉めた後も工房に篭もることが多い。
「……少し早いけど、カルネ村まで採取しに行こうかな」
手を止めて天井を仰ぎ見る。
カルネ村近くの森は比較的安全で、良質な薬草が手に入る。そして何より、思いを寄せるエンリ・エモットに会いに行ける。あの娘のことを思うと自然と頬も緩む。
今度会ったら何を話そうか……そんな物思いに耽っていると、店の表からコンコンと扉を叩く音が聞こえてきた。
既に日は落ち、辺りは暗くなっているが、急な入用でポーションを求めて来る人も決して珍しくない。なんといっても自他ともに認めるエ・ランテルで一番のポーションを売る『バレアレ薬品店』なのだから。
扉の窓ガラス越しには人影が窺える。
いつものように内側から鍵を開けると、そこに立っていたのはフードを被った女性――手に持った明かりに映しだされた顔は綺麗に整っており、どこか猫のような可愛らしい印象を抱かせる。

「こんばんはー。ンフィーレア・バレアレて言うのは君かなー？」
答えを待つ間もなく、女は開いた扉の隙間から軽やかな動きで身を滑り込ませた。後ろ手に扉を閉めたその顔には笑みを浮かべている。
「は、はい。そうですけど……ど、どちら様ですか？」
女の笑みはより一層深くなる。美貌が保たれたままだが、狂気じみた妖しさを感じさせる。
思わず一歩後ずさるンフィーレア。対して、女は一歩、二歩と距離を詰め、伸ばした手をンフィーレアの頬に這わせた。
「んふふー。私はね、君を攫いに来たんだー。私達の道具になってよ？　お姉さんのお・ね・が・い」
ンフィーレアは自分の顔も耳も真っ赤になるのを自覚した。言われた意味が解らない。いや、もしかしたら理解しているのかも知れないが、そう思い込むのは躊躇われる。その間にも、触れられた手の親指はンフィーレアの唇をなぞり、人差し指と中指は顎から耳にかけてを弄ぶ。口からは言葉にならない声が漏れ出てしまった。
「あっははーっ！　真っ赤になっちゃっておっかしいーの。もしかして期待させちゃったかなー？　けど、ごめんねー？　用があるのは君の体じゃなくて、生まれながらの異能の方。叡者の額冠でアンデッドの大群を召喚（サモン）する魔法〈不死の軍勢（アンデス・アーミー）〉を使ってもらいたいのー。この街がアンデッドで溢れかえったら面白いと思わない？」
ニンマリと歯をむき出して笑う女に、ンフィーレアの背筋を戦慄が走り抜ける。
逃げなくては。馬鹿げた妄想を振り払い、咄嗟に踵を返して裏口がある薬草置き場を目指す。
――しかし、踏み出せた歩数はたったの2歩。同時に、灼熱の痛みが肩口に走る。何か鋭いもので刺されたことを知覚したが、徐々にそれも鈍くなり、意識が持っていかれる。
ンフィーレアは必至に耐えようとするが、意識を引っ張る力の方が強い。
やがて後から親しい友人の声がかかった。
「いやー。大丈夫？　傷は深くない？」

「うん、大丈夫だよ」
ンフィーレアは振り返り、友人に笑いかける。
「そっか！　うんうん、それは良かった。じゃあついて来てー」

第八話：探索その2

両親を亡くしたエンリとネムの生活は悪い意味でも良い意味でも変わってしまった。

カルネ村での生活は街とは違い、基本的に自給自足で成り立っている。朝の水汲みから始まり、日が出ている間は畑仕事に勤しみ、合間に炊事や洗濯に裁縫とやるべきことは多い。

姉妹も幼い時から家族の仕事を手伝ってきてはいた。だが、両親のいない今となっては身の回りのことが精一杯で、自分の家の畑を維持していくのも厳しいのが実情だ。本来であれば村人の手助けがあるはずなのだが、働き手が減った現状では、どこも自分の畑で手一杯である。

そこに手を差し伸べてくれたのは、村の救世主であるペロロンチーノだった。とはいえ彼自身が畑仕事に精を出しているわけではない。

「んーまさか、こういう使い方が出来るとは。自由度高過ぎぃ……」

視線の先には広大な畑が映る。植えられた青い麦の穂先は、まだ未熟ながらも実りの膨らみを感じさせている。

その畑の一角に一瞬たりとも同じ形を維持しない、蠢(うごめ)く黒い靄がかかっていた。

その正体は大量の椋鳥(ムクドリ)の群れだ。だが決して、麦の穂を啄んでいるわけではない。

これはペロロンチーノの種族的特殊能力《眷属招来》で呼び出せるモンスターのひとつ機雷椋鳥(スターリン・マインスウォーム)の群れ。ユグドラシルであれば、敵の接近時に視界を遮る煙幕として、同時にそれ自体が触発性の爆弾の役割を果たす、緊急離脱に最適なモンスター。それ以上でもそれ以下でもないモンスターだったのだが。

ペロロンチーノは呼び出した椋鳥の群れとの間に感じる奇妙なつながりを通じて、害虫の駆除や雑草を毟らせている。この調子なら半日もしない内に村の全ての畑の手入れが終わるだろう。

このように、村人達に手を貸したのはこれが初めての事ではない。タダ飯にあずかるだけでは居心地が悪いと感じたペロロンチーノは

この数日間、森で獣を狩ってきたり、倒壊した家屋の瓦礫を撤去したりと、村の復興にも尽力していた。まぁ後者については姉妹の好感度アップを目的としたものに過ぎず、ただのついでだった訳だが。
兎も角、そんなペロロンチーノの姿を見てきた村人達との距離感は一気に縮まり、今では気さくに挨拶を交わされる仲にまで発展したのだった。
太陽が天辺に登る頃、遠くから元気な声と共に走り寄ってくる二人の姿があった。
「ペロロンさまーっ！」
「やあ、ふたりとも。もうお昼時か」
「はい、ペロロン様。えへへ、頂いたお肉を使ってみました」
エンリが掲げてみせたバスケットには、薄くスライスされた肉が黒パンに挟まれ、香ばしい匂いを立てている。ちなみに略して呼ばれているのは、初めにネムが言い出したことで、ふたりとも親しみを込めてそう呼んでくれている。断じて、強要しているわけではない。
「わーっ！　もうこんなに終わったんですか？　何から何まで、ありがとうございます」
「いや、俺もこうして美味い飯にありつけているんだから、お互い様だよ」
「……もぅ。ペロロン様はお優しいです」
うん。守りたい、この笑顔。
寸秒、惚けていたところに横から胴鎧を引っ張られる。
「ねぇ、ねぇ！　アレやってーペロロンさまっ」
ネムの言うアレとは――
昨日のことだ。「わたしもお空を飛んでみたい！」とか言うものだから、腕に抱えて村の上空を一緒に飛んでやったのだ。怖がらせてしまわないかと危惧したものの、「きゃーっ！　凄いっ！　すごーいっ！」と、その時のネムのはしゃぎようは、ペロロンチーノを心の底まで幸せな気分にさせてくれた。つい調子に乗って飛び回り、見上げるエンリにかなり心配をさせたのは記憶に新しい。
そういえば、猪を狩ってきた時もそうだった。ネムに褒められると

俄然やる気が出てしまい、前よりも大きい獲物を、とついつい狩りすぎてしまったものだ。
「よし、じゃあ飯を食ったらな」
「わーいっ！」
「ぁ、あの、私も……」
小声だろうが聞き逃すはずがない。ペロロンチーノは大きく頷き、ふたりの希望を叶えてやったのだった。

◇

穏やかな日常が戻りつつあるカルネ村に馴染みつつあるペロロンチーノ。だが、彼とて呑気に村人生活を楽しんでいるだけではなかった。
この数日間、トブの大森林に続き、近隣の地理や情勢を掴むべく、リ・エスティーゼ王国方面とバハルス帝国方面に遠征を繰り返していた。
上空から見渡した感じ、帝国側は街道がしっかり整備されており、街は活気に溢れ、印象としては豊かさを感じさせた。対して王国側は衛兵の装備や士気が低く、荒れた街道沿いでは盗賊が馬車を襲うところも見かけることがあり、帝国と比較をしてしまえば、国力の低さが窺えた。
やはりカルネ村を襲ったのが無法者の盗賊ならまだしも、正規の帝国騎士というのは考えにくい。となると、第三国のスレイン法国がきな臭く感じる。
そして今、ペロロンチーノはスレイン法国の神都と思われる大都市の上空に到達した。
別にカルネ村で死んだ人達の仇を取ろうとかそういうわけではない。単純に今まで通り近隣の状況を把握するための一環にすぎない。
眼下には白を基調とした神殿か聖堂のような宗教建築物がいくつ

か目に入る。周りにはその荘厳なイメージを崩さない、これまた白い建物が連なっている。個々の大きさからして住居のようだ。
街の中に神殿が造られたというよりも、まず先に神殿があり、その周りに街が形成されていったという印象を抱かせる。ひとつの観念に基づいている宗教国家たる所以なのだろうか、ほとんどが白一色で統一された街並みは圧巻であった。まあ、みずっち以外に信仰の対象もなかったペロロンチーノにとってマジものの宗教のことなんて全くサッパリ分からない訳だが。
遥か上空を大きく旋回しながら観察を続けると、一際大きな神殿が物々しい賑わいを見せていた。豪奢な馬車から降り立った人物は立派な司教冠と祭服を身に包み、似たような格好の数人を引き連れて中へと消えていく。同じような光景が3度続いた後、門がしっかりと閉じられた。この建物の中でお偉いさん達の集会が今にも始まるという雰囲気だ。
秘密の会談、内緒話――と、なれば聞き耳を立てたくなるのが人の性。もはや人間じゃないけどね、と内心でツッコミを入れつつ、２４時間に1度の制限がある不可知化特殊技術（スキル）《顔の無い王（ノーフェイス・メイキング）》を使用してペロロンチーノは神殿の屋上にそっと降り立った。
どこから屋内に侵入しようかと模索していると、どこか懐かしさを感じさせる音が聞こえて来る。
――かちゃかちゃ
硬質な軽い音だ。
「覗きとは関心しないなぁ、鳥のお兄さん？」
「――えっ」
突如声が掛かる。前にもこんなことがあったような感覚に見舞われるが、あの時とは明らかに異なる圧力が既視感を塗り潰す。
咄嗟に振り向いたペロロンチーノの目の前に迫るのは白と黒。恐ろしいまでの勢いで踏み込まれた脚は屋上の床に亀裂を作ると、それを軸に回転し、横から棒状のものが遅れて襲いかかってきた。
「ぐがッ!!」
顔の前で防いだ両腕に骨まで響く痛みが走る。今までの人生でも

感じたことのない激痛に視界が閃輝暗点（せんきあんてん）するのと同時に少し遅れて吐き気が続く。
「あっれ、おっかしいなー。真っ二つにするつもりで振ったのに」
あっけらかんとした声が届く。
衝撃で不可知化が解除され、後方に飛ばされたペロロンチーノの先に立っていたのは、幼い一人の少女。奇怪なことに長く伸ばされた髪は左右で違う。片側が目の覚めるような白銀であるならば、もう片側はすべてを飲み込むような漆黒。同じように瞳の色もそれぞれ違っている。
少女は十字槍にもよく似た戦鎌（ウォーサイズ）を素振りをするように軽々しく振り回すと、その動作に問題がなかったことを確かめる。
冗談じゃない。ズキズキと鈍い痛みが残る両腕からは赤い血が滲む。どうやら骨は折れていないらしく、指先は痺れながらも問題なく動く。
いつものペロロンチーノなら、お近づきになりたいと思えるような神秘的な美少女。
しかし、その容姿はこの世界で今まで見てきた人間たちと比べて明らかな異彩を放ち、強大な力をその小さな体に無理やりねじ込んだような違和感が付き纏う。
そんな作られたようなちぐはぐな存在に心当たりがある。
それはユグドラシル時代のキャラクター。
ペロロンチーノと同じプレイヤー……と、なると中身まで少女とも限らない可能性がある。
「やってくれるじゃねえか。俺はアイン……いや、ペロロンチーノ。流石にいきなり斬りつけられる覚えは無いんだが？」
『アインズ・ウール・ゴウンのペロロンチーノ』、そう言おうとして止めた。ＰＫ上等、資源の独占やチート疑惑のＤＱＮ集団……と認知されていたから、というのもまあ、ある。
だが何より、ユグドラシルを引退しギルドを脱退した自分に、その誉れ高き名を語る資格はあるのだろうか。
「うん？　とぼけてるのかな？　まぁ、いいわ。見定めさせて貰おう

かしら」
少女に似つかわしくない、血に塗れたような笑顔を浮かべる。どうやら名乗り返す気は無いらしい。
ペロロンチーノが次に口を開こうとした矢先、少女の姿が掻き消える――いや、強化された動体視力はなんとか捉えていた。ユグドラシルではあり得ない加速をした影を。
一瞬の内に間合いを詰めた影は下段から戦鎌を斬り上げる。
「ちょ、ちょっと待て！　話を――」
後方に飛び退き間合いを離そうとするが、それを少女は許さない。重心を崩すこと無く、振り上げた戦鎌の軌道を変え、縦横無尽な剣撃を繰り出す。
「――ッ！《眷属招来》機雷椋鳥の群れ（スターリン・マインスウォーム）！」
ペロロンチーノと少女の間に幾つもの黒い鳥が生み出され二人の視線を遮り――次の瞬間には爆発が巻き起こった。
爆風による揚力を得たペロロンチーノはそのまま上空へと退避する。
ここでようやく、プレイヤーを相手にするには心許ない弓を空間から取り出すことに成功した。
さて、どうしたものか。相手がプレイヤーなら、今ので効果的なダメージは見込めない。
少女の手にした武器、身のこなしから前衛攻撃を突き詰めたアタッカーなのは間違いないだろう。盾となる前衛がいないペロロンチーノにとって、この距離での戦闘は不利でしかない。
ふと、同じ後衛職であり、友人であり、仲間であり、そしてギルド長だった男のことを思い出す。
（いつも謙遜していたけど、状況に応じた判断はいつだって正確だったよな……モモンガさんならどうする……）
程なくして黒い爆煙は実際の火薬での爆発と異なり、嘘のように掻き消えていく。
しかし、少女の姿は見当たらない。
僅かな狼狽の後、ペロロンチーノの優れた聴覚が自身の更に上空か

ら迫る何かを捕えた。
硬質なものが空気を切り裂く音に、衣服のはためく音。
太陽を背にした死角からの奇襲だ。しかし、予めわかってしまえば怖くはない。ギリギリまで気付かない素振りをして、躱しざまにさっきのお礼をくれてやろう。誰だったかな、『言うことを聞かせるために一発殴るのは悪く無い』と言っていたのは。
比較的抵抗（レジスト）され難い《束縛の矢（レストレント・アロー）》を手に握りしめる。
みるみると近づいてくる相手の気配。自然落下とは思えない速さだ。〈飛行（フライ）〉で加速している？
であれば、躱した後も空中で切り返して攻撃してくる可能性はある。だが〈飛行（フライ）〉とて、この勢いを瞬時に殺しきる制動力はないはずだ。
背後は貰ったも同然。
ペロロンチーノは勝利の筋書きに光が見えたことでほくそ笑む。
カウント……3……2……1……
異常なまでに冴え渡った感覚は完璧なタイミングで振りかぶった少女を躱す。
二人の視線が交差する。
狩る者と狩られる者が逆転した瞬間――に、思えた。
しかし、空中で戦鎌を振った勢いで１８０。くるりと回った少女はそのまま宙を蹴った。

神都の上空を２つの影が飛び回る。
ひとつは激しい曲線を描く軌跡を残し、それを追うもうひとつはジグザグな折れ線を大空に刻む。
ユグドラシル時代よりも圧倒的な飛行速度、旋回能力を得たペロロンチーノはまさに自分が空の王者になった気分でいた。だが、実際はどうだろう。思うように引き離せないでいる追跡者に苛立ちを募らせる。
「糞っ！　忍者系にしても限度があんだろ！」

確かに空中に足場を作る魔法や特殊技術（スキル）はいくつか存在するが、ここまで連続使用出来るものをペロロンチーノは知らない。ペロロンチーノ自身がこの世界で経験したように、ユグドラシルとは違った効果を発現しているもののひとつかもしれない。

「ねえ！　逃げてばかり？　鬼ごっこもいいけど、逃げてばっかじゃ死んじゃうわよ？」

背筋も凍るような禍々しい殺気が背中に突きつけられ、ペロロンチーノは慌てて背後を窺う。

（――あの構えは？　まさか《次元断切（ワールドブレイク）》!?）

《次元断切（ワールドブレイク）》――アインズ・ウール・ゴウン最強の聖騎士たっち・みーが使用した、戦士系職業ワールドチャンピオンの超弩級最終特殊技術（スキル）。その構え、その気迫、そして少女との距離１０ｍという間合いは、最悪の答えを連想させた。

「――チッ！　囮鳥（デコイ）！《矢守の型》！《三本の護盾矢》!!」

キラキラと輝く粒が無数に噴出されるのと同時に、ペロロンチーノの周りに3つの半透明な盾が展開される。

もし次元断切であれば非常に不味い。なぜならば、全力で防御したところでそれを突破し即死級ダメージを与える火力があるからだ。

同じタイミングで大きく振り下ろされた戦鎌は、剣先をなぞったような三日月型の衝撃刃を作り出し、空間を切り裂いた。

――バキィイン

舞い上がった光の粒が白い霧のように飛散する。

硬質なものにぶつかり破壊される音が響く。

命中。手応えを感じ取った少女は満足気に口角を釣り上げた。

しかし、残念かな。悲鳴が、もがき苦しむ嗚咽が聞こえてこない。さっきまではあんなに苦痛に耐える良い声を聞かせてくれていたのに。

でも無理もない、と少女は思った。さっき放ったのは空間をも切り裂く一撃必殺の武技。今までだって即死以外の結末はあり得なかったのだから。

少女の笑顔から狂気が抜け落ち、ただの聖女じみた物寂しい表情に

戻る。
久々に倒し甲斐のある奴だった。でもそれだけだ。
「あーあ。早く敗北を知りたい……」
自嘲気味に呟いたところで、ふと地上が騒がしいことに気付く。
「そうだった」と、少女は思い出す。自分は人の目に触れられてはならない番人だったことを。早く戻った方が良い。それから報告と……あの神官長がどんな顔をするかと思うとうんざりするが、話に聞いたバードマンらしき相手を倒したのだから十分帳消しにできるだろう。
「……盾2枚。〈現断（リアリティ・スラッシュ）〉程度だな」
ハッと顔を上げる。太陽の光を反射して輝く薄い霧の中、その男は宙で静止していた。しかも、大怪我を負っている様子もない。どういうことかわからない。
いや、それよりなぜ今まで気付かなかったのだろう。確か不可視化の能力は使えるようだが、看破出来たはずなのに。
「今度はこっちの番だな？　ただ逃げ回っていただけだと思うなよ。お望み通り敗北を教えてやる。咲き散らせ――《弓士の証明（アーチャー・プルーフ）》」
背後から1本。矢が突如として現れ、自分の身に迫るのを知覚する。
何かの魔法だろうか……構わない。このまま距離を詰めて術者をぶった切るまでだ。
さらに2本。今度は上方と下方から。
次々と現れる新たな矢を無視できず、無意識に知覚が外へ外へと引っ張られていく。
１０本……いや、３０……５０……多過ぎる。そして数えるのを止めた。
届かない。一瞬、足が止まったのが不味かった。
いや、そうじゃない。それ以前に相手の策に気づかなかった時点で詰んでいたのか。
不思議と笑みが溢れる。
――焼き付けといてやろうじゃないか。この私を倒した男の姿を。
この日スレイン法国の神都で大きな花火が空に咲いた。

第九話：法国の場合

スレイン法国、神都。荘厳な神殿や聖堂などの宗教建築物が立ち並ぶ白き都。

その中でも一際大きな敷地に神殿の他、背の高い建物を幾つも内包するこの国のシンボルと言っても過言ではない立派な大聖堂があった。

六大神のうち死の神スルシャーナを崇拝する聖地であるのと同時に、政治、経済、教育、福祉、それら国家運営の中枢機関のひとつ。と、国内外の一般人からはそのように知られている。

だがそれらは表の顔でしか無い。

その本当の姿はスレイン法国最強の名を持つ〝六色聖典〟がひとつ、〝漆黒聖典〟の本拠地であり、五柱の神の装備が眠る真の聖域である。

ごく少数の者しか立ち入ることが許されていない区画にある一室。

四方は厚い壁に囲まれ、窓ひとつない空間だが、牢獄のような湿った寂しい雰囲気は微塵も感じさせていない。むしろ側壁に等間隔で取り付けられた豪華な装飾が施されたランプは、〈永続光（コンティニュアル・ライト）〉によって白色の光を放ち、ここが屋外かと疑うほどだ。僅かな闇をも残さず照らしだされた部屋の床には柔らかな絨毯が敷かれ、天井からは照明としてよりも見栄えだけを目的にしたようなシャンデリアが吊り下がっていた。そして部屋の中央には磨き上げられた大理石のテーブルが鎮座する。

部屋は静寂が支配していた。待機する給仕や警護の従者達は微動だにせず、これからこの部屋に訪れる最高位の者たちを、調度品の一部であるかのようにただ待ち続けている。

永遠に時が止まったかと錯覚した頃、重厚な両開きの扉が外側から開け放たれた。

立派な司教冠と祭服を身にまとった男が入室する。男は部屋に設けられた祭壇に一礼し席に着く。後から入室した似た格好をした者達も同じように席に着き、総勢６名の男女がテーブルを取り囲んだ。

その中の代表らしき人物が一同の顔を見渡し、声を上げる。
「では、神官長会議を始める。まず、件のバードマンについての報告を」
数日前に国家存続危機レベルに設定された議題だ。寝耳に水の事態に、この場に集まっている神官長達は寝る間も惜しんで奔走していたに違いない。その証拠にどの顔にも大きなクマを作り、頬をやつれさせている。しかし、憔悴こそしているものの、その瞳に絶望の色は見えない。今回は緊急の招集ではなく、定時による会議開催だったということは、つまりそういうことだろうと理解しているからだ。
「はい。国境付近に重点を置いた国民への聞き取り調査ですが、バードマンの姿はおろか何ら異変も認められませんでした」
「同じく、近隣国家の内通者からも有力な情報は得られていません」
「鷲馬(ヒポグリフ)飛行騎獣隊による捜索でも発見には至っておりませんな」
皆一様に成果が上がっていないことを報告する。だが、それは好ましいことでもあった。
スレイン法国の国境に近い、王国領カルネ村に現れた〈焼夷(ナパーム)〉をも行使するバードマンの発見。この報告によってバードマンの集団、一族、いや国家が人間の領域に攻め込んでくる前兆という最悪の事態を想定していたのだ。
「土の巫女姫による遠隔視はどうだ?」
「うむ。見えてはおらぬのだから確証は得られんのだが、存在はそこにあるようじゃ……」
年配の土の神官長の釈然としない回答に一同は眉を顰めた。
「すまぬ。説明が足りなんだな。件のバードマンが発見されたカルネ村を中心に今日まで監視を続けさせておったが、結局その姿を捕えることは出来んかった。しかしじゃ、すぐ隣に誰かがいるような不可解な行動をとる村人の姿を何度も確認しておる。まるでそこに、こちらからは見えない何かがいるようにのぉ」
「ふむ。……つまり、何かしらの隠蔽魔法を用いて監視の目を欺いていると」
「そう結論付けて良いと儂は考えておる」

周囲から「なるほど」と理解の声が上がるのと同時に、驚愕と困惑も混ざる。
それもそのはず。
大儀式によって土の巫女姫が行使した魔法は〈魔法上昇・次元の目（オーバーマジック・プレイナーアイ）〉。第８位階にある最上位の調査が可能な占術魔法だ。この魔法で見通せないものなんて、神の領域以外に無いと考えられていた。
それに一人残らず殺され、喰われていてもおかしくないと想定していた村の様子は、危害を加えられるどころか村人と交流しているようだと言うのだから常識が追いつかない。
ともあれ、ひとまずの危機は去ったと判断した進行役の男が、これからの対応について議題を移そうとしたところで、頭の上に雷を落としたような激しい音と振動が会議室を襲った。
天井から吊るされたシャンデリアが大きく揺らぎ、パラパラと塵が落ちてくる。
「何事だ!?　状況を確認しろ！」
即座に周囲に指示を飛ばし、神官長達は各々得意な防御魔法、索敵魔法を展開していく。
物理的にも魔法的にも、内外の音を完全に遮断された会議室では考えられない状況だ。あり得るとすれば、この建物が直接攻撃された場合。
通路からは神官長達の身を案じた衛兵達がなだれ込んでくる。
「ご無事でしたか！」
「ああ。それより何が起きたか説明せよ」
「申し訳ございません、原因は不明です。今のところ敵と思しき姿は確認されていま――うおッ!?」
今度は爆発音が、開け放たれた扉を通じて激しく空気を震わせた。
スレイン法国の心臓部とも言えるこの場所を、神官長が一同に会したこのタイミングでの襲撃。そして現在進行形で議題に挙がっている内容を考えれば、その場にいた誰もがひとつの答えに行き着いた。
「漆黒聖典を厳戒態勢で警護に当たらせろ！　陽光聖典の監視は現時

点をもって解除……よろしいですかな？」
神官長達一同は頷き、反対の声は上がらない。
「では、陽光聖典には周囲の情報収集を優先させて出撃させろ！」
「「ハッ！」」
伝達を請け負った衛兵が即座に踵を返して走り去るのを見送ると、神官長達もより安全な場所へと移動を開始する。
現在、神都に残る六色聖典は２つ。破滅（カタストロフ）の竜王（ドラゴンロード）の復活に備えて待機していた漆黒聖典と、今回の厄災の一報を告げに戻った陽光聖典だけだ。
しかし、帰還した陽光聖典の隊員達は軟禁状態にあり、２４時間体勢の監視が付けられることになった。
ガゼフ・ストロノーフ抹殺任務の失敗――それを誤魔化すための虚偽の報告と疑われたことが一点。しかし、上層部とて本気で疑っている訳ではない。ただでさえ信仰の厚い彼らが神の名に誓って、そんなつまらない嘘をつくはずがない。
最も恐れていたのは、虚偽の情報を植え付けられたか、精神支配を受けている可能性。陽光聖典のエリート神官を４５名も同時にだなんて、馬鹿げた話だ。しかし、侮るわけにはいかない。
３００年前〈伝言（メッセージ）〉を信頼し過ぎたことによって、ひとつの国が滅んだことがある。少ない虚偽の情報から都市間紛争に発展し、そこにモンスターの襲撃、亜人の侵攻が重なったことが原因の悲劇である。
それだけ魔法と情報の扱いには慎重を期すべきなのだ。先入観に囚われ、楽観的な思考しか出来ないほど、スレイン法国は愚かな国ではない。
外周を衛兵に囲まれ移動する中、屋外の静けさを不審に思う。
盛大に破壊工作が行われているものだと考えていたが、外の様子を眺められる通路に差し掛かった時、良い意味でその予想は裏切られた。
展望できた景色は平穏そのもので、まるで先程の経験は夢でも見ていたのかと錯覚するほどだ。
「神官長様……番外席次を除く漆黒聖典各員、所定の配置にて警護に

入りました」
音もなく現れた男は跪き、静かに報告する。長く伸ばされた射干玉（ぬばたま）の髪は床に垂れてもなお美しい。この場にいる者が漆黒聖典隊長と知らなければ、その中性的な容姿も相まって男だとは判断出来ないだろう。
「――君は、この事態をどう見るかね」
「はい。上空のアレが囮で無いのであれば、直に終息するかと思われます」
視線に連れられ空を仰ぎ見ると、晴天の青空を背景に2つの影が飛び交っていた。
〈鷹の目（ホーク・アイ）〉で強化した視界に映るのは逃げるバードマンと、それを追う少女。
「なっ!? 〝絶死絶命〟が何故！」
「どうやら、この区域に立ち入ったところを彼女が発見したようですね」
身勝手な独断行動に一抹の苛立ちを感じずにはいられない。
「聖域の守りはどうなっている!?」
「セドランとボーマルシェが警戒に当っています。他に侵入者も確認されていません。それに……」
男は神官長から再び上空に視線を移して告げる。
「それに、相手が単騎なら彼女こそ最適でしょう。……どうやら勝負が着くようです」
――バキィイン
空間をも切り裂く〝絶死絶命〟の一撃必殺の武技が炸裂した。
周りからは「おおっ」という声が漏れ出る。
人類の最強の守り手である彼女が負けるだなんて毛ほども思ってはいなかったが、こうして戦いが終わったことに安堵し胸をなでおろす。
しかし――何かがおかしい。
両断された死体が落ちてこないばかりか、光る輝きの中に倒されたはずのバードマンの影が見える。

そして少女はその敵を前に何もしていない。
隣の仮面のような無機質だった男の表情にも焦りが浮かぶ。
「くっ！　〈伝言（メッセージ）〉……駄目だ通じない！」
視線の先のバードマンはおもむろに突き出した腕を少女へと向ける。
今まで戦域だった大空には無数の矢が滲み出るように現れ、そして
――放たれた。
火炎、雷、爆発、それらが少女を中心に巻き起こり、地上に熱と轟音を撒き散らす。
それは大空に巨大な一輪の花を咲かせたような美しい光景だった。

見惚れてしまったかのように誰もが呆然と立ち尽くす中、漆黒聖典第一席次、隊長と呼ばれる男は即座に動き出す。
残光が空に尾を引くその切れ目、落下していく少女の姿を捉えたのだ。法国の切り札でもある彼女を今、失うわけにはいかない。
電光石火の疾走は、塀を飛び越え屋根の上を走破し、落下地点へとたどり着いた。
携えていたみすぼらしい槍を地面に放り、両手で少女を受け止める。傍から見ている者がいたら、遥か上空から急速に地面に叩きつけられた少女と共に、ペシャンコになるところを幻視してしまったことだろう。
しかし実際は、男を中心に空気の波紋が生じただけで、少女の身体はフワリと両の手の中に収まった。それは落下の衝撃をその身ひとつで相殺するという驚異的な身体能力が成した技。
男は横抱きにした小さく軽い少女の身体を見下ろす。
黒くすす汚れ、全身に軽い火傷を負っているようだが、五体満足でいるその姿にホッと息をつく。しかし、その瞳はどこか虚ろで焦点が定まっていないようだ。
（やはり、敵を前にして様子がおかしかった原因は精神攻撃か……。彼女にまで影響を与えるとは信じられん）

まさか真なる神器と同じ物が……と、思考の渦に飲み込まれそうになるが、即座に頭を切り替える。バードマンの姿も気配も消えてしまったが、こちらを狙っている可能性は非常に高い。今はいち早くこの場を離脱し、彼女を神官の元へ運ぶことが優先だ。
落とさぬようにと、抱き上げる腕に力を込めた瞬間、目の前に拳が叩きこまれた。
「――ぐはっ!?」
全く予期できなかった攻撃に耐えかね、後へ大きく飛ばされるのと同時に、腕の中の少女を取り落としてしまう。
「おい。なに勝手に触れてんのよ?」
「うぐっ……何をするんですか!?」
殴りつけたのは腕の中にいた少女だった。
彼女は悪びれる様子もなく、反感を完全に無視して遠くを眺めている。
「……意識が戻ったようで何よりです。一先ずここは退きましょう」
「あの御方なら、もうここには居ないわよ。それよりどこの村と言ってったっけ?」
――あの御方だと?
「……貴方ほどもあろう者が、本当に精神を支配されるとは思いもしませんでしたよ」
片足で槍の柄を蹴り上げ手に取ると、敵を前にするかのように腰を落とし、槍先を向けて構えをとる。
「何を言っているの? 支配なんてされてないわよ。あ、でもそうね。病には罹ってしまったかもね。ふふっ」
全く似つかわしくない態度だった。同じ部隊に所属し、短くない付き合いの中で、彼女の性格はよく理解しているつもりだ。見た目の少女らしい可愛さと裏腹に中身は全くの別物だということを。
他人どころか身内の生死にも無関心。喜びをただ強者との戦いの中でのみ見出し、そして無慈悲な死を与える存在――〝絶死絶命〟
それがどうしたことだろう。
目の前には、赤らめた頬を両手で覆い「きゃーきゃー」と悶える、見

た目相応の少女がいた。こんな姿は自分は疎か、歴代の神官長達ですら見たことはないはずだ。
１００歩譲って〈魅了（チャーム）〉が掛けられたなら、そのような姿を見せる事もあるかもしれない。だが術者はここにはいない。
〈支配（ドミネート）〉であればどうか。通常は感情の抜け落ちた、ただの人形のような無機質なものになる。少なくともこんな１８０度性格が変わることはあり得ない。
「ねえ、信じられる!?　私の武技に耐えただけじゃなく、あんなに激しいのを食らったの初めてだわ!!」
鼻息荒く、まくし立てる少女の瞳に先程までの虚ろな影はない。むしろ喜色に染まり爛々としている。
更には「どうしよう。私より強いなんて……力ずくで組み伏せられて……痛いのかな？　きっと痛いわよね！　ひゃぁー」などと、ピンク色の吐息混じりに下腹部に手を当てだす始末。
なるほど、これは重症に違いない。彼女の妄想はだいぶ遠くの方まで行ってしまい、戻ってくる様子はなかった。
「隊長」
そこへ優しげな微笑を湛えた男が歩み寄る。
「……クインティアか。状況は？」
「はい。件のバードマンは南へ飛び去り、追手をかけましたが……振り切られたようです。また、周囲に敵影はありません」
クインティアと呼ばれた男は静かに報告する。その背後には、彼が召喚した魔獣だろうか。飛竜（ワイバーン）がバサバサと降り立った。
「そうか、再度の襲撃に備えて守りを――あ、ちょっ。どこへ行くんですか！」
「決まってるじゃない。あの御方を追うわ」
「自分の立場をお忘れですか？　それに今まで姿を隠していた村と、まるで反対の方角です」
「……」
「いずれにせよ、あの場所を狙ったということは、そこに目的があったのでしょう。探さずとも意外とあちらから現れるかも知れませんよ」

「……そう。わかったわ。けど、見つけたらすぐに知らせなさい」
どうやら彼女は納得してくれたようで、本来自分が守るべき聖域へと戻っていった。「もしかして……私を狙って？　うふふっ」という呟きを残して。
取り残された男二人は顔を見合わす。
「隊長、あれは……誰です？」

第十話：蒼の薔薇

ラナー王女より非公式な依頼を受け、王都を発った3日目の朝。
城塞都市エ・ランテルの城門が開くのと同時に〝蒼の薔薇〟一行はカルネ村へと急ぐ。
先頭を飛ぶのは異様な仮面と漆黒のローブを身に纏った魔力系魔法詠唱者（マジックキャスター）のイビルアイ。
彼女は王都からここまでの道程全てを第3位階魔法〈飛行（フライ）〉の連続使用で翔破してきた。並の魔法詠唱者（マジックキャスター）であれば――そもそも第3位階の魔法を行使出来るのも、ごく一部の熟練者に限られるのだが――途中で魔力切れを起こしてもおかしくない距離と時間だ。しかし仮面の下の表情こそ窺い知ることは出来ないが、ローブを風になびかせ、軽快に飛行する姿に微塵も疲労を感じさせていない。
「ずりぃよなー魔法ってやつはよぉ。こっちはもうケツが痛くてたまらねぇぜ」
イビルアイの足元から見上げるように愚痴を漏らすのは、見事に鍛え上げられた肉体を持ったガガーラン。慣れない乗馬での長距離移動に顔を歪めている。とはいえ、こちらも態度だけで疲労までは程遠い。
「仕方ないだろう。それに可哀想なのは馬のほうだ」
進行方向も速度もそのままに、イビルアイはくるりと後を振り返ると、追走する〝蒼の薔薇〟のメンバー4人と5頭の馬の様子を窺う。アダマンタイト級冒険者でもある彼女らにとって、この程度の強行軍ではまだまだ余裕を感じさせる。対して馬の方はというと、魔法で速力の向上と肉体面の疲労は緩和させているが、十分な休息の時間を与えてやれなかった分やや気性が荒いようだ。ちなみに負荷のかかるガガーランの馬には替え馬も用意してあり、並走させている。
「おぉ。それもそうだな！　よーしよし、ジョディ、トーマス、もう少しだ！　頑張ってくれよー」
「あら？　確か昨日はアベリィにローガンじゃなかったかしら」
ガガーランの横手に並び、優雅に馬を乗りこなすのは王国貴族の令

嬢であり、〝蒼の薔薇〟のリーダーを務めるラキュース。白銀に輝く鎧を着込み、草原を馬で駆ける姿は一枚の絵画から切り抜いたような見事なものだった。
「細けえことはいいんだよ。こういうのはな、愛だよ、愛。気持ちが大切ってな！」
「ちゃんと正しい名前で呼んであげることも大切だと思うけど……」
「それはそうと、リーダー。愛といえばこの前、また告白されたそうじゃねぇか」
「なっ……！」
バッと後を振り返ると、駆けている馬の上なのにも関わらず、あさっての方向へと不自然にそっぽを向いている双子がいた。
「ティア、ティナ！　あんた達ね！　誰にも話さないって言ったじゃない!!」
「……どうせ大衆の面前だったからバレるのも時間の問題」
「それに真っ赤になったボス可愛かった。あれは皆で共有すべき」
「あのねぇ……」
悪びれるどころか全く同じニヤついた笑みを返すのは、忍術を得意とする元暗殺者のティアとティナ。土色の外套（クローク）を纏い、その下には体にぴったりとフィットした黒装束が覗いている。
「だけどよ、真面目な話。そろそろ男の一人や二人つくってもいいんじゃねぇのか？」
お前は親戚のおばさんかと、ツッコみたくなる気持ちをぐっと押しとどめる。だが、ガガーランの言うことも正論だ。
死が常に隣り合わせな冒険者稼業、生存本能に従って子をなしておこう、という考えは当然ある。既に2人目の子供がいてもおかしくない年齢に達しているにも関わらず、今だ親しい男女の仲というものを知らないラキュースにはぐうの音も出ない。
逆説的に言えば、危険だからこそ必要以上に大切なものを抱え込みたくないというのも、また正論なのだけど。
では彼女は後者なのかと問えば、それは正しくはないし、恋愛に興味が無いわけでもない。

ましてや、ガガーランにイジられたように決してモテない訳でもない。むしろ街を歩けばそこら辺の男なら振り返らせるに十分な美貌を持ち、社交界に出席すれば彼女と話をしようとする男達で列が出来るほどだ。

では彼女が何故今なお、独り身なのか――ひとつは彼女自身が強すぎることだろう。他の冒険者を下に見ることはないが、やはり伴侶にするならば肩を並べられるほどの実力者か、それに見合った魅力を持つ者が好ましい。だがアダマンタイト級冒険者というハードルはあまりにも高いのだ。

そしてもうひとつの原因は彼女の抱えるある種の病気のせいだろう。別に命に関わるものでもないし、親しい人を不幸にするものでもない。このぐらいの歳には既に完治するのが普通なのだが……彼女自身がそれを自覚していないのも症状を悪化させている要因なのかもしれない。

この世界で認知されてないこの症状にあえて病名を当てはめるならば、そう――厨二病である。

果たして暗黒の精神によって生み出された闇のラキュースを救い出し、固く閉ざされた鎧、『無垢なる白雪（ヴァージン・スノー）』という名のベールを脱がせる殿方はいつ現れることやら。

しかし、類は友を呼ぶとも言う。周りを見渡して見ればレズビアンにショタコン、自称初物食いに、自分には関係のない話だと既に達観している者。誰一人としてマトモな恋愛観を持ったやつがいないのだから、この現状も致し方がないのかもしれない。

「い、いいのよ、私のことは！　それよりイビルアイ、周囲の警戒は大丈夫なの!?」

「私に当たらないでくれ……平和なものさ、静かすぎるぐらいに」

モンスターの比較的少ない平野といえども、バジリスクやコカトリスのような石化を行うものや、チンのような致命的な猛毒を持っている危険なモンスターがいつ現れるとも限らない。

例え後ろ向きに飛んでいようが、魔法で強化された索敵で警戒してくれているイビルアイのお陰でこのように呑気な会話を楽しむこと

ができるのだ。
とはいえ、ここらに出現するのはせいぜいゴブリンやオーガ等たかが知れているものだけで、彼女ら〝蒼の薔薇〟であれば相手にすらならないのだが。
「お？　見えてきたぞ。カルネ村だ」
こうして頭上に太陽が昇りきった正午過ぎ、一行は目的のカルネ村に到着した。

◇

「ハァ、ハァ……」
何度も振り返り、追手が迫って来てないことを確認する。脱兎の如く神都から逃げ出した直後は飛竜（ワイバーン）が後をついて来ていたようだが、しばらく前に地平線の彼方に置き去りにした。
だが油断は出来ない。ついさっきまで逃げても逃げても振り切れなかった少女の姿が思い返される。
見た目の幼い可愛らしい外見とは裏腹に、容赦ない殺意を撒き散らす、推定ユグドラシルプレイヤー。
ただ、自分とはどうにも境遇が違うようだ。たまたま神都で鉢合わせたというよりかは、以前からあの地に関係を持っていた風な自然体な雰囲気。彼女はずっと前にこの世界へやってきた存在で、自分の守るテリトリーに侵入されたから攻撃を仕掛けた、という感じだろうか。
この世界に来たタイミングがずれることを考慮すれば、そういうこともあるかもしれない。
であれば、他の国や土地でも同じように縄張り争いが行われているということも……。
（あーーめんどくさい！　日本人の国民性的にもっとまとまるとか、協力するとかあるでしょ!?　てか、ゲームじゃないんだからガチで殺

しにくるとか頭おかしいんじゃないか。常識的に考えてさ！）
全力の逃飛行から少し落ち着いたことで、先程受けたダメージによる痛みと理不尽な仕打ちによる苛立ちがじわじわとこみ上げてくる。
ペロロンチーノは空間から赤色の液体が入った小瓶を取り出すと、一気に飲み干し、「ふぅーっ」と息をついた。
ＨＰが回復していく奇妙な感覚を味わいつつ、さらにもう一本呷る。
心身一如とはよく言ったもので、腕の痛みが嘘のように引いていくのと同時に、不思議と鬱々とした気分も晴れていくようだ。
冷静に考えてみれば、自分自身が人間を止め、感性や思考が大きく揺らいでしまったように、先発のプレイヤーも少なからず影響を受けている可能性は高い。例え人間種であってもその強大な力に溺れてしまうのは想像に難くない。また、時間の経過と共にその乖離が広がるのも然もありなん話しだ。
ペロロンチーノは自分の身体に視線を落とすとぶるりと震えた。
自分が自分ではなくなる。既に身を持って体験したことだ。これからもっと人間離れしたものになってしまうのかと思うと怖い。恐ろしい。
だけど、バードマンそのものになっても変わらないものがあった。それは人生の大部分、共にあった凝り固まった性格――もとい性癖だ。
真面目な話、美少女を愛でるその確固たる精神が、バードマンの本能とも言える食肉への渇望に打ち勝ったのは偶然では無いのではなかろうか。
それはある意味、人間であった頃のアイデンティティを保つのに一役買っているのではないだろうかと。
（んな訳ねぇか……）
まあ、何にせよ分からない事だらけだ。
せめてこれからはもっと慎重に、特に他のプレイヤーには警戒しておく必要がある。
追跡者はいないと確信した頃、ペロロンチーノはスレイン法国を大

きく迂回するようにしてカルネ村への帰路についた。

◇

「――ええ。ですので、私達は皆、ペロロンチーノ様に感謝しているのです」
「そうでしたか。すみません、疑うようなことを言ってしまって……」
「いえ。無理もありません。私達も最初は戸惑っておりましたが、あの御仁のお優しさに触れ、今では誰一人として怖がる者はいませんよ」
村に入った雰囲気でもわかっていたことだが、村長の話を聞き、確信に変わる。
王国戦士長が感じ取った人物像を疑っていた訳ではない。だが、人づてに聞いた印象という、そんな曖昧のものを信じこむほど〝蒼の薔薇〟は楽観的でもない。もしかしたら、その場しのぎの演技をしていただけで、その後の村ではどんな残忍なことが行われていたか分からなかったのだから。
だがそれも杞憂に終わったようだ。
一緒に話を聞いていたイビルアイと互いに顔を見合わせ、ラキュースは胸をなでおろした。念のため、ティア、ティナ、ガガーランらは馬の世話をするという名目で屋外に残り、警戒に当たってもらっている。
「では、ペロロンチーノ殿が戻られるまでもう少しお話を伺ってもよろしいですか？」
「それは構いませんが……」
あまり気が進まないといった表情を見せる村長。村に入った際に帝国騎士の討伐報酬を渡しに来た使者であると告げているが、同時に冒険者であることも告げていた。冒険者とは本来、厄介なモンスターの退治を請け負うことを生業としている者達である。であれば、冒険

者がこの村を訪れる理由を邪推してしまうのも無理もない話だ。
「もちろん、私達がペロロンチーノ殿に危害を与えるつもりは一切ありませんわ。むしろ友好を深め、人類とバードマンの架け橋になりたいとすら思っています！　彼の旅の目的が知れれば、何か力になれることもあるかと思いまして！」
　これはラキュースの本音の部分でもある。その瞳には力がこもり、キラキラと輝いているようだった。
「わ、わかりました。旅の目的ですか……私は伺っていませんが、より親しくしているエモット姉妹なら何か知っているかもしれません」
「エモット姉妹ですか？」
「はい。エンリとネムと言いまして、あなた方をここまで案内した娘です。……エンリとネムの両親はあの時亡くなってしまいましたが、今ではペロロンチーノ様を本当の親のように慕っているのですよ」
「それほどまでとは……！　さぞご徳望のある方なのですね」
　想像以上の好印象に声音にも驚きが混じる。対して村長は、さも自分が褒められたかのように嬉しそうに頷いた。
「はい、ペロロンチーノ様には足を向けて寝られないですよ。そういえば……」
　古い記憶を辿るように村長は言葉を紡ぐ。
「確か、『ゆくどらいる』、『あいんずうるごーん』、『ぷれいやー』なるものを探しているようでした」
「うーん……？　どれも聞き覚えが無いわね。イビルアイはどう？
……イビルアイ？」
　視線を隣に向けると、そこには小柄な体格も相まって、まるで人形のように動かなくなってしまったイビルアイの姿があった。
「どうかしたの？」
「いや、まさか……これは、とんでもない大物かもしれないぞ……」
　大物という意味では理解できるが、意味深な言葉の裏にある真意まで汲み取れないラキュースは首を傾げる。
　バタンッ――
　静かだった室内に大きな音が響いた。

勢い良く開け放たれた扉の向こうには慌てた様子のティアの姿。
「大変だ！　女の子が攫われた！」

ペロロンチーノは眼下の武装した者達を見下ろす。
村を荒らした騎士や、その後やってきた兵士達とは明らかに雰囲気が違う。
装備に統一感は無く、そしてその全てに何かしらの魔法的効果が込められているように思えた。鑑定スキルの類は持ち合わせていないので正確なところは分からないが、一見ショボそうに見えるものに限って強力なマジックアイテムだったりするので油断は出来ない。
ある者は巨体にこれまた巨大な刺突戦鎚（ウォーピック）を構え、またある者は大剣を手にした聖戦士風、仮面を付けた魔法詠唱者（マジックキャスター）に、そして残る２人は忍者の格好である。
嫌でも先程戦った白黒少女の姿が思い返される。
あの忍者の格好がファッションでないならば、６０レベルの積み上げが必要な職業（クラス）だ。白黒少女ほどの威圧感は全く感じないものの、同じパーティを組んでいることから、全員が最低でも６０レベルの水準にあると考えるべきだろう。
（全部で５人……先回りされていたのか？　ああーー糞ッ！）
嵌められた思いに怒りを感じるが、巻き込んでしまった姉妹の安全を優先しなければならない。
そこへ頭に上った血を冷ますかのような、小さく震えた声が胸元から聞こえてきた。
「ペロロン様……」
「すまない、エンリ。大丈夫だったか？　安心しろ、お前たちには傷ひとつ付けさせやしない」
横抱きにしたエンリを安心させるように、努めて優しい声を掛けてやる。
「ネムはどこに――」
「ま、待って皆！　武器を下ろして」

姿が見当たらないネムの救出に向かおうとしたところで、足下から女の声が届いた。
「……？」
「ペロロンチーノ殿ー!!　私達は王国で活動しているアダマンタイト級冒険者チーム、〝蒼の薔薇〟と申します！　リエスティーゼ王国第三王女、ラナー王女に代わり、貴方に謝礼を届けに参りました！」
改てエンリの顔を覗いてみればコクコクと頭を縦に振っていた。

ペロロンチーノは不機嫌だった。
表情にこそ出ていない――というよりも表情筋が無いのだから当たり前なのだが、椅子にドカリと腰かけた姿は誰の目から見ても好意的な雰囲気はない。
勘違いだったことは自分の早とちりによるものだと、ペロロンチーノ自身も十分に理解はしている。しかし、高ぶった感情の矛先を失い、なんとも据わりが悪い。さらにそれを態度で示してしまっている大人げない自分に新たな苛立ちを募らせているところだ。
ここは村では一番大きい村長宅の居間。テーブルを挟み、〝蒼の薔薇〟５人と対面している格好である。村長夫妻には安全のためと言って席を外してもらっていた。
「……」
「……」
――無言である。
こういう場合、話を持ってきた側から話し始めるものだと思っていたが、何故だか一向に沈黙を守ったままだ。
これでは埒があかない。話を聞くと決めたことだし、いい加減気持ちを切り替えないとな、と思いペロロンチーノは咳払いをひとつ。
それに合わせて５人の肩がビクリと跳ねた。
（え？　てか、こいつら何でこんなに萎縮してるんだ？　……この感じだとプレイヤーではないのか？）
〝蒼の薔薇〟を見やれば、顔面は蒼白で額には汗を浮かばせてい

る。仮面を付けた者も含め、誰一人身動ぎせず、手先は僅かに震え、硬直した面持ちからは緊張がヒシヒシと伝わってくる。
さらによく観察してみると、リーダーと思しき金髪縦ロールの姉ちゃんはかなりの美人さんだ。
隣の忍者の二人……お、これは双子か、よく似ている。切れ長な目と、細く整った眉毛はクールな印象を抱かせるが、外套（クローク）の開けた隙間から覗かせている網々メッシュ越しのおヘソは大胆でいて……なるほど、絶景である。
さらに隣の仮面は……かなり小柄だ。子供か老人か、はたまた山小人（ドワーフ）なのか。ローブと仮面で体の一部も露出していないため判別のしようがないが、プレイヤーでないのなら子供であるはずもないか。
そして最後にデカイの……は視界の隅に追いやった。
一通り見渡していたら自然と気分も晴れていた。不思議なものだ。
「えーと、謝礼だったかな？　まあ、頂いておくよ。それで……アダマンタイトといったら冒険者の中でもそれなりなんだろ？　出来れば教えてもらいたい事が色々あるんだけど」
発せられた声音には先程までの威圧感は微塵も含まれていない。射抜かれるような視線を浴びせられていたラキュースは全身の力が抜けるような思いだったが、残った精神力を総動員させて言葉を返す。
「は、はい！　喜んで！」

「なるほどなー。じゃあ俺が戦ったのは漆黒聖典ってやつの可能性が高いか……」
逃げ出すのが精一杯だったのに、あんなのが複数いるのかと思うと胃が痛くなる思いだ。
「そ、それでペロロンチーノ殿はどんな技っ！　で撃退されたのですか!?」
「えっ。弓士の証明（アーチャー・プルーフ）というターゲティングスキルを起点にしたコンボ

技だけど……」
「その名も……!?」
「……『乱れ牡丹』」
「今度お見せいただいても!?」
「あ、はい……」
「おいおい、リーダー！　身を乗り出しすぎだ。流石に無礼だぞ？」
「はっ……！　こ、これは大変失礼致しましたっ」
ガガーランに引き剥がされ、冷静さを取り戻したラキュースが勢い良く頭を下げる。いやなに、苦しゅうない。ほのかに漂う残り香を楽しみつつ、ペロロンチーノは構わないぞ、という素振りでそれを許す。
ここまでの話を聞いて、彼女達の実力や人柄を大体把握出来た。もはや〝蒼の薔薇〟に対する警戒は毛ほどもない。
何が琴線に触れたのか、先程から落ち着きが無いこの女性――ラキュースは、見た目から気品溢れるお嬢様なのかと思いきや、蓋を開けてみればガンガン行こうぜタイプなおてんば娘のようだ。残念美人という言葉がよく似合っている。だがそれも悪くはない。
そのラキュースを窘めた巨漢なおと――女性は、意外と気さくな雰囲気を持ち、このチームのムードメーカーを担っているようだ。
双子のティアとティナも口数こそ少ないものの、ちょいちょいメンバーに軽口をたたくところがなんとも微笑ましい。
「はぁ……。リーダーは自重すべきだが、イビルアイは随分と大人しいじゃねぇか」
イビルアイと呼ばれた仮面の者は……確かにまだ一度も声を聞いていない気がする。仮面自体は何らかのマジックアイテムなようだが、顔を隠し続けているのには何か理由があるのだろう。他人に触れられたくない部分というのは誰にしもあるものだ。意味もなく地雷を踏みに行く趣味はペロロンチーノにはない。踏むなら計画的に、だ。
仮面をジロジロと眺め過ぎていたのかも知れない。ペロロンチーノの視線に気付いたラキュースが声を掛ける。
「ペロロンチーノ殿が不審がられているわ。仮面越しじゃ、得られる

信用も得られないと思うの。ここは他人の目も無いし、ね？」
「う、うむ。……そうだな」
ラキュースに促され、イビルアイがそっと仮面に手をかけ――
ペロロンチーノは目を剥いた。
顕になったのは端整な幼い顔立ちだ。その肌はシミひとつ無い白蝋じみた白。兎のような真紅の瞳に、口元からは少し長く伸びた八重歯が覗かせている。
ゴクリと喉が鳴るのを自覚する。年の頃は１２ぐらいだろうか。幼女と少女というファクターを天秤に掛け、どちらに傾くか分からない不確定さを保ちつつも、その両方の良い所が見事に両立するという危うさがそこには在った。さらにペロロンチーノの記憶違いでなければ、いや、忘れようはずがない。ユグドラシル時代に自らが設定したＮＰＣ、シャルティア・ブラッドフォールンと特徴がよく似通っているではないか。
「なんと……なんということだ……」
「あ、あの。隠そうとか騙そうなどとしていた訳ではなくて……」
「いや、いい。……立ち上がって一周回ってみてくれないか」
ペロロンチーノの真剣な眼差しに気圧され皆が静観する中、イビルアイは立ち上がるとぎこちなく、くるりと回ってみせた。
「こ、これでいいのか？」
――いい。実に良い。
シャルティアの自由に動く姿を何度も妄想したナザリック第２階層。組み込まれたプログラムは決して多くはなかったが、ペロロンチーノを満足させるだけのコマンドを作り上げるため、情熱を注いだ仲間との青春の――ＡＩ担当のヘロヘロにとっては悲痛な――日々が思い起こされる。それでも、やはりプログラムはプログラムだった。
今、目の前で舞って魅せてくれた姿は困惑と緊張と不安と羞恥の入り混じった、なんともたどたどしい自然体な仕草であった。涙腺がもう少し発達していたら感涙に咽ぶことは必至だったろう。
おっと、いかん。思わず灰になりかけた意識を再び引き戻し、冷静

に思考を働かせる。
ユグドラシルにおいて、本来の吸血鬼は一部の例外を除き、おおよそ醜い姿だ。
シャルティアの場合は外装に美しい吸血鬼（ヴァンパイア）らしい姿をデザインして、それを当てていた。
目の前の彼女はどうなのだろう。吸血鬼らしい特徴を持ち合わせているし、アンデッドならその幼い容姿にも納得ができる。例外の吸血鬼の花嫁（ヴァンパイア・ブライド）か、はたまた……。
「確認させてもらいたのだが……ペロロンチーノ殿は、その……ぷれいやー、なのか？」
「――!?」
今なんと言った？
発音が微妙におかしいが、確かに聞こえた。
言葉の意味が分からなかったのか他の４人はきょとんとしている。
「――お前は違うのか？」
「わ、私はもちろん違う！　そうか……やはり本物なのだな」
ペロロンチーノは安堵した。イビルアイがプレイヤーではないと知って。こんな可憐で儚げで庇護欲を掻き立てる美少女の中身がオッサンではないと知って。
「何かわけありなようだが……。詳しく聞かせてくれるかな？」
「ああ。まさか私に役目が巡ってくるとはな……。そうだな……６大神、８欲王、１３英雄などの話を聞いたことがあるだろうか？」

驚愕の事実に頭が痛い。
話は６００年も前に遡り、そこから１００年単位――１００年の揺り返しと言うらしいが、とてつもない長いスパンを経てユグドラシルプレイヤーがこの世界に訪れているそうだ。
また、プレイヤーが現れるときは一人ということはなく、時にはギルド拠点ごと転移してきたこともあり、その証拠として遥か南の砂漠には天空城が今もなお残っているらしい。

そして魔神というものの存在。かつて、イビルアイ自身もプレイヤーと共にそれらと戦ったようだが、話を聞く限りどうもＮＰＣのような……。大したＡＩも組み込めなかったＮＰＣが何故、という疑問も残るが、この状況にあってあり得ないと断じる方があり得ないだろう。
「なるほど、な……。それで君から見て俺はどっち側なんだい？」
「ふっ。もちろん１３英雄のリーダーと同じ、善を成す側だと見込んだからこそ、ここまで話したんだ」
「そうか。……ならばその期待に応えるとしよう！」
ペロロンチーノが手を差し出すと、それに応えて小さな両手が握り返された。
脳内フィルターによって、『信じてもいいんだよね？　お兄ちゃん』と上目遣いをしているイビルアイの姿を幻視したペロロンチーノ。可愛い妹の期待を裏切ろうはずがない。
一方で神と同格の存在を正しく導くという大役を果たしたイビルアイは、精神的に昂ぶっているのか頬を仄かに紅潮させ、キリッとした表情を作っている。
ただ聞いていることだけしか出来なかった残る面々も、会話の内容から、目の前の存在がただのバードマンなどではないことを改めて確信した。神話の中から抜け出したような、崇高で畏怖の念を起こさせる存在を前に、初めて対面した時とは違う緊張感を漂わせている。
「それで、他のプレイヤーは今どうしているんだ？」
「私の知る限りでは現存するぷれいやーは貴方だけだ、ペロロンチーノ殿。ただ、過去の例からすれば近くで新しいぷれいやーが生まれていてもおかしくはないな」
「ん……？　漆黒聖典とやらは違うのか？　俺が相手した奴はかなり強かったけど」
「ふむ。ならばそれはぷれいやーの血を引き、覚醒させた存在やも知れん。法国ではそういった人物……正確には６大神の血を引く者を神人と呼んでいる。確かに法国なら神人を囲っていてもおかしくはないが、流石に複数はいないと思うぞ。それだけ血の覚醒は奇跡的な

確率だからな」
「プレイヤーの子孫ねぇ……」
　ペロロンチーノに衝撃が走った。
（それ、即ち、先輩達は子作りに成功しているということか!?　なにそれうらやまけしからん。……ということは、神都の白黒美少女は現地産の天然物か!?　いや、正確には品種改良種というべきか）
　そういうことなら、侵入者である自分に斬り掛かってきても仕方がなかったかとペロロンチーノは思い直す。相手をプレイヤーだと思っていたとは言え、例え反撃であったとしても、女の子に手を上げるなんて紳士にあるまじき行為だ。次に会った時は誤解を解いて、謝罪をせねばなるまいと心に強く誓うのだった。
　深く考え込んでいたペロロンチーノが何やら納得したように顔を上げたタイミングを見計らい、ラキュースは問いかける。
「あ、あの。ペロロンチーノ様は他にも『ゆくどらいる』、『あいんずうるごーん』をお探しなのですよね？　もしお許しいただけるのであれば、私達にもお手伝いをさせて頂けませんか？」
「そうだけど……あー村長から聞いたのか。じゃあ、『アインズ・ウール・ゴウン』と……そうだな、あと『グレンデラ沼地』、『ナザリック地下大墳墓』について調べもらえるかな。ラキュースさん」
「はいっ！　それとこちらからもお願いがあるのですが……」
「なにかな？」
「申し上げることすら不遜かと思いますが……この村を救ったのは、当面の間、王国戦士長ということにしては頂けないでしょうか。お恥ずかしい話ですが、人間国家で貴方様のことを公にするのは色々と問題がありまして……」
「ふむ……なるほどね。俺としてもあまり目立ちたくないし、村の皆には俺から伝えておくよ」
　こうして談笑を交えつつ、お互いの情報がある程度共有できた頃には辺りはすっかり暗くなっていた。
　しかし、そんな屋内の穏やかな雰囲気と裏腹に、家の外は静寂に包まれていた。原因は話し合いが始まる当初、ペロロンチーノより放た

れていた只ならぬ気配だ。出てくるまで決して近寄るなと言われた室内からは話し声はおろか、微かな物音さえも聞こえてこない。一体中では何が行われているのだろうかと、日が落ちても今だ多くの村人達は固唾を呑んで見守ることしか出来なかったのだ。

そんなことも露知らず、外の剣呑な雰囲気に家から出てきたペロロンチーノ達が目を白黒させたのは、また別のお話。

――翌朝。

エ・ランテルより〝蒼の薔薇〟を追って早馬がカルネ村に到着する。

最悪な厄災の知らせと共に。

守りたいもの
第十一話：死都エ・ランテル　前編

初めに異変に気が付いたのは墓地を巡回していた衛兵隊だった。

エ・ランテル外周部、城壁内のおよそ1／4。西側地区の大半を使った巨大な共同墓地がそこにある。

時刻は太陽の昇りきった正午過ぎ。日中であっても高い城壁に囲まれた墓地内には陰鬱な影があちらこちらに伸びているのだが、この時間だけは違う。真上から注がれる太陽光によってほぼ全ての闇は追いやられ、黒く湿った土はその色どんどん薄くしていき、普段の墓地とは違った明るい世界が広がる。

帝国との戦場を近くに持つエ・ランテルの墓地ではアンデッドが多発する。もちろん、日没後の夜間の方がその頻度は圧倒的だが、日中だからといって発生しない訳でもない。そして、それを放置しておくと、より強いアンデッドが発生する確立が高くなる。

だからこうして夜間の見回りよりもずっと少ない人員ではあるが、骸骨（スケルトン）や動死体（ゾンビ）のような下級アンデッドを見逃さないように警戒しているのだ。

普段であれば楽な仕事だった。そもそもアンデッドと遭遇することも少ないし、視界も良いため、敵より早く発見が出来て危険も小さい。

故にその日、巡回をしていた衛兵は夢か幻でも見ているのではないかと、我が目を疑ってしまった。

骸骨（スケルトン）や動死体（ゾンビ）だけでない。食屍鬼（グール）、腐肉漁り（ガスト）、黄光の屍（ワイト）、膨れた皮（スウェル・スキン）、崩壊した死体（コラプト・デッド）などの大量のアンデッドが突如、津波のように押し寄せてきたのだ。

内周部へと続く門にその大群が押し寄せ、突破されるのは時間の問題だった。その場を守っていたのは衛兵とは言え、所詮は一般市民に毛が生えた程度である。

門が突破された後の被害は絶大であった。厚い壁に守られ平穏な

暮らしに慣れていた市民は大した自衛手段も持たず、ただ食い散らかされていった。
多くの市民が犠牲になったおかげだろう。アンデッドの進軍が鈍った隙に街に残っていた冒険者達は集結し、その場に防衛線を構築することに成功したのだ。
しかし、アンデッドの集まるところには、より強いアンデッドが発生する。さらに、アンデッドは疲労せず、その偽りの生命が尽きるまで動き続けることが可能だが、人間である冒険者達は違う。
果たして今もその防衛線は維持できているのか。日没前にエ・ランテルを発った伝令にその先を知る由もない。
――以上が早馬より〝蒼の薔薇〟にもたらされた厄災の内容だった。
「おはようございます、ペロロンチーノ様。実は……」
ラキュースは伝え聞いた内容をペロロンチーノに告げた。それをペロロンチーノは黙って聞く。
対アンデッド戦――アーチャーであるペロロンチーノにとっては相性の悪い相手だ。だが、そんなことは些細な問題でしか無い。
目の前の美女達――残念ながらイビルアイの素顔は再び仮面を被っていて見えない――からは眩しい視線を感じる。
こんな期待の眼差しを受けてなお、立ち上がらない男がいるだろうか。否。少なくともこのペロロンチーノの男気は今、奮い立っていた。
「――どうかお力添え頂けないでしょうか？」
「……」
しかし、こんな時だからこそ下半身の火照りとは別に、思考は冷静に働かせねばならない。
エンリ、ネムの姉妹ルートは最早盤石なものに成ったと確信している。苗床を整え、肥料と水を与え、丹念に世話をかけた青い果実は既に食べごろと言っても良い。
そこへ現れた〝蒼の薔薇〟という新たな甘い蜜の誘惑。姉妹と一言にまとめているが、既に二人同時攻略に挑戦中の身だ。

二兎を追う者は一兎をも得ずという言葉もある。恋愛経験の乏しい者がうまくやれるはずもない。今あるもので満足するべきなのだ。
しかし――
――本当にそれで満足か、ペロロンチーノ。
満足なわけがあるか。姉妹丼を諦めるつもりはない。だけど、金髪ロリ吸血鬼は理想のそれだ。
――思い出せ、今までの人生で培ってきた経験を。
……エロゲ・イズ・マイライフ。そうだ、経験ならあるじゃないか。幾千もの恋愛を経て積み重ねてきた経験が！
ゲームのようなセーブ＆ロードなんて都合の良いものは無い。過去の分岐に戻ってＣＧ回収なんて出来ないのは当たり前だ。
だったら、夢の様なこの世界で、無難で平凡なハッピーエンドを迎えるなんて勿体無い。
そう、どうせ目指すなら――
「……ハーレムエンドだな」
「えっ？」
「あっ。いや、なんでもない！　ええっと、ハードモードだな、と言ったのだ！　も、もちろん協力させてもらうとも」
まさか不覚。考えていたことをつい口に出してしまう、そんなベタなことをしでかし慌てるペロロンチーノ。だが、なんとか誤魔化せたようである。
一方、黙ってしまったペロロンチーノに不安を募らせていた〝蒼の薔薇〟だったが、良い返事をもらえたことで明るさを取り戻した。
「しかしよぉ。きな臭くねえか？　リ・ロベルのおばけの件といい、今度はエ・ランテルのアンデッドだぜ？　偶然だと思うか？」
「たしかに……無関係とは言い切れんな」
「リ・ロベルのおばけ？」
「あぁ。ペロロンチーノ殿はご存知無いだろうか？　ここよりずっと西にある街の怪事件なのだが……」
イビルアイ曰く、おばけと言ってもアンデッドとは関係無さそうではあるが、地域とタイミングが重なっているため妙に引っかかるとの

こと。そして昨日の話にもあった、同時期に転移してくる他のプレイヤーの存在。ペロロンチーノがついこの間、カルネ村の近くで転移したことを考えれば、その事件のどちらか、もしくは両方にプレイヤーが関わっている可能性も低くはない。

ならば論より証拠。状況も差し迫っていることだし、まずは現場に急行することが先決だ。

〝蒼の薔薇〟を見やれば馬に鞍を取り付け、そろそろ出発の準備が整おうとしているところだった。

その様子を眺めながらペロロンチーノは閃いた。

「こほん。あー……そういえば、君たちは馬で向かうつもりなんだよな？」

「あっ……申し訳ございません。協力を要請した身でありながら、ペロロンチーノ様に遅れを取ることになるかと……」

馬をとばせば、昼前にはエ・ランテルへ到着出来るだろう。しかし、飛行できるバードマンであればそれよりも圧倒的に早く到着できるはずだ。

「よし。じゃあ皆、俺に掴まってくれ」

「え？　でも流石に……」

「急ぐんだろ？　心配ないさ。こう見えて力には自信があるんだよ」

たしかにペロロンチーノは細身であるが、見た目――筋肉量とその力強さは必ずしも比例しない。冒険者であれば常識である。

軽装のティアとティナならともかく、重装備のラキュースやガガーランも一緒に運べるのかという不安も残る。だが今は一刻を争う事態だし、棚ボタだ。むしろせっかくの提案を無下にすれば、築いたばかりの信頼関係にヒビが入る恐れもある。

ラキュース達は互いに目配せした後、遠慮がちにもペロロンチーノの誘いに応じることにした。

「では、よろしくお願い致します。……イビルアイ、また後でね」

「ああ。皆をよろしく頼む、ペロロンチーノ殿」

その会話の意味が解らなかったが、とりあえず「任せろ」と答えたペロロンチーノ。

直後、イビルアイはその場から掻き消えてしまった。

◇

エ・ランテルを襲った悪夢から一夜明け、再び太陽が顔を出す時刻になっても、悪夢を払う日光が地上に降り注ぐことはなかった。

昨日と打って変わって暗雲が垂れ込めているのも原因のひとつだが、それだけではない。１０ｍ先を見通すのがやっとの程な濃霧がエ・ランテルの街のみを覆うように立ち込めていたのだ。

エ・ランテルが誇る3重の城壁。その最も外周の城壁内。共同墓地の他にも軍事関係の設備や用地が多く、戦時には２５万もの兵を収容できるほどの広大な敷地が広がる。

この時期であれば閑散としていてもおかしくないはずのそこは、アンデッドで埋め尽くされ、特有の臭気で満たされていた。

「うわー。流石に私でもこれはひくわー……」

城壁の上に設けられた櫓（やぐら）から蠢（うごめ）くアンデッドを見下ろすただ一人を除き、他に生ある者の姿はない。

声の主はフードを深く被り、片手には殴打武器のモーニングスターを携えて城壁の上を滑るように移動していく。

だが、骸骨戦士（スケルトン・ウォリアー）や黄光（ワイト）の屍が通りかかる獲物を待っていたかのように行く手を遮った。

気付いていない訳ではないのだろう。一瞥をくれただけで、その者は無造作に歩を進める。

そしてあと数歩の距離まで近づいた瞬間、フードの奥の瞳が獣の輝きを見せた。

振り下ろされる錆びついた剣を常人離れした身のこなしで掻い潜ると、躱しざまにモーニングスターを白骨化しかけた後頭部に叩き込む。

一撃粉砕。続く次の瞬間には腐った肉片が吹き飛ばされていた。

「チッ……これ以上は無理かー。カジっちゃんに追加でお願いしたかったけど近づけないんじゃねー……」
目標地点だったのだろうか、視線の先には霊廟の影がうっすらと見える。
しかし、その周りには先ほどの骸骨戦士（スケルトン・ウォリアー）を始め、骸骨魔法師（スケルトン・メイジ）、骨の竜（スケリトル・ドラゴン）など、多種多様なアンデッドが密集し、さらには得体の知れない屈強なアンデッドの姿も確認出来た。
また驚くべきことに、それらはまるで霊廟の守護者であるかのように隊列を組み整列している。これは周りの、ただ生者を求めて徘徊するアンデッドとは明らかに様子が違う。何者かによって支配されていると断言出来よう。
その者は諦めた様子でため息をつくと、チャラっという金属が擦れるような音を残して城壁の外へと消えていった。

◇

バサバサと大きな羽音を立てながらペロロンチーノはエ・ランテルの上空へと差し掛かる。
「どうしてこんな……」
「……」
「……」
「こりゃひでぇ……」
右腕にしがみつくラキュース、左腕に掴まったティアとティナ、そして両脚にぶら下がったガガーランは目にした光景に言葉を失った。
エ・ランテルの城壁外、そこには難民と化した多数の市民の姿が映る。なんの準備も無く街を飛び出したのだろう、人の姿以外には棒切れと布で拵（こしら）えたような粗末なテントがポツポツと見えるだけだ。多くはただ身を寄せ合い座り込み、絶望に打ちひしがれていた。
そして城壁内、街の様子はというと……濃い霧に遮られ視程がまる

で通らない。発生源は一番外周の城壁内なのだろう。そこが一番濃く、内側にいくにつれ霧の濃さは薄くなっていく。そして街の外には全く漏れていないことから、この霧が自然に発生したものでないのは確実である。

　すると街の中心からイビルアイが一直線に飛んで来るのが見えた。

「早いな。流石はペロロンチーノ殿だ」

「イビルアイ！　街の中の様子は……!?」

「ああ。幸い最内周部にはまだ多くの生存者がいるが、あまり長くは保たなさそうだ。とても空から運び出せる人数ではないから、退路を確保したいところだが……内周部は、まだいい。問題は外周部だ」

　生存者が残っていたことは喜ばしい。イビルアイの言葉に一筋の希望が見えたが、その声音からは厳しいものが感じ取れる。

「外周部……ということは、あの濃い霧の中ね。一体何があるというの？」

「足の踏み場もないほど、ただひたすらにアンデッドだらけだな。見通しが悪くてはっきりとしたことは分からなかったが……血肉の大男（ブラッドミート・ハルク）など、なかなか手強いモンスターも混じっていたぞ」

　イビルアイは肩を竦めてみせる。

　血肉の大男（ブラッドミート・ハルク）――強い腕力を誇る巨大な動死体（ゾンビ）だ。特殊な攻撃方法を持つわけではないので、単体であれば銀級（シルバー）冒険者チームでも足止めをすることくらいは可能だろう。しかし、再生能力を保有するため、チームに魔法詠唱者（マジックキャスター）がいなければ倒すことが難しい存在だ。

「そんぐれぇなら俺たちでどうにでもなるが……数がキツイか」

「ああ。いくら筋肉バカのお前でも多勢に無勢ではな。それに、これだけのことをやらかした相手だ。まだ数段上のアンデッドがいてもおかしくもない。……ん？　ペロロンチーノ殿？　なにか心当たりでも？」

　ペロロンチーノの脳裏には死霊系に特化したオーバーロードの姿がよぎっていた。だが、頭を振って否定する。例え同じく人間を止めてしまったとしても、こんなことをしでかすような人ではないはずだ。

「いや……特に無いな。そっちはどうだ？」
「……近い事例を知っている。アンデッドが集まる場所にはより強いアンデッドが生まれる……この特性を利用して、かつて一つの都市を丸ごとアンデッドの跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）する地に変えた魔法儀式――〝死の螺旋〟というものがある。これによく似ている」
「ズーラーノーンの邪法……」
「だったら尚更時間がない」
聞き覚えのあったのか、〝蒼の薔薇〟の面々の表情は一層険しくなる。
「うむ。避難を優先させたいところだが、先にも言ったとおり凄まじい数が相手だ。外周部を横断する退路を維持するのは……まず無理だろう。そこで提案なのだが、皆は最内周部の防衛にまわってくれないか？　その間に私とペロロンチーノ殿で敵の首魁を叩く！　どうだろうか、ペロロンチーノ殿？」
「親玉をぶっ潰せねえのは口惜しいが仕方ねえ。　時間稼ぎは任せてくれ！」
「俺も構わないけど……アンデッドだらけなんだろ？　イビルアイこそ大丈夫かい？」
「ふっ。私の正体を忘れたかペロロンチーノ殿」
そう言うとイビルアイは一つの指輪を外して見せた。

◇

三重の城門の一番内側。機能性を重視した一番外側の門ほどの高さは無いものの、それは立派な造りをしていた。壁面のいたるところに、権力や財力を示すかのような装飾が施されていたのだが――今や見る影もない。
生者の匂いを嗅ぎつけたアンデッド達が四方八方から迫り、その美しい壁を覆い隠す。この辺りの霧が薄いせいか、はたまた他所で逃げ

遅れた人間を貪っているせいか、ここにはまだ骸骨（スケルトン）や動死体（ゾンビ）程度しか現れていない。
　生き残った――もとい、取り残された衛兵と冒険者、合わせて２００人近くが交代で城壁の上に登り、時折よじ登ってこようとするアンデッドを突き落とす。さらに稀だが飛行出来る死霊（レイス）などが現れたときは魔法詠唱者（マジックキャスター）が集中砲火を浴びせてこれに対処する。
　防戦一方の籠城戦。幸いにも食料庫や武器庫を内包していたため、現状維持だけなら数日間持ちこたえることが出来そうだ。それだけあれば外からの救援が間に合うかもしれない。
（いや、きっと大丈夫だ。助けは必ず来る。そう思わなくてはやってられん。）
　ミスリル級冒険者チーム〝虹〟のリーダー、モックナックは疲労感を湛えた瞳で周囲を見渡す。数々の死線を乗り越えてきた彼ですらこうなのだ。初めて間近に感じる死の恐怖、これに長時間晒され続けた者たちの精神的な疲労は最早ピークに近い。
　もちろん彼らとて、助けだされるのを雛鳥のようにただ口を開けて待っている訳ではない。魔術師組合からは〈飛行（フライ）〉の使える精鋭チームが、冒険者組合からはイグヴァルジ率いるミスリル級冒険者チーム〝クラルグラ〟が、状況の把握及び退路候補の選定を目的として周囲の調査に乗り出したのだ。
「どうかね？　状況は」
「これは魔術師組合長……相変わらずですよ。そろそろ彼らが戻ってきてもおかしくないはずですが」
　モックナックの隣に並んだのは痩せすぎていて神経質そうな線の細い男だ。名をテオ・ラケシルという。
「ふん。わざわざ危険な陸路を行こうとするとは愚かな男だよ。我々魔術師組合だけで安全に済む話だというのに」
「はは……。仰るとおりですが、彼にも……彼なりの考えがあったのでしょう。あんな性格ですが、今までにたった一人の欠員も出さずにミスリル級冒険者のリーダーを務めている男ですので」
「そうかね……いや、すまないね。こんな時だというのに。私だって

彼には無事で帰って来てもらいたいと思って……ん？」
薄っすらと霧の向こう側に人影が見えた。高速で飛来する人影は近づくにつれ魔術師組合のメンバーと判別出来たが、同時にその慌てようと恐怖に歪んだ表情からただ事ではないことが察せられる。
「どうした!?」
「組合長っ！　お、応援を！　骨（スケリトル）の竜（ドラゴン）と死者（エル）の大魔（ダー）法使（リッ）いです（チ）！」
耳を澄ませば確かに金属がぶつかる音に、地響きのような低い音、そして魔法的な爆裂音が響いている。そしてその音は徐々に大きくなっていく。
目配せ一つでモックナックは頷くと、城壁の下へと飛び降りた。後に彼のチームメンバーも続く。
息巻く男を宥め、ラケシルは詳しい状況を訊いていく。

上空の高い位置からでは霧のせいで地表の様子が把握出来なかったため、魔術師組合のチームは霧の中を飛行していた。決して油断していた訳ではない。しかし、緊張感が続く中で何事も起こらなければ注意が散漫になる瞬間もあるだろう。
仲間の一人が脚を捕られた。寄生虫の様に蠢く大量の内蔵を孕むアンデッド――内臓（オーガン）の卵（エッグ）の触手の様に絡みつくピンク色の腸によって。
たちまち引きずり落とされたその先には、多数のアンデッドが待ち構えていた。
しかし、魔術師組合の精鋭チームにはもちろん信仰系魔法詠唱者（マジックキャスター）も編成されている。咄嗟に唱えられた〈アンデッド退散〉によってそのほとんどを滅ぼすことに成功した。
体勢を立て直し、再び上空へ避難しようとしたときに現れたのが、骨（スケリトル）の竜（ドラゴン）――魔法に絶対耐性を有すると知られる竜の姿を象った人骨の集合体だ。
地上すれすれを這うように薙ぎ払われる巨大な骨の尻尾。負傷した仲間を担いでいては回避は間に合わない。ダメージ覚悟で

〈盾壁（シールドウォール）〉を発動させる。
ガキィィイン――
体を襲う痛みは来なかった。代わりに硬質な音が鳴り響いたその先には、目の前で立ちはだかる冒険者――〝クラルグラ〟のチームの姿があった。
「何ボサッとしてんだ!!　邪魔だ!　退いてろ!」
「す、すまん!　恩に着る!」
魔法詠唱者（マジックキャスター）だけではどうしようもない相手だが、ミスリル級冒険者であれば骨竜（スケリトル・ドラゴン）の一体ならどうにか出来る。
あとは冒険者が戦いやすいように、周りの雑魚アンデッドを近づけさせなければ勝てる。助かる。
――そう思った次の瞬間だった。薄い霧の向こう側から姿を現したのは、もう一体の骨竜（スケリトル・ドラゴン）。そして足元には古びたローブを纏い、片手に捻れた杖をもった人影が見える。この状況で助けに駆けつけた仲間であるはずもなく、ましてや人間ですらなかった。その証拠に顔は腐敗した皮が僅かに残る骸骨で、ぽっかりと空いた眼窩には叡智の光を宿していた。死者の大魔法使（エルダーリッチ）い――これも一体だけであればどうにか対処出来る相手だが、状況は違う。
「応援要請だ!　行け!!」
男は全力で飛んだ。良くも悪くも、予想していたより城壁は近いところにあった。

――状況は良くない。このままではミスリル級冒険者2チームと魔術師組合チームが全滅してしまう可能性もある。
ラケシルの迷いは一瞬だった。今、この戦力を失えばどの道後が無い。
総力戦だ。最低限の守りを残してこの困難に打ち勝つ他無い。
ラケシルは立ち上がり、冒険者組合長のアインザックに〈伝言（メッセージ）〉を繋げようとした瞬間、視界の隅に何かが映った。それは薄暗い雲と霧を引き裂くような、天から引かれた白銀に輝く一本の線だった。

第十二話：死都エ・ランテル　後編

「モック！　お前と一緒に戦うのは何年振りだったか――なぁ！」
迫り来る骨の竜（スケリトル・ドラゴン）の前脚を受け流し、すれ違いざまに一太刀浴びせるイグヴァルジ。
しかし、やはりというべきか。斬撃によるダメージは薄く、狙った前脚は断ち切れるどころか、やっとヒビが入る程度だ。
まるで痛みを感じさせない動きで振り向いた、竜を模した骨の顔はどこか嗤っているようにさえ思えた。
「覚えちゃいねえ――!?　イグヴァ！　後ろだ!!」
後ろを振り返るまでもなかった。自分の立つそこだけが、覆いかぶさる影で一層暗くなるの感じ取れたからだ。
回避は――ダメだ、間に合わない。
咄嗟にかざした剣を盾に、巨大な塊を受け止める。
ズシリ。骨が軋むようだった。膝は地に着き、押し潰されるまでと何秒保つかわからない。
振り下ろされたのは死体の塊。無数の死体が集まって出来た４ｍを超す巨大なアンデッド、集合する死体（ネクロスオーム・ジャイアント）の巨人の腕だった。
（ふざけんな！　魔法詠唱者（マジックキャスター）共は何をしてるんだ。骨の竜（スケリトル・ドラゴン）２体をたった４人で任されてやってるというのに、こんなデカブツを通しちまうなんて！）
しかし、悪態を言葉にする余裕すら生まれない。
（こんなところで終わってたまるか。俺がトップに、オリハルコン、アダマンタイト、いや……英雄と呼ばれる存在になるんだ！）
それはイグヴァルジの夢だった。子供の頃、村にやってきた詩人の英雄譚（サーガ）を聞き、今まで追い求めてきた夢だ。自分以外の強者は必要ない。仲間など自分が頂点を取るための道具に過ぎない。ただ自分こそが、かの十三英雄という世界を救った英雄になるんだ。
そう。求めたのは英雄だった――
「――暗黒刃超弩級衝撃波（ダークブレードメガインパクト）オオオ!!」
天から声が届くの先か、爆風が先か。

ほぼ同時だったと思う。のしかかっていた重みが消えた次の瞬間には、イグヴァルジは後ろへゴロゴロと吹き飛ばされていた。
視線の先に４ｍを超す死体の塊はもういない。代わりにそこから立ち上がったのは聖女のごとき美しい女だった。手にした大剣の刀身は夜空に浮かぶ星の輝きを有し、不釣り合いのようでいて、けれど妙に似合っていた。
口をあんぐりと開け、見惚れてしまいそうになる自分を叱責する。
敵はそれ一体ではない。まだ凶悪なアンデッドが３体も残っているはずだ。
「オラァッ！」
担ぐのがやっとと思えるような刺突戦鎚が振り回される。遠心力で加速されたそれは骨竜（スケリトル・ドラゴン）の頭を打ち砕く。
だが打ち砕いてなお、その勢いは止まらない。反動を巧みに制御して、そのまま２体目の骨竜（スケリトル・ドラゴン）に向かう瞬発力と変換したのだ。
その巨体から考えられないほどの加速を見せた戦士は瞬く間に２体目に肉薄すると、頭部目掛けて大きく振りかぶり――そして振り落とす。
しかし、外れだ。刺突戦鎚の先端は目標を失い地面に打ち付けられた。
確かに速攻な攻撃ではあったが、このクラスのアンデッドともなると、真正面からの単純な攻撃では躱されることもあるだろう。
大振りな攻撃を外し、バランスを崩した隙だらけの戦士の前には、高く振り上げられた骨の前脚が迫る。
（《即応反射》は？　チッ！　使えねえのか!?）
《即応反射》は強制的に姿勢を戻すことで攻撃後の隙を打ち消す武技だ。数ある武技の中でも習得すべき順位が高いそれを、目の前の戦士が使えないとは思ってもみなかった。
予想される結末にイグヴァルジが目を逸らしたくなったその瞬間――
「砕けや!!」
覇気が込められた怒声と共に、刺突戦鎚が突き立った大地が砕け

る。まるで大地震がそこにだけ生じたようだった。
足元が一気に破壊されたことと、それによって生じた衝撃波により、骨の竜（スケリトル・ドラゴン）の動きは封じられる。そこからカチ上げられた刺突戦鎚が骨の頭部を吹き飛ばし、偽りの命を散らすまでは瞬き一つの出来事だった。
残るは死者（エル）の大魔法使（ダーリッチ）いあと一体。
〈火球（ファイヤーボール）〉をも連発で放てる凶悪なアンデッドだ。戦闘は苛烈を極めているに違いない。
しかし、イグヴァルジの視線の通る先にはそのような光景は映っていない。代わりにこの戦場にあって、涼し気な声が聞こえて来る。
「おう。そっちも片付いてるようだな」
「当然」
「一人で2体はずるい」
そこに居て、そこに居ない。視線を外せばたちまち見失ってしまうほど、闇に溶け込んでいる影の薄い女が二人――それを今、初めて認識する。
そして、その足元に転がるのはただの屍。既に頭部と体は別れを告げ、地に伏していた。
「わりぃな！　けど、あんなすげぇもんずっと見せられてたんだ。滾（たぎ）っちまって、一発じゃ収まらねぇって！」
「はいはい、呑気なこと言ってないの！　さあ怪我人を連れて壁内まで退くわよ！」
間違いない。こいつらは英雄と謳われるアダマンタイト級冒険者チーム〝蒼の薔薇〟だ。
この時、イグヴァルジの心の中に宿った感情は助かったことによる安堵や、本物の英雄を目にした歓喜や憧憬ではなかった。
むしろ力の差を目の前でありありと見せつけられたことにより、薄暗い感情が渦を巻く。
悔しい。何故自分が助けられ、助ける側ではないのか。
羨ましい。何故自分に力がなくて、あいつらにあるのか。
憎たらしい。何故……そんなに魅力的なのか。

イグヴァルジは白銀の鎧に包まれた麗しい女――ラキュースを睨みつけ、決意を新たにする。
今に見ていろ。いつか必ずその地位から引きずり下ろし、そして自分の手の内に収めてやる、と。
不快な視線を浴びせられながらも、それを無視してラキュースは天を仰ぐ。そこにあるのは相も変わらず薄暗い雲が広がるばかり。
何も居ないことを確認したその顔は、どこか儚げで少し寂しそうだった。

◇

深く濃い霧に覆われたエ・ランテル外周部。墓地のある西側へ進むにつれ、アンデッドの気配とともにその濃度はさらに濃くなるようだ。
徘徊する数多のアンデッドの頭上をイビルアイは難なくすり抜けていく。本来、命ある者に対して貪欲に牙を剥くアンデッド達だが、側を通りすぎてもなお、感心を示そうとはしなかった。
その秘密は先程外した一つの指輪にある。イビルアイが人間社会に紛れて生活するのに必須なそれは、アンデッドの気配を隠蔽するマジックアイテムだ。
これにより、同じアンデッドであるイビルアイ側から敵対行動をとらない限り、知能の低い低位アンデッドは襲っては来ないという寸法である。
イビルアイは前方に大きな建物の影が見える所までたどり着くと、速度を緩め足を地に着けた。
墓地にある大きな建築物ともあれば、それは霊廟だろう。しかし、イビルアイの目線はその手前に整列する物々しい軍勢に固定された。
「ここで間違い無いようだな……」
この忌わしき災厄を引き起こした術者は外周部の何処かに潜んで

いる、という推測は当たっていたようだ。
魑魅魍魎。この世のどんな冒険者でもあっても尻尾を巻いて逃げ出してしまいそうな、そんな光景がイビルアイの目の前に広がっていた。
イビルアイは北側から反時計回りに、そして内周部へラキュース達を運び終えたペロロンチーノは時計回りに捜索を行う手はずになっている。
半分どころか、その更に半分も周らない内に目的地へたどり着けたのは僥倖と言えよう。だが逆にそれは、強力な助っ人であるペロロンチーノが到着するまで時間がかかると言うことでもある。
目に見えているアンデッドが全てでは無いだろう。敵の正体も判らぬ情報不足なこの状況で闇雲に飛び込むのは危険すぎる。安全を期すなら彼との合流を待つべきだ。しかし、時間が経てば経つほどアンデッドの数は増え、状況は悪くなる一方なのもまた事実。
「……何を恐れているのだろうな、私は。これでも伝説にすら謳われる女。例え本物の〝死の螺旋〟であったとしても、私自身が乗り越えねばならない壁だ！」
イビルアイは地を蹴り〈飛行（フライ）〉により飛び上がるとアンデッドの軍勢の前に躍り出た。
「まずは数を減らさせてもらうぞ！　食らえ！　〈結晶散弾（シャード・バックショット）〉！」
初手に選んだのは彼女のお気に入りの魔法だ。拳よりも若干小さめな結晶の散弾が撒き散らされる。
弾雨に晒されたアンデッド達は大した抵抗も出来ずに崩壊し、物言わぬ屍となって次々と大地に沈んでいく。
広範囲に連続で放たれた魔法によって、百に近い数のアンデッドを一気に潰せた。だが、やはりというべきか。土埃の向こう側から憎悪が込められた視線を感じる。
耐え切ったアンデッドは全部で6体。魔法への完全耐性を持った骨（スケリトル）の竜（ドラゴン）が5体。そして残る1体は――
「オオオァァァァァァァァ――!!」
聞くものの肌があわ立つような叫び声が響く。

「死の騎士（デス・ナイト）だと!?　これら全てを使役してるとでも言うのか……？」
左手には巨大なタワーシールド、右手には波打つ刀身のフランベルジュ。巨体を包む黒色の全身鎧には血管のような真紅の文様があちらこちらに走っており、鋭い棘が所々から突き出している。その姿はまさに死の騎士というのに相応しかった。
「ズーラーノーンの盟主……いや、まさか朽棺（エルダーコフィン）の竜王（ドラゴンロード）？」
伝説級のアンデッドを使役出来るとすれば、それはやはり伝説の存在でしかあり得ない。イビルアイのよく知る――彼女を半ば無理やり〝蒼の薔薇〟に放り込んだ老婆――13英雄の一人として名を馳せた死者使いのリグリット・ベルスー・カウラウですら、そこまでの実力は無い。
（やはりペロロンチーノ殿と合流するまで待つべきか。……いや、彼なら必ず来てくれる。ならばそれまでに敵の正体だけでも掴んでやる）
暫しの逡巡の間も、眼下のアンデッドは霊廟の前から動こうとはしていない。遠距離攻撃の手段を持たないという理由もあるが、骨の竜（スケリトル・ドラゴン）が飛びかかって来ようとすらしないのは、霊廟の中に守るべきものがあるという証左だろう。
理想を語れば、空中におびき寄せた骨の竜（スケリトル・ドラゴン）を各個撃破し、最後に死の騎士（デス・ナイト）を高火力の魔法で仕留めるのが一番効率が良い。
しかし、そう甘くはない現実に、少し残念に思いながらもイビルアイは決意を固めた。
「行くぞ！」
イビルアイは拳を握りしめると一直線に降下を始める。目標に定めたのは一番手前の骨の竜（スケリトル・ドラゴン）だ。
〈飛行（フライ）〉により後押しされた速度を小さな拳に乗せたパンチは見事に頭部へ命中し、その巨体を揺さぶった。拳よりも一回り大きい穴を抉ることに成功するが、まだ沈まない。
衝撃でたたらを踏んだものの、痛みも恐怖も感じない骨の体に怯みはない。お返しにとばかりに背後から骨の腕が横薙ぎに振るわれる。
しかし、イビルアイは〈飛行（フライ）〉でもって即座に体勢を立て直すと、頭

部の高さまで浮上し回し蹴りをその横っ面に叩き込んだ。
一発目のパンチで脆くなっていたためか、人骨の塊で出来た頭部は粉々に飛散し、遅れてその大きな体も崩壊する。
「ふぅーっ。拳で戦うのは久々だな」
〝蒼の薔薇〟に加入し、一人で戦うことの無くなったイビルアイにとって肉弾戦は久しいことであった。
チームの戦いにおいて役割分担は大切だ。前衛には敵の注意を引き付けチームの盾となる役割が、後衛には状況を的確に判断しチーム全体を支援する役割がある。これらお互いのやるべき事をしっかり行うことで連携が生まれ、確実な勝利へと繋がる。
魔法詠唱者（マジックキャスター）であるイビルアイの役割と言えば、後衛だ。仲間を支援し、隙があれば攻撃にも参加する。純粋な攻撃魔法のみに頼る魔法詠唱者（マジックキャスター）は二流、これはイビルアイの持論でもある。
では何故その魔法詠唱者（マジックキャスター）がその身を武器にして戦えるのか。それは単純にイビルアイの肉体能力が高いからだ。それこそ〝蒼の薔薇〟の戦士であるガガーランを凌ぐほどに。
一息つく間にも、獲物を追い詰めるようにイビルアイの周りを残るアンデッドが取り囲む。その連携が取れた動きには、裏から指示を与えている者の存在が感じ取れた。
『――冥界へ誘われし迷仔よ。生者を怨み憎む我が同胞よ。我に身を委ねろ……』
視界の奥が霞むような、今までに経験したこと無い感覚がイビルアイを襲った。
しかし、頭を軽く振ることで容易くその誘いを弾く。
「……ほう。アンデッド風情が我が支配を弾くとは。何用だ、吸血鬼（ヴァンパイア）よ」
声と共に霊廟の奥から現れたのは一人のアンデッド。
――いや、髪の毛一本も生えていない頭部と、やつれ果てた髑髏地味た顔は死者の大魔法使い（エルダーリッチ）に近いものを感じるが、全身の皮は今だ健在で、その姿からしてもまだ人間なのだろう。ただし眼球は既に白く濁り、開きっぱなしの口からは泡が漏れ出ていた。とても正気とは思

えない様子だ。
　そしてその手には強大な魔力を感じさせる歪な黒いオーブが握られている。
「お前がこの事件の黒幕か！」
「……いかにも。我は世に死を撒き散らすもの也。して、それを知って何とする？　共に死を撒き散らせたいと言うのなら考えなくもないぞ」
　その声に抑揚はなく、意味のある言葉をただ発声しているだけに思えた。その様子からして、精神支配を受けているのは彼自身なのではと思わせるほどだ。
　代わりに黒いオーブからは拍動するかの如く負の魔力が黒い光となって噴き出している。
「死を撒き散らす……か。〝死の螺旋〟を行ったのもそれが理由か!?」
「それはこの人間の手段。アンデッドとなる願望を抱いておったが、我が目的はさらにその先にある、より多くの死だ」
　イビルアイは仮面の下で小さく笑った。
「……なるほどな、石ころ風情が。今すぐ降伏すると言うのなら漬物石として使ってやらんでもないぞ？」
「呵呵。可笑しな事を。〝死の螺旋〟で力を得た我に抗おうとは。邪魔立てをすると言うのなら容赦はせん」
「愚かな石ころよ、二度とその儀式の名を口に出来ぬよう粉砕してやる！」

◇

（おお！　近接距離、遠距離ともにバランスの良い攻撃手段を持ってるじゃないか。それに防御面も……問題無さそうだな）
　不可知化特殊技術（スキル）《顔の無い王（ノーフェイス・メイキング）》を使用したペロロンチーノは物

陰に隠れて……ではなく、イビルアイの背後に立ち、堂々とその戦い振りを観察していた。ちょうど昨日の今頃、神都の時はすぐに看破されてしまったが、どうやら特殊技術（スキル）は正常に機能しているようだ。

（大地系の中でも水晶特化のエレメンタリストかな？　あの位階だと骨の竜（スケリトル・ドラゴン）の耐性は通せないけど、死の騎士（デス・ナイト）の防御を突破するには十分か）

繰り広げられる戦いは苛烈さを増していた。

老人のように見える男は死の騎士（デス・ナイト）を盾にしながら骨の竜（スケリトル・ドラゴン）をけしかけ、イビルアイを四方から挟撃する。

しかし、イビルアイの周囲に展開された〈水晶盾（クリスタルシールド）〉はこれらを全て防ぎ切り、なおかつ彼女の攻撃の手は緩まない。

骨の竜（スケリトル・ドラゴン）の存在を半ば無視した形で撃ち込まれる水晶の魔法は死の騎士（デス・ナイト）を徐々に追い詰めていく。

そしてついに〈水晶騎士槍（クリスタルランス）〉が死の騎士（デス・ナイト）の胸に深々と突き刺さった。

「まだ倒れないか化け物め。だがこれで終わりだ！　〈水晶の短剣（クリスタルダガー）〉！」

イビルアイの掌から射出された水晶の短剣は開けたヘルムの中央を貫き、今度こそ偽りの命を無に還した。

（あれ……？　えっ、もしかしてこれで終わりじゃないよな……）

本来ならイビルアイの活躍に賞賛を送るべきところであるはずが、一部始終を見守っていたペロロンチーノの胸の内は焦りに焦っていた。

ピンチとなった彼女の前に颯爽と現れ、窮地から助け出す。そんな過去にも実績のある完璧なヒーローを演出する作戦を企てていたのだ。

しかし結果は、ピンチらしいピンチもなくイビルアイの圧勝である。さらに、老人からオーブを奪い取り、残る骨の竜（スケリトル・ドラゴン）も殲滅し尽くす勇敢な乙女の姿がペロロンチーノの目に映り込んでくる。

（いやいや、まだ慌てるような時間じゃない。まさか死の騎士（デス・ナイト）がラスボスな訳がないだろう。そもそも切り札は伏せておくのが定石なのだから、始めから姿を見せてたあいつは前座に過ぎないはずだ。きっ

とそうに違いない。ならば、本当のラスボスはあの霊廟の奥にいる――）

ペロロンチーノは不可知化を維持したままイビルアイの後に続き霊廟の中へと足を踏み入れた。

隠し通路だったろう地下への階段を降りると、大きな空間が広がっている。そしてその中央には棒立ちで佇む一人の少年の姿があった。

変に透けた衣装を纏い、頭には蜘蛛の巣にも似た繊細な作りのサークレット、そして顔には瞼の上から付けられた刀傷が一直線に走っている。赤黒い涙のように固まった血の跡から察するに失明は確実だろう。まるで敵意を感じさせないどころか意識さえ無さそうな雰囲気は、彼も被害者の一人なのかもしれない。

だがそれよりも何よりも、ペロロンチーノに警鐘を鳴らすことが他にあった。

目元まで長く伸ばされた前髪、中性的な顔立ち、日焼けは少なくインドア系男子を思わせる体つき、これらの特徴を全て併せ持つ人物像に心当たりがある。

それは――主人公。といっても主にギャルゲー、エロゲのだ。

自称平凡、特にこれといった才能や特技も無いとか言いつつ何かしら持っていて、何故か両親が海外赴任やら何やらで不在にしている、どこにでもいる一般的な少年を装った存在。それと相違ない。

そのような男達を今までに何百人も見て、そして自身を投影してきたペロロンチーノが警戒しないはずがない。

なぜなら、彼らは決まって甲種（恋愛）一級フラグ建築士だからである。

「やめろ！　そいつに触れるんじゃない!!」

「ひゃあっ!?」

突然の背後からの怒気を含んだ大声に驚き、イビルアイはすっとんきょうな声を上げて飛び上がった。

「な、なんだペロロンチーノ殿ではないか……驚かせないでくれ」

「えっと、すまん。だが、こいつは危険だ。いいか？　絶対に触れちゃダメだ」

「よ、よく分からないのだが、分かった。ペロロンチーノ殿がそこまで言うのなら従おう……」
　もはや登場の仕方とか作戦とか全てが台無しになってしまったが今更だ。とりあえず今は物理的な接触を防げたのだから良しとしよう。
「それで……こいつがさっきからピクリともしないのは精神支配の影響か？　……このサークレットだよな、どう考えても」
「うむ。この形状に思い当たる節があるのだが……魔法を掛けてみてもいいだろうか……？」
　ペロロンチーノは直接触れないようにと念を押した上でイビルアイに了解の意を示す。
「〈道具鑑定（アプレイザル・マジックアイテム）〉……やはり叡者の額冠。スレイン法国の最秘宝のひとつだ」
「へぇー。それはどんな物なんだ？」
「私の魔法では詳しい効果までは分からなかったが、伝え聞いた話によれば……」
　叡者の額冠――着用者の自我を封じることで、人間そのものを超高位魔法を吐き出すだけのアイテムと変える神器である。ただし着用できる者の条件は非常に厳しく、適合者は１００万人の女性に一人という割合だ。更にこれを外すと魔法ですら治癒の効かない発狂状態に陥るというデメリットも存在する。スレイン法国ではその適合者、もとい生け贄を巫女姫と呼ぶという話だ。
「……いや、でもこいつ男だよな？」
　改めて視線を落としてみれば、小さく縮こまってしまっているもう一人の彼の姿があった。透けた衣装はそんな彼のプライバシーを守るどころか、むしろ一層にその存在を際立たせている。望んでそんな格好をしている訳ではないはずだから、同情は禁じ得ない。だが、自分と比べてあまりにも可愛げもあるその姿にペロロンチーノの男としての自尊心が満たされるのと同時に、優越感から余裕も生まれてきた。
　隣を窺えば、つられて少年の下腹部へと視線を落としてしまった彼

女の様子が目に入る。慌てて視界からソレを追いやるように壁へと向き直った仮面の下では、一体どんな表情をしているのかとても気になるところである。
「んんっ！　お、おそらく彼はエ・ランテルでも有名なンフィーレア・バレアレだろう！『あらゆるマジックアイテムの使用が可能』という生まれながらの異能を持っていると聞くぞ」
生まれながらの異能というのは昨日も少し聞いていたが、なるほど、そんな便利なものもあるのかと感心してしまう。
ただ、それよりも興味を引いたのは普段の彼女らしからぬ落ち着きない素振りと声色だった。
「もしかして、２００年以上も生きてきて男の見るの初めて？」
「ふぁっ!?　み、見たことぐらい！　あっ、いや、ちゃんとは無いが……あーもぅ、なんてことを言い出すのだ、ペロロンチーノ殿は！
それより今は、これをどうにかしないといけないのではないか!?」
「コレ……とは？」
「叡者の額冠に決まっているだろう!!」
ふむふむなるほど。なんかこう、勝手にシャルティアのイメージで考えていたのだが、こうも初いとは。もしかしてもしかしそうだ。
これ以上からかっても可哀想、と言うより嫌われかねない気もするのでここらで自重すべきだろう。
「すまんすまん。だが、このままだとマジックアイテムと化した人形、サークレットを外したところで処置無しなぁ……ならいっそ、一思いに命を絶たせてやるべきか」
「わわっ！　ちょっと待ってくれ、まだ助かる可能性もゼロではない。叡者の額冠さえ破壊出来れば、発狂させずに救えるかもしれないのだが……ただ、ここまで高位なマジックアイテムだとその手段が無いに等しいのも事実だ……」
言葉尻は小さく、自分の無力さを嘆いているようだった。
確かにマジックアイテムにはアイテムレベルが存在し、その見た目にそぐわず、あり得ないほどの耐久度を持つものもある。ユグドラシルではそうだったが、その口振りからすればこの世界でも同様なのだ

ろう。
（貴重なアイテムを失う代わりに、少年を救える可能性がある……か。割りと博打な気もするのだけど……そこまでして助けたい理由があるとか？　まさか、こんなのがイビルアイの好みだと!?　いや、これが全てのルートにフラグを建てられる主人公の力だと言うのか!?）
「なぁ……どうして、そこまでして助けたいんだ？」
訊かずにはいられなかった。
それを聞いたイビルアイは少し考えこむ素振りを見せたあと、仮面を外し正面からペロロンチーノを見据えた。その真紅の瞳は光を透かした色硝子の様に澄んでいて、吸い込まれそうになるほど美しかった。
そして彼女は言葉を選びながらゆっくりと語りだす。
「……昔、私は絶望のどん底にいた。もし、あの時救いの手を差し伸べて貰わなければ、今もなお言葉を失ったまま、ただ滅びた街を徘徊するだけのアンデッドになっていたかもしれない。私に光を与えてくれたのがかつての仲間達であり、今の仲間達だ。その恩は到底返しきれるものではないと思っている。だからせめて、救えるかもしれない命が目の前にある限り、私は諦めたくないんだ。……ペロロンチーノ殿にとってはたかが人間と思われるかもしれない。確かに私達からすれば彼らは脆弱で貧弱で短命だ。だけど、だからこそ……」
「――わかった。わかっているさ」
「ペロロンチーノ殿……」
「あー……さっきの発言は……申し訳ない、俺が悪かったよ。だけど誤解しないで貰いたいな。俺は別に……うん、まあこれは止めておこう。それとな、他にも勘違いしていることがあるぞ？」
そう言うとペロロンチーノは、右手を広げる。そこへ魔法的な輝きが灯ると、細長くしたメイスに矢羽を着けたような奇怪な矢が一本、生み出された。
「それは……？」
「打撃属性と武装破壊効果を有した矢だ。これを……こう！」
ブンッ――

音と共に空気が揺れた。手に持ったままの矢をそのまま少年へ向けて振ったのだ。
《矢切り》――弓士の職業（クラス）で得られる初歩の近接攻撃特殊技術（スキル）である。
ユグドラシルでは、防御力が極端に低くなる職業（クラス）構成上、純粋な弓使いがわざわざこの特殊技術（スキル）を使うことは滅多にない。だが、筋力、敏捷性に応じた攻撃力の伸びが高いという特徴があった。最盛期では〝殴り魔〟ならぬ〝殴り弓〟というネタビルドに走る者もいたほどに、そこそこ使える特殊技術（スキル）である。
巻き起こった乱流に顔を庇いながらイビルアイが見たものは、無数の細かな輝きとなって砕け散る叡者の額冠と無傷の少年。
そのまま崩れ落ちそうになる少年をペロロンチーノは優しく受け止めてやった。
「すごい……！　まさかこんなにも簡単に破壊してしまうとは！」
「そ、そうか？　まあ、聖遺物級（レリック）程度が限界だし、俺の仲間はもっとすごいぞ？　触れた物をほとんど何でも溶かしちまう奴だっていたんだからな」
「そうなのか……やはり本物の英雄は格が違うな」
自分に出来ないことを軽々しくやってのける、そんな存在に出会うのはイビルアイにとっていつの日以来だったろうか。
真っ直ぐ過ぎる眼差しに気恥ずかしさを覚えたペロロンチーノは頬のあたりを掻くと、少年を肩に担ぎ上げた。
本当は、もう少し二人でお互いの仲を深め合いたいところだったが、今はお荷物を抱えている上、地上ではまだ悲惨な状況が続いていることだろう。力を貸すと言ったものの全く活躍していないペロロンチーノは、この後の働きで挽回すべく行動しようと踵を返し――数歩も進まないうちに立ち止まった。
「あっそうだ。俺が安全な所まで運ぶけど、今後もこの少年には絶対に接触しないと約束して欲しい。〝蒼の薔薇〟のメンバーもだ。あ、けど、ガガーランは例外な。んー……というか彼女に預けよう。面倒見よさそうだしな、うんそうしよう！」

いったいどんな理由があって、とイビルアイは首を傾げるがそこにはきっと深い意味があるのだろう。

ペロロンチーノの後に続いて霊廟から外に出ると、霧は薄れ、雲の隙間からは陽光が光の柱となって降り注いでいた。

第十三話・密会

エ・ランテル三重の城壁の最内部。そこにある貴賓館の一室に明かりが灯った。

「お疲れ様です、ラナー様。お声を掛けてまわられたエ・ランテルの民も勇気づけられたことでしょう。ですがやはり……」

「――ありがとう、クライム。それでも、私に出来ることと言えばこの程度のことでしかないのです。もっと早急に人手や物資が集められればよいのですが……私はあまりにも無力です」

優しい笑顔を湛えていたラナーの表情は次第に曇り、やがて悲しみへと変わる。

クライムと呼ばれた、唯一王女付きが許されている王国兵士の青年は喉まで出かけていた言葉を飲み込み、心優しい主人を励ますための言葉を慌てて口にする。

「そ、そのようなことはありません！　ラナー様は誰よりも早く被災地へ駆けつけ、不安に怯える民に希望と安らぎを与えてくださいました。その行いは誰にでもできることではありません！」

エ・ランテル壊滅の一報が伝わったその日、王宮内は騒然となった。兵を掻き集め、直ちに出陣させるべきか。はたまた街道を封鎖し、王都の守りを固めるべきだという意見が貴族の間で飛び交う。

そんな混乱の最中、ラナーは再びエ・ランテルへ向かう戦士長率いる先遣隊のためにポーションをはじめとする医療品や食料を乗せた荷馬車を一台用意させた。

普段と変わらない装備のまま、何が待ち受けているかも分からない死地に赴くこととなった戦士達にとって、この気遣いほど嬉しいことは無かった。

戦士達は口々に「俺らには黄金の女神が付いている！」と、恐怖を士気で塗り潰し王都を出発した。

しかし、彼らは知らなかった。その女神が文字通りあまりにもすぐ側で寄り添っていたことを。

ラナーが王宮から姿を消し、部屋に残された手紙をメイドが見つけ

たのがその半日後。そしてクライムが姫を連れ戻すため馬を走らせ、一団に追いついたのは奇しくも丁度エ・ランテルに到着した昨夜のことだった。

「クライム……本当は私怖かったの。来てくれて嬉しかったわ」

事件は既に解決していた。首謀者は捕らえられ、アンデットの脅威も消えたとは言え、絶対に安全な状況とは言い切れない。クライムはラナーと合流してから何度も何度も王都へ戻るように説得していたが、ついに聞き入れられることはなかった。

胸元に抱きついたラナーから香水の良い香りが立ち上る。クライムは鼻腔を大きく広げ、思いっきり堪能したい衝動に駆られた。こんな時、背中に腕を回し抱き寄せられたらどんなに幸せだろうか。

しかし、それは叶わぬ願い。生まれも定かで無い平民以下のクライムに対して、相手は王女だ。埋めようもない身分の差がある。

だがそれ以上に、自らの主人を、命の恩人であるラナーの信頼を裏切り、失望させることが怖かった。

ラナーはいずれどこかの貴族の元へ嫁ぐ身である。それを己に宿る醜い欲望で汚して良いはずがない。

そして、そのような感情を抱いていることを、純粋無垢な主人に知られる訳にはいかない。この胸の内の想いは、一生告げることを許されないのだ。

腕を回すことも突き放すことも出来ないクライムは、いつもの様に表情を強張らせながらも無表情を装い、目の前の輝きから目をそらした。

互いの体が僅かに触れ合う距離のまま、一体どれだけの時間が過ぎただろうか。とても長い時間にも感じられたし、一瞬だったような気もする。

――くちゅん。

小さな、可愛らしいくしゃみが再びクライムの時間を動かし始めた。視線をラナーの先に送れば部屋の窓は全開のままだ。まだ夏には遠いこの季節、日が沈めば気温はぐんと下がる。

「こ、この部屋は少し冷えますね。お部屋を移られますか？　それと

もストーブに火を焚べましょうか」
「いいえ、このままで構いませんよ。毛布にくるまるときは少し肌寒い方が気持ちが良いですし……クライムはそうは思いませんか？　あ、そうだわ！　子供の時のように一緒に毛布をかぶって温まるというのはどうでしょう？」
ラナーの指差す先は開け放たれたままの扉。その奥は寝室である。
窓から差し込む月明かりがスポットライトのように天蓋付きベッドを照らし出していた。
今朝方までそこにラナーが寝転んでいたこと証明するように、シーツに付いた皺が波のような影を作っている。
クライムは思わずベッドに横たわるラナーの姿を思い描き、そして共に寄り添う自分の姿を妄想してしまいそうになるが、なんとか邪念を頭の外に追いやった。
「お、お戯れを……」
「うふふっ。さて、明日はクライムにも街の人達と一緒に力仕事を頑張ってもらいます。旅の疲れを溜めないよう、今夜はゆっくり休んでください」
無邪気な笑顔にホッと息を吐く。どうやら逆の意味でも裏切る真似をしないで済んだようだ。
「お心遣い感謝します。ラナー様もお風邪を召されませんようにお気をつけて。おやすみなさい」
「ええ。おやすみなさい、クライム」
クライムは下半身の盛り上がった膨らみを悟られぬよう、足早に部屋を去っていった。

「……おまたせ致しました。そこにいらっしゃるのでしょ？　ペロロンチーノ様」
駆けていく足音が小さくなり、クライムが部屋から十分に遠ざかったのを確認したラナーは隣の部屋――寝室に向かって声を投げ掛けた。

その声に応じるように、ベッドの前の空間がゆらりと歪む。同時にベッドから立ち上がる異形がその姿を現した。
「えっと、お招きいただきありがとうございます……でいいのかな。というか、気が付いていたんですか？」
「はい。私からお誘いしていたのですから、当然ですわ」
微笑を湛えるラナーを正面から見据えたペロロンチーノは息を飲んだ。月光を浴びた肌は白く透き通り、髪は白金の輝きを有しているようだった。
しかし、どうだろうか。太陽のような輝かしい美貌と称される〝黄金〟というイメージとは違う、全く逆の印象をペロロンチーノは感じ取る。それはどこか影を持つ神秘的な美しさ。そして、自分よりも圧倒的に弱い存在であるはずの人間の娘からは考えられないような圧力を感じていた。
「お初にお目にかかり光栄です、ペロロンチーノ様。リ・エスティーゼ王国第三王女、ラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフと申します。ラキュースよりお話は伺いました。この度はカルネ村での一件のみならず、エ・ランテルでも多くの民の命を救って頂けたことを王国民を代表してお礼申し上げます。そして、本来ならば私から出向くべきところをこうして……二度もお手間を取らせた上、ご足労頂いた無礼をお許し下さい」
ペロロンチーノは自分の手に収まる2枚の便箋に目を落とす。1枚はカルネ村で蒼の薔薇を通じて渡された謝礼の小箱に含まれていたもの。その内容は大雑把な地図。正確には王都にある宮殿。それもラナーの部屋の位置を示した見取り図だった。
そしてもう1枚はラナーの部屋に置かれていたもの。正確には窓の外側にくくりつけてあったもので、エ・ランテルの貴賓館の一室を示した見取り図であった。
「まあ、蒼の薔薇の皆にも十分感謝してもらいましたし、俺からすれば大した距離でもないから良いんですけど。それより、お姫様が俺を呼んだ理由を聞かせてもらっても？　まさか彼氏とのイチャつきを見せつけたかったわけ……じゃないですよね？」

「ふふ。さあ、どうでしょう。あ、でもクライムとはまだそのような関係ではありませんの。残念ながら」
「ああ、そう……ですか」
恥じらいを一切感じさせない笑顔に、やられたと、ペロロンチーノは悟った。
覗きをしている背徳感。これから起こるだろう濡れ場への期待。高鳴る鼓動を抑え、鼻息を荒げつつも、そのまま事が済むまで観察してやろうと考えていた。
しかし、実際のところ覗きは始めからバレていたというのだ。いや、見ていたつもりが見せられていた。つまり、王女の羞恥プレイに付き合わされたということである。
それを理解し、ペロロンチーノのペロロンチーノは急速に萎えてしまった。そして敗北を味わうと共に、この女は只者ではないと確信する。
「さあ、ペロロンチーノ様。立ち話もなんですから、どうぞあちらのソファーへ……」

応接間に導かれたペロロンチーノがソファーで待っていると、ティーセットを手にしたラナーが戻ってくる。
慣れた手つきで二人分の紅茶をカップに注ぐと、そのひとつをペロロンチーノの前に差し出した。
「さて、ペロロンチーノ様をお呼び立てした理由でしたね。深い理由も無くて申し訳ないのですが……ただ、直接お会いしてお話をしたいと思っていましたの。でも、こうしてお会い出来て分かったことがありますわ」
「……分かったこと？」
「はい。そうですね、例えば……ペロロンチーノ様は欲求に素直な方かとお見受けいたしますが、いかがでしょう？」
恐らくは姿を隠したまま覗き紛いのことをしていた故の推論であろう。しかし、そもそも姿を隠していたのには理由がある。王女の姿

を知らなかったということもあるが、その他の事情を知らない者に気付かれない方が王女にとっても都合が良いと考えたからだ。決して王女の下着の色の確認や、残り香を堪能したかったというわけでは無い。

とは言え、覗きが趣味ではないのかとは問われれば、ペロロンチーノは否定する。覗きには覗きの緊張感と背徳感が有り、それもまた良い物だ。ただ、だからと言って常に第三者側が良いということはない。出来れば直接介入する側でいたいのが本音だ。

もし、王女が自分のことを覗き趣味な陰湿な奴だと認識しているなら訂正しといた方が良いだろう。

「勘違いしてもらいたくないですが……俺はムッツリではないですよ、オープンです。姫様と同じという訳です」

「?……ええ、そうですわね?」

「……なるほど。しかし、お姫様としての立場がそれを自由にさせてくれないという訳だ。抑圧された欲情を発散するための矛先……それで俺が呼ばれたんですね?」

「え? ちょっ、ちょっと待って下さい! 違います!」

全てを理解したつもりのペロロンチーノは身を乗り出し――それに合わせてラナーは体をのけ反らした。両手を前に突き出し、拒絶の意を示すラナーの態度は今までのものと比べるとだいぶ違って見えた。

「あれ? 間違ってました?」

「はい! 間違いです」

「そんな力強く否定されなくても……」

「そ、それはそれとして、エ・ランテルのお礼の話がまだでしたわね。えっと、ただ、ペロロンチーノ様にとって価値のあるものがどれだけ私達に支払えるかと考えると……」

あからさまに否定されたことに悲しみを覚えるペロロンチーノだったが、食い下がっても良くないと早々に諦め、素直にすり替えられた話題に耳を傾ける。

確かに人間社会に属さないペロロンチーノにとって、金銭が支払わ

れたところで使い道がない。功績を称える勲章を授与されたところで腹の足しにもならない。
金でも無い。名誉でも無い。ともなれば、残る選択肢は絞られてくるわけで……しかし、その言葉の先は意外にもラナーの口からもたらされた。
「女……というのはいかがですか？」
「ぶふぉ!?　え、……マジで？」
「うふふ。ペロロンチーノ様にとって価値あり、と見ました。いかがでしょう？」
その言葉の真意を確かめるように、ペロロンチーノはラナーの瞳を覗き込む。
澄んだブルーの瞳はどこまでも真っ直ぐで、嘘や冗談を言っているようには見えなかった。
「……ということは、やっぱり姫様、欲求不満なんですね？　それならそうと……」
「だ・か・ら、違いますって！　私にはクライムという大切な人がいますので！　もぅ……察してくださいよ……」
残念ながら王女自らがその身体でお礼の奉仕をするとか、そういった話では無いようだった。残念ながら。
「というと、娼婦とかを充てがってくれるということですか？　そういうのだとちょっとなー……俺は見ての通り異形だし、姫様の名にも傷が付くんじゃないんですか？」
「そうですね。やりようによってはそういったことも可能ではありますが……私が考えているのは王国中……いいえ、世界中の女のみならず、全ての生物の頂点に立って頂くということです」
「はい？　それって一体……」
「神として君臨して頂く……全てがペロロンチーノ様の物となります。勿論、私は協力者としてそこから除外して頂くつもりですけど」
予想を遥かに超えた回答に狼狽するペロロンチーノ。それに対してラナーは涼し気な表情を見せる。
「いやいやいや、神とか無理に――」

「決して無理な話ではないと思います。歴史を振り返れば、ペロロンチーノ様のような特異な存在が六大神、八欲王として崇められていた時代もございます。それに一部では既に信仰が始まっていますよ？」
「……へ？」
「本日、ペロロンチーノ様の活躍ぶりを民の目線から色々と伺って来ました。白い翼で天を駆ける姿を見た者は天使と。また、光る矢の雨を振らせてアンデッドを滅ぼす姿を見た者は神そのものだったと。闇が晴れるのと同時に現れ、エ・ランテルを救ってくれたのはその者であると、民衆の間で話はもちきりです」
「あー……。数が多かったんで、ちと派手にやり過ぎたか……」
　霊廟からフルチンの少年――ンフィーレアを助け出した後の話だ。見せ場のなかったペロロンチーノは少々張り切り、範囲攻撃で地上に残るアンデッドを次々に破壊して回った結果、多くの人の目に触れていた。
「このまま静かにカルネ村で暮らして頂いていても、いずれペロロンチーノ様の御威光の元に人々が集まってしまうことでしょう。混乱をきたす前に手を打っておくのも悪い話ではないと思います」
「むぅ……本当に俺が、その、なんだ……神になれると……？」
「はい。ペロロンチーノ様はそれだけの力をお持ちです。あと2、3度、神の御業をお示しいただければ、私が民を扇動してみせますわ」
　ペロロンチーノにはやはりラナーが嘘や妄言を言っているようには見えなかった。確かに、過去にプレイヤーが神のような存在になっていたようだし、民からの信頼も厚いラナーが協力してくれるのであれば夢物語というほどでもないだろう。しかし、腑に落ちないこともある。
「それが可能なのは分かったけど、仮にも一国の王の娘であるあんたがそんなこと……。王族の地位はダダ下がりになるんじゃないのか？」
「当然の疑問ですね。ペロロンチーノ様はご存知無いかもしれませんが、この国はもうじき滅びます。帝国に飲まれるのが可能性としては一番高いでしょうか。そうなると、王族である私の未来は明るくない

のです。例え王国が滅びなくても、愛するクライムと結ばれることは叶わない……。勿論、ペロロンチーノ様の利益を最大限に考えた提案ではありますが、実のところ私自身のためであることも否定しません。仮に計画が失敗してもペロロンチーノ様が被る損失は殆ど無いかと思われますが……引き受けて頂けませんか？」

潤ませた瞳による上目遣いの視線はペロロンチーノの庇護欲を簡単に掻き立てた。注意深く思考することを即座に放棄するほどに。

しかし、今後より連絡を取りやすくするために、王都に近いところへ住居を移さないかというラナーの提案は断った。その理由はもちろんエンリとネムのことを放って置けないからだ。

ペロロンチーノが部屋の窓から飛び去ったのを見送り、ラナーは窓に錠を掛ける。

「首を縦に振らせることは出来ましたが、まだ押しが弱いですね……やはり、神を降臨させるためには生贄が必要、ということでしょうか」

ラナーの独り言に答える者はどこにも居ない。ただ、窓に映る彼女の美貌には薄く笑みが浮かんでいた。

◇

スレイン法国の最奥。

数少ない限られた者達だけが入室を許される一室で、今宵も国の行く末を左右させる大事な会議が開かれていた。

「2週間前にエ・ランテルで起きた事件の全貌が掴めてきました。主犯格はズーラーノーン、十二高弟の一人。あり得ない規模のアンデッドが発生したことから、邪法〝死の螺旋〟が行われたものと推測されます。その為もあって、裏切り者の元漆黒聖典第九席次の足取りは未だ掴めておりませんが、持ち出された叡者の額冠が利用された可能性

も高いと思われます」
　法国の秘密を多く知る中枢人物の裏切りに加え、最秘宝の一つを強奪した大罪人の行方。本来であれば最も優先される案件であるはずだが、今は誰もその話に興味を示すものは居ない。円卓を囲む全員がその話の続きを促すように無言を貫いていた。
「そして、それを食い止めたのがアダマンタイト級冒険者〝蒼の薔薇〟ということになっていますが、多くの住民がアンデッドを駆逐していくバードマンと思しき異形の姿を目にしています。エ・ランテルの事件が起こる前日にこの神都に現れたバードマンとそのバードマンが同一人物という確証はありませんが……まぁ、ペロロンチーノと名乗ったバードマンでほぼ間違いないでしょうね」
「人類の守護者……やはり我らの神と同じ存在――ぷれいやーだったのではないですか？」
「何ということだ……。我々はそれに仇をなしてしまったということか……」
　バードマンによる神都襲撃事件の日から……いや、そのずっと以前より重々しさが絶えなかった室内であったが、この日はより一層と重苦しい空気が支配していた。
「敵対すべき相手ではないと判明した以上、和解の道を探るべきでは？」
「難しいでしょうな。少なくとも既にガゼフ・ストロノーフを通じて王国中枢部とパイプが出来ているはずだ。そうでなければ、あれほど迅速な対応は出来ますまい」
「王国側に付いてしまったのも問題だな。今は良好な関係を築けていたとしても、あの腐った貴族達のことだ……いずれ逆鱗に触れるのは目に見えている」
「仮に和解が出来たとしても、どのように扱うかが問題ですね。神に等しい力を持った存在が急に現れたともなれば、国民の信仰心が歪みかねないですよ」
「左様。我々の信仰は六大神様以外に有りえぬ」
　人類の存続、安定と繁栄のための議論は煮詰まる所まで来ていた。

そして既に挙がっていた案以上のものは出てこないと全員が確信した頃、今まで沈黙を守っていた最高神官長が口を開いた。
「では、神の力〝ケイ・セケ・コウク〟で対処するということでよろしいですかな？」
「……それが最も不確定要素も無く安全ですね。異議なし」
「予言された破滅の竜王も気になるところですが、ぷれいやーであればより効果的、という結論でしたね？　私も意義ありません」
十分に議論を重ねたこともあるが、全員の意志が同じ方向に定まっていたため、満場一致という結果で神器の使用が決定された。
「しかし、あの子――いや、彼女との約束はどうするつもりじゃ？」
「婚約者としてあのバードマンを神都に招き入れる、というアレか……」
漆黒聖典番外席次〝絶死絶命〟――彼女はあの日以降、再び神都に現れるかもしれないという隊長の言葉を信じ、その日を楽しみに待っていた。待ち焦がれていた。長い月日を生きる彼女にとって一週間という期間は本来であれば短く感じる時間だ。しかし、そのたった一週間で我慢の限界を来し、自分の立場を投げ出してペロロンチーノを探しに行こうとしてしまったのだ。
「まったく、無茶な約束をしてしまったものだ」
「し、仕方ないではないか！　あの場で押し止めなければ、今頃どうなっていたか……」
「まあまあ、おふた方。彼女には悪いが、その約束は神器による魅了で以って果たすとしましょう」
「彼女の意向に沿わない点もあるかも知れないが、仕方あるまい」
「ふむ。それでは決行に際しての話を詰めるとしますか……」
こうして密室による会議は一つ大きな決定を以って幕を下ろした。
異常に発達した知覚――聴覚を持つ者が外から内部の会話を聞いていたとも知らずに。

第十四話・漆黒聖典

「そんなことがあったんだ……」

ンフィーレア・バレアレはエ・ランテルのアンデッド大量発生事件で消費したポーションの材料調達のため、カルネ村まで来ていた。

目の前の少女――エンリ・エモットは当時の惨劇を思い出してしまったからだろうか。目の端に涙を浮かべながら、村が襲われた事や両親が他界してしまったことを友人に打ち明けていた。

「でもね……その時、助けに駆けつけてくれたペロロンチーノ様のお陰で私達は助かることが出来たの」

零れ落ちそうになっていた涙を拭って微笑むエンリの表情は非常に明るく優しいものだった。

命の恩人に対して感謝の気持ちを込めることは当然のことだ。しかし、ンフィーレアは彼女の見せた笑顔に、とてつもない不安を感じていた。それはまるで愛おしい人に向けるような、そんな表情だったからだ。

それからもエンリはペロロンチーノがいかに強く、優しく、素晴らしい人柄かをンフィーレアに熱く語って聞かせた。ンフィーレアはただそれを黙って聴くことしか出来なかった。

「そ、それは凄いね……でもそれって本当に人間が出来ることなの……？」

「あ、ごめんね。そうだよね、ンフィーはペロロンチーノ様のお姿を見たことがないものね。ペロロンチーノ様ご自身はバードマンという種族だって言っていたかな？　背中に四枚の翼を生やしてて、全身は羽毛で覆われているの。すっごく柔らかくてフカフカなんだよ。お顔には嘴があるし、手足にも鋭い鉤爪があるしで、最初はちょっと怖かったけどすぐ慣れちゃった。またお昼前ぐらいに戻って来られると思うから、そのときは紹介するね！　きっとンフィーもすぐ仲良くなれると思う！」

精神を喪失していた関係で事件解決からしばらく後に目覚めたンフィーレアであったが、白き翼で天を駆け、アンデッドを浄化してま

わった鳥人の話を聞かない日はなかった。一体どこから来てどこへ去っていったのか、噂だけがひとり歩きするばかりで実際のところは何も分かってはいない。
　ンフィーレアはエンリの命の恩人が人間で無いことに少し安堵しつつ、同時にそんな自分を軽蔑する。
　そして、多くは知ら無さそうなエンリにエ・ランテルで起きたこと語って聞かせた。ちなみに自分の身に起こった出来事については触れないでおく。
「ええ!?　エ・ランテルでアンデッドが発生したから、蒼の薔薇の皆さんと退治してきたって言ってたけど……」
「やっぱり。じゃあ噂の鳥人ていうのは……」
　噂の鳥人の正体はエンリを助け、カルネ村の救世主になったペロロンチーノその人で間違いないようだ。驚きの表情でエンリと顔を見合わせていると、唐突に部屋をノックする音が聞こえ――返事をする間も無く扉は開け放たれた。
「失礼します。エンリ・エモットというのは貴方ですね？」
「えっ？　そうですけど……」
　入室してきたのはンフィーレアの知らない女が二人。エンリの顔を窺ってみるが、首を横に振り困惑している。
「悪りいけど、あたしらと来てもらうよ」
　女は有無を言わせない口調でそう告げるとエンリの腕を掴み、無理矢理引き寄せようとする。エンリからは短い悲鳴が漏れた。
「ま、待てっ！　エンリから手を離せ!!　き、君たちは誰なんだ」
「ん？　……こいつは何？」
「事前に見てもらった時には居なかったですが……まぁ、伝言役には丁度いいかもしれませんね」
「そうね。じゃあ、無事に返して欲しければ……ここより北東へ５ｋｍ地点。大樹の側までお越しくださいと、伝えてくれるかい？　ぼうや」
「い、一体何を言って――」
　ンフィーレアが勇気を振り絞り、エンリとの間に割って入ろうとし

たところでもう一人の女が立ち塞がる。そして片手をンフィーレアの頭にかざしたかと思うと、次の瞬間には意識を失い崩れ落ちてしまった。
「ンフィー!?　――うっ」
ンフィーレアに駆け寄ろうとしたエンリだったが、掴まれた腕の力は強く、びくともしない。そして同じようにエンリの頭にも手がかざされた。
「さて、これで姉妹の回収は完了ですね。皆と合流しましょうか」
「おっけー」

「――おい。おい、起きろ」
エモット姉妹の家の中で意識を失い、床に倒れる不審な少年を力づくで起こし揺さぶる。
その容姿にはしっかりと見覚えがあった。エ・ランテルの霊廟から救い出した、推定甲種（恋愛）一級フラグ建築士のンフィーレア少年だ。
「う……痛った……あれ？　う、うわあああああっ!!」
こちらの姿を見て驚いている。目を覚まして眼前にバードマンの顔があれば、当然の反応だろう。しかし、今はそんなことに配慮してやる余裕なんてさらさら無い。
「なんでお前がここに居る？　というかエンリ達……ここの住人はどこだ？」
「あ、あなたは、もしやペロロンチーノさ……まですか？」
室内に荒らされた様子はない。
ペロロンチーノのハーレム計画に影響を与えないためにもガガーランに預けていた少年が、よりにもよってこんなところ居ることの不快感が何より強い。
「聞いてんのはこっちだ。一体何があった？」
「そ、そうだ！　エンリが連れ去られてっ……どうか、お助けください！」

全くふざけた話だった。
直接、少年に落ち度は無い。単に偶然居合わせただけであることも理解できた。しかし、ペロロンチーノより前から交流があったこと、エンリへの好意が透けて見えてくることが不愉快極まりない。
「……彼女達を助けに行く」
「あ、有難うございます！」
「勘違いするなよ？　お前の願いを聞くわけじゃない。さっさと村から去れ！」
ペロロンチーノは少年を威圧し、慌ただしく空へ飛び上がった。

トブの大森林の切れ目、小高い木々が点々とするだけの草原にぽつんと樹齢１００年は超えていそうな大樹が一本生えていた。
青く澄んだ初夏の空の下、大樹の作り出す木漏れ日は心地の良い風を届けている。さながらその木陰で寝ころび、昼寝を嗜むには絶好な日和と言えよう。
そんなのどかな風景が広がる中で、場違いな雰囲気を纏った集団がいた。
集団の所属している部隊の名は漆黒聖典。スレイン法国神官長直轄特殊工作部隊群〝六色聖典〟の内、少数精鋭の戦闘能力を有する最強の部隊である。隊員の一人ひとりが英雄級の力を持っているのに加え、彼らの身につけている武具もまた格別だ。
それは遥か昔、人類を守護した神々の遺した秘宝の数々。秘められた特殊能力、込められた魔法は人の手で作られた物と比べて一線を画する物ばかりであることは勿論であったが、そのデザインや配色もまた奇抜なものが多かった。
木の幹に体を預けスヤスヤと寝息を立てる姉妹を横目に、腕に鎖を巻いた男が口火を切る。
「まったく、幸せそうな顔して寝てやがる。自分らの状況ってもんが分かってんのかねえ」
「私の子守唄で安眠出来ない子なんていませんよ。きっといい夢見て

いるでしょうね」
「そうかい。それにしても、本当におびき出せるんかねえ。俺にはこんなガキ二人、人質の価値があるとは思えないんだが」
「念入りな下調べと、信用できる〝タレコミ〟がありますから。私達は余計なことを考えず、任務を遂行するのみですよ」
「信用できる、ね……。王国の貴族が腐ってるお陰だなぁ」
漆黒聖典の隊員達は人質の姉妹と護衛対象の老婆を囲むようにして待機していた。
「ところで、隊長は今回の任務の成功率はどのぐらいに見てるの？」
「どういう意味だ？」
「いやさ、神都を荒らしたバードマンを人質でおびき出し、効果範囲内に入ったらカイレ様のケイセケコウクで魅了して完了ってわけじゃん。こんな大勢で来る必要なんてあったのかなって思ってさ」
「……あまり相手を甘く見るな。もちろん、必ず成功させる。だが、最悪の場合半数が犠牲になってもおかしくない」
「え？　そんなに？」
「ククク。なんだ、ビビっちまってるのか？　坊や」
「あ〟ぁ!?　番外様じゃないけど、ボクも一度手合わせしてみたかったからね。チャンスがあるならそれでいいさ」
「あー……お前ぇらはあの戦い見てねえもんな」
「――静かに。……対象が戻って来たわ。恐らく」
宙に浮かんだ巨大な水晶玉を覗き込んでいた女性の発言により、ぴたりと誰もが口を閉じ、瞬時に緊張感が戻る。
〝占星千里〟は探知能力に長けた能力を有し、魔法でカルネ村の様子――件のバードマンが戻ってくるのを監視していた。それでも巫女姫の〈次元の目〉と同様、その姿をハッキリ捉えられた訳ではない。故に語尾に恐らくと付いたのだ。
暫くの沈黙の後、再び占星千里が口を開く。
「こちらに来ます。皆さん、準備を……」
油断なく全員が臨戦態勢に入る。
「武器は下ろしておけ。なるべく警戒はさせないように」

ペロロンチーノは迷うことなく指定された大樹が見える位置までたどり着くと、木の根元にいる武装した集団を注意深く観察する。
ペロロンチーノがこの世界で見てきた武力集団といえば、国に仕える兵士や騎士、もしくは野盗や傭兵団、冒険者達だ。
一見したところ装備の統一性の無さから後者のようにも思えたが、すぐにそんな生易しい物では無いことがわかった。それは彼らの身につけている装備の奇怪さが物語っている。
小洒落た装飾の多いカラフルな衣装、浮遊するオーブ、観賞用にしか見えない独特な形状の大剣、意志があるかのように動く帽子、女子校生風の制服姿……街や村の人間からすれば、常識外れとも思える見た目をしている。
つまり、これらはユグドラシルの装備。そして、これらを所持できる集団ともなれば自ずと選択肢は限られてくる。自分と同じプレイヤー集団という線も勿論あるが、この前イビルアイから話に聞いていたスレイン法国の秘密部隊、漆黒聖典の可能性が高いように思えた。
集団の奥には木にもたれかかり、穏やかな顔で眠っている姉妹の姿も見える。
その様子を確認して一先ず安堵したペロロンチーノだったが、人質の姉妹に危害が加えられることなく、敵全員を射殺せる可能性はゼロに近いのは確実だ。
相手の誘い通り、交渉のテーブルに着く必要があるようだった。
ペロロンチーノは十分な距離を保ったままゆっくりと降下していく。
その最中、今まで巨大な盾の後ろにいた女の格好が目に入り言葉を失った。
恐ろしく上等な生地で仕立てられたであろう詰襟になった白銀のワンピース。その前面には金糸で五本指の昇り龍の姿が描かれている。そして最もペロロンチーノの目を引いたのが左右に深く入ったスリット……そこから覗く生足だ。そう、この服はいわゆるチャイナ

ドレス。先程の制服もそうだが、メイド服やナースに並んでコスプレ人気の高い官能的な衣装と言えよう。
ただし、それを着ているのは干物のような脚をした老婆だった。
(うぇっ……まさかこんなところで精神的ブラクラ攻撃を受けるとは……あれでさらに胸元まで開いてたらやばかった)
どうして周りの誰も止めなかったのか、と抗議したくなる衝動を抑え、緊張を保つ。
もし、予想の漆黒聖典であれば、例のあの娘……スレイン法国の大都市で出会った白黒の髪をした美少女もいるはずである。いたいけな姉妹を誘拐したことは断じて許せないが、あの娘とは仲直り……というか誤解を解き、むしろお近付きになりたいとペロロンチーノ考えていた。
しかし、視線の通る範囲にその姿はない。予想が外れていたのか、それともどこかに隠れ潜んでいるのだろうか。
そこまでペロロンチーノが思案したとき、まだ少年とも思えるような若く中性的な顔立ちの男が数歩前へ歩み寄り、声を張り上げた。
「お初にお目に掛かります、ペロロンチーノ殿!! まずはこのような手荒な真似をした無礼を謝罪いたします。私はスレイン法国の使いとして参りま――」
言葉は一度そこで遮られた。疾風の如き勢いで両者の間に飛び込んで来た闖入者がいたからだ。
「な、何故貴方がここに……」
「――っと。なぜ? なぜってそりゃあ、ペロロンチーノ様に会いに来たのよ。先に約束を……私を騙そうとしたのはジジイ共でしょ? とやかく言われる筋合いはないわね」
白と黒の半々に別れた髪色をした少女は微笑みながら、男に言葉を返す。男はまだ何か言いたそうな素振りを見せていたが、それを少女は無視してペロロンチーノへと向き直った。
「御機嫌よう、愛おしい御方。またお会いすることが出来て嬉しいです。……私、あの日ことを思い出す度に胸が熱くなって……あれからずっとずーっと、お慕い申しておりました」

少女からの突然の告白にペロロンチーノは衝撃を受ける。まだ対面イベントしかこなしていないはずなのに、どこで好感度を貯め、フラグを立てたのか全く心当たりがないのだから当然だ。
しかし頬を赤く染め、オッドな瞳を涙で潤ませた恍惚とした表情は、デレを通り越してヤンデレのものと評しても過言ではないかと思われるほどで、先程のセリフが口先だけの演技だとはとても考えられなかった。
「マジで……？　俺も君に会いたいと思ってたところなんだ」
「ほんと!?　ほんとに??　うふっ。えへへへ」
戦鎌を内股に挟み込み、身を捩らせながら照れているかのようなその姿はペロロンチーノの内側を掻き立てた。
初対面のときとあまりに違う態度を不審に思わないわけではない。しかし、男ならば時として相手の全てを受け入れる度量を持つべきである……と、都合のいい持論を展開させる。
そしてペロロンチーノは罠である可能性よりも、目の前の少女とイチャラブ出来る可能性に賭けた。
「良かった。君とは仲良くなれそうだ。えっと、後ろの連中は仲間なんだよね？　とりあえず人質を返すように言ってくれると助かるんだけど……」
「人質？　……それってあそこの人間の子供のこと？」
困惑や驚愕、焦りの色を浮かべる集団の奥を指差し少女は問う。
「そうだよ。突然攫われてしまってね、俺は彼女たちを迎えに来たんだ」
「ふーん。……ねぇ、ペロロンチーノ様。私とあの子達、どっちが好き？」
「え？　えっと……だな……」
もし、これが選択肢をじっくりと選べる余裕のあるゲームであったならば、彼女の特性を考慮した上で最善の選択を出来ていたかもしれない。
しかし、不意に投げかけられた質問に即座に返答出来るほど、ペロロンチーノは現実での経験値が足りていなかった。

「……あっそう、あんな弱っちいのがいいんだ……」
可愛らしかった少女の声から急激に熱が失われた。
「あーあ。なんだか冷めちゃったなー……。私ね、強い人にしか興味ないの。強ければ全てを奪う権利があるし、弱ければ奪われるだけ。そう思わない？　私のお母さんはさ、弱かったから……全部、奪われちゃったの。だからね、私が孕む子は誰にも負けない強い子になって欲しいのよ。……ペロロンチーノ様は合格点かなって、そう思ってたけど、そんな甘っちょろいこと言うんだね。なんだか見込み違いな気がしてきちゃったわ。……ねえ、もう一度戦いましょう？」
「ちょ、ちょっと待てって！　俺は君と戦う気はないんだ！」
「待ちたくない。でも、もう一度。本気の私に勝てたなら、何でも言うことときいてあげる。だからね、どうか私を負かせて見せて？」
先程までの恋する乙女は跡形もなく消え去り、代わりに戦士の気迫を滲ませる少女の姿があった。
彼女との間合いは僅か。もはや言葉は通じないと理解したペロロンチーノは直ぐさま後方へ飛び退き距離をとった。
「ちっ……ヤンデレっぽいと思った時点で即答出来るようにしとくべきだった……いや、ヤンデレに絡まれた時点でその先のルートは決まってるようなもんか……」
ぼやきながらもペロロンチーノは状況を確認する。
後ろの連中にとっても予想外の展開だったらしく、明らかな動揺が見られる。先程の男が駆け寄り説得を試みているが、聞き入れられることも無いようで、彼女は仲間の参戦を許さずに一対一で挑んでくる様子だ。
人質を取られているという絶対的な不利な状況。もしそのまま交渉のテーブルに着いていたら、ペロロンチーノは相手の要求をすべて飲む他無かっただろう。
しかし、そこへ仲間割れという奇跡が起こった。少女が素直にこちら側へ付いてくれなかったことは残念だったが、まだチャンスは残っている。
この勝負に勝ちさえすれば、あちら側にとって重要なカードをこち

ら側へ引っ張ってくることが出来る。そうすれば立場は大きく変化する。
（バッドエンドなんて認めねえさ。そんなクソなフラグはへし折ってやる。この戦いに勝ってエンリとネムも奪還……やるしかねえか）
元アインズ・ウール・ゴウン所属のペロロンチーノはＰＶＰに長けていた。勿論、狙撃手としてヒットアンドアウェイが主体であり、顔を合わせてからのｌｏｎｌは得意とするところではない。しかし、一度手合わせした相手であれば善処出来るだけの対応力はあった。
その経験が彼に告げていた。勝機はある、と。
前回の戦闘で得た情報を分析すると、彼女の戦闘スタイルは弐式炎雷のように機動力を重点に置いた職業構成（ビルド）のようだ。加えて空中戦もこなす応用力の高さは、正直脅威と言えよう。しかし、圧倒的に足りないものがあった。それは火力だ。
腕で受けた初撃や、最後に放った溜めの一撃はカンストプレイヤー基準で言えばあまりにも軽かった。総合すると俊敏さに全振りしたレベル７０相当の軽戦士が良いところだろう。
（半端にやって無事で勝てる相手じゃないしな。そっちがその気ならこっちも本気でやらしてもらおう。ラキュースが蘇生魔法を使えてよかったぜ……）
見たところ装備も大幅に変わり、強化されているようにみえる。これが彼女の本気なのであろう。であれば以前より苦戦するのは想像に容易い。
しかし、それは今回も殺さないようにと手心を加えたときの場合だ。殺してしまっても復活させてやれるのなら話は違ってくる。
ペロロンチーノは躊躇いを捨て、必殺の覚悟を胸に秘めた。

「……で、俺達はどうすりゃいいんだ？」
睨み合う両者から離れた大樹の下。取り残された漆黒聖典のメンバーは次の行動を決めあぐねていた。
漆黒聖典隊長は番外席次に対して最後まで説得を試みていたが、そ

れもどうやら失敗に終わったようだった。
「あ、隊長戻ってきますね。どうやらダメっぽいです」
踵を返して戻ってくる隊長の様子から、番外席次が敵側に付くなどという最悪の事態には至ってはいないようだが、作戦は変更せざるを得ないだろう。
「はァ……外見と一緒で中身もまるで成長していないのは困ったものだ……」
「けどいいのかよ、隊長。好き勝手にさせちまって」
「良いはずがあるものか。……しかし、彼女の矛先がこちらに向かうのは避けなくてはならない」
「でもその結果、番外様がやられちゃったらどうするの？　仮にも一度は負けてるんだし」
隊員の誰しも同じ考えだったのだろう。全ての視線が隊長の無表情の横顔に集まる。
「確認したが、五柱の神の装備全てを身に着けている。それに彼女は本気を出すと言った」
「それって、まさか……」
隊長が見つめる先、少女は懐から歪な形状の短剣を取り出した。それは無数の棘が刃先とは逆向きに生えており、一度突き刺したら二度と引き抜くことが出来ないような形状をしている。
彼女はそれを逆手に持ち――自らの胸に突き刺した。
刃は心臓を貫き、肺に達したのであろう。口からは大量の鮮血が溢れ出し、零れ落ちる。
「お、おい！　番外様はどうしちまったんだ!?」
傍から見れば、自分の意志で自害したようにしか見えなかった。
しかし、彼女自身は地に膝をつくこともなく平然としている。
そして同時に、ソレは彼女の足元から起こった。
大地の恵みと太陽の光を浴びて育った青く若い草花達。それらがみるみる内に萎れだし、枯れ細り、最後には灰となって崩れ散っていく。
「あれが彼女の生まれながらの異能――〝絶死絶命〟」

淡く発光する羽根が宙を舞う。ペロロンチーノの翼から放たれる羽根はスキルによって特殊効果が付与されていた。その効果は移動阻害。対象に触れることで付着し、相手の機動力を奪う。

もし彼に接近しようものなら、体中に羽根が纏わりついてしまうことだろう。

――しかし。

突風が吹き荒れた。あまりの風圧に漂っていた羽根はおろか、ペロロンチーノ自身の体も浮き上がり、後方へと流される。

発生源はもちろん目の前の少女。漆黒聖典番外席次〝絶死絶命〟。

たった一振り。すくい上げるように振り上げた戦鎌から発生した旋風によって。

（な!? まじかよ……さっきのは狂戦士化（バーサク）……いや、呪術か契約代償の類か？ 何にしても力が段違い過ぎる。ありゃ一発も貰う余裕すら無さそうだ……だけど、自らＨＰを削ってくれたのは好都合!!）

一瞬の動揺を少女は見逃さなかった。その隙を付け込むように驚異的な速さでペロロンチーノへ肉薄する。

強烈な衝撃音が空気を震わした。砕けたった光の盾の中に鮮血が混じる。

だが、ペロロンチーノの姿はない。代わりに現れたのは空中に静止したままの１０の矢。

「《弓士の証明（アーチャー・プルーフ）》!!」

遠距離攻撃を主体とする場合、照準捕捉（ターゲティング）は必須スキルだ。命中精度向上、複数対象化、自動追尾、貫通力向上と様々あるが、いずれも射撃を行う事前に対象を指定する必要がある。しかし、弓士の最上位スキル《弓士の証明》であればタイミングを問わない。

つまり、時間凍結や非顕在化スキルを組み合わせて射出した攻撃を複数用意し、保留した後に同時に発動させることで瞬間火力を飛躍的に高めることが可能となる。

片足の膝から下を失いながらも上空へ逃れたペロロンチーノは予め準備していた攻撃をけしかける。神都で見せた乱れ牡丹――あれは分散化する矢を中心に組み込んで派手さを追求したものであったが、今回は別だ。
「悪いがこれで終わりだ！　しばらく大人しく寝ててくれよなっ!!」
至近距離で放たれた強撃の矢が少女を襲う。
一本目は身を翻して躱し、二本目、三本目は鎌を振るって叩き落としてみせた。しかし、四本目は脚を打ち抜き、五本目を腕で受けた後は、残りの矢の全てが少女の体を貫いていった。
決着。
と、思われた。
ところが少女は倒れない。代わりに体勢を崩したのペロロンチーノ。
「なん……だ、これ……」
「うふふっ。さぁ、まだ始まったばかりよ。どっちが先に命を落とすか……楽しみましょ？」

華麗な足運びと優雅な鎌捌き。軌跡を残して放たれる見えない刃は徐々にペロロンチーノを追い詰めていった。
人質がいるため逃げることも出来ず、劣勢だった状況は遂に一方的な段階に至った。
「あはははっ！　楽しい！　こんなに楽しかったのは生まれて初めて!!」
「ゲホッ。クソ……ただのエナジードレインじゃねえな。その胸に刺したのにカラクリがあんのか……」
「これ？　これはキッカケに過ぎないわ。正解は私の生まれながらの異能よ。凄いでしょ？」
少女は胸に刺さったままの短剣を撫でながらゆっくりと地に手を着けたペロロンチーノへ近づいていく。
「まったく。こんな楽しみを私から奪おうとしてたなんて許せない

わ。洗脳された後じゃ遊べなかったしね」
「洗脳……？」
「うーん、そうね。冥土の土産に教えてあげると、人質を返すとかでうっかり近づいてたらカイレ様の神器〝ケイセケコウク〟で洗脳されてたはずよ。あれは〝わーるどあいてむ〟って言って、誰も抗えないから」
「……んだよ。最初から詰んでたじゃねえか」
「んふふっ。その通り。ほんと、許せないわよね。だから私がチャンスを与えてあげたのよ？　感謝してよね」
「ああ。攻略しがいのある良いチャンスだったけど、俺には難易度がちと高かったみたいだな……」
「惜しかったわよ。私がこの力を使う日は来ないかもって思っていたから。……だからこそ、惜しいわね。もしかしたら貴方を殺したことを後悔するかもしれない。でもやっぱ、私より強くなきゃ、そこは譲れないから」
少女は戦鎌を振り上げる。
もはやペロロンチーノに動く気力は残されていない。仮に一撃を避けたとしても、続けざまの連撃からは逃れられないだろう。
「……なあ。あの姉妹だけでも見逃してやってくれねえか？」
「それは無理ね」
「……そうか。ごめんな、エンリ……ネム……守ってやれなくて」
ペロロンチーノは最後の瞬間（とき）を瞼を閉じて待つ。
（これからが良いところだったにな。これで終わりか……）
この世界には蘇生魔法やアンデッドという存在があるため、ペロロンチーノの知っている死とは異なり、まだ復活できる可能性は残されてはいる。ただし、それもアテがあればの話だ。ラキュース達では死体の回収は不可能だろう。恐らくはこのまま死を受け入れることとなる。
もしかしたら今までの体験は全て夢で、死んで次に目を覚ませば元の世界に戻っているのかもしれない。しかし、現実（リアル）では絶対に味わえない新鮮で刺激的で楽しかったここでの生活を知ってしまった今と

なっては、このまま死んだほうがマシと思えるほどどうでもいいことのように思える。
そして遂にその瞬間が来たようだ。
「じゃあ、バイバイ、ペロロンチーノ様。私の初恋の人……」
戦鎌が振り下ろされると、血飛沫と共にペロロンチーノの頭は宙を舞った。

第十五話：桃色の戦乙女【最終話】

「――それなら、やはり私が一点突破で注意も引くしかないじゃないですか」
「だからその考えが甘いって言ってるんですよ、たっちさん。自分の能力を過信するのもいい加減にしてください」
　部屋の中央には黒曜石の巨大な円卓があった。それを囲むように配置された椅子には数人の異形が腰を掛けている。
「じゃあ、どうすれば良かったと言うんですかウルベルトさん。あの時、囲まれた時点で相手の準備は万全でしたよ。まさか白旗を上げて諦めるとか言い出しませんよね」
　この会話は朧げに覚えている。ユグドラシル全盛期、ギルド順位９位にまで上り詰めたアインズ・ウール・ゴウンは異形種ギルドということも相まってよくＰＫの標的にされていた。
　そのため狩り場選びは慎重を期していたが、敵対ギルドの綿密に練られたであろう計画に嵌ってしまい、全滅してしまった。それで今はその反省会といったところだ。
「んなこと言ってねえだろうが。確かにワールドチャンピオンのスキルは凄いかも知れないが、個人の力じゃどうにもならない状況があるって言ってんだ。そういう身勝手な行動されたらこっちも立て直せるわけ無いだろ」
　少しでも善戦するならウルベルトの言うとおり大勢を立て直すべく防戦に徹するべきだった。しかし、多くのリソースを消費してもジリ貧になるばかりで、奇跡でも起きない限りひっくり返るような戦況でもなかったのは確かだ。
　恐らくそれは皆も思ったことだ。そんな時、タンク役も担っていたたっち・みーは単騎で敵の一翼に突撃をかましたのだ。
　結果から言えば、それを皮切りに戦線は崩壊、敗北した。
　どっちも正しいし、どっちも悪くない。ただ、たっち・みーの行動に噛み付くウルベルト。いつものよくある光景ではあるが、この日は全滅したこともあり室内の空気はより一層悪かった。

「ま、まぁ、今回は仕方なかったですよ。私の狩りに付き合って貰ったわけで……むしろこの場合悪いのは今日、皆を誘った私です」
モモンガもどちらかの肩を持つことは出来ず、しまいには自分のせいだと言いだす始末。誰の責任でも無いのに。
いたたまれない空気だ。
なぜだろうか、こんな時には決まって冗談を言いたくなってしまう自分がいる……
「それより皆見てました？　相手にいた女戦士の格好めっちゃ際どくてエロかったなぁ！　いやーアレで規制されないんだから、そういうとこは神運営だなって……」
「――いや、何を言い出すんですか。モモンガさんは何一つ悪くないです」
「そうですよ。それを言い出したら狩り場を選択した俺が悪い」
一人落ち込んでしまったモモンガをフォローするべく険悪な二人の意見も一致する。ひとまずは部屋の空気も弛緩した。
（……まぁいいか。でもなんだろうな、この何かが足りない感じ）
別にスルーされたことはいちいち気にならない。
でも、いつもであれば鋭い一言が飛んできて切り捨てられるような、そんな気がしたのだ。
（そうか、今日は姉貴いないのか……姉貴て誰だ……？）
久しく発していない懐かしい言葉の響きだ。
だけどハッキリ思い出すことは出来ない。
それどころか思考に虫食いができるような感覚が強くなっていき、数秒前の会話の内容も分からなくなっていく。
頭が、体が、心が、ボロボロと崩れ去っていくようだった。
手足が存在しているという感覚すら既に無く、視界にはなにも映らない。
そしてペロロンチーノの何もかもが消え去ろうとしていた。
――うと……
いや、僅かに何かが聞こえる。
――おと……と……

どこか聞き覚えのある声だ。自分を呼んでいるのだろうか。
――目……覚ま……せ！　弟……!!
確かに誰かが呼んでいる。今にも泣き出しそうな絶叫が頭に響く。
――この愚弟っ!!

◇

霞がかった視界が徐々に色を取り戻していく。ふるふると震える半透明な粘体は見覚えのあるピンク色をしていた。
「あ、あね……き……？」
「……ッ！　心配させやがって糞弟！」
全身の筋肉が弛緩し、うまく体を動かすこと出来ない。
状況からして蘇生に成功し、生命力が極端に低下しているようだ。
そして蘇生を行った張本人は元アインズ・ウール・ゴウンのメンバー、実の姉にして不沈の双盾、ぶくぶく茶釜であった。
粘体の中に浮かんでいた短杖が消えると、代わりに豪華な装飾が施された薬瓶が現れる。
栓が抜かれ、ペロロンチーノの頭上からねっとりとした液体が注がれていく。
するとペロロンチーノの体は淡く発光し、見る見るうちに生傷が癒えていった。
「うわっ。ぶく姉、きたねぇ……」
「あ〝？　てめえ、助けられた第一声がそれか？　もういっぺん死ぬか？」
先程とは打って変わり、ドスの利いた低い声がぶくぶく茶釜から発せられた。
「ははっ……ごめんて、姉貴。助かったよ」
そうだ、このやり取り。
小さい頃から頭の上がらない姉だったけど、気兼ねなく軽口を叩けるのは信頼があるからだ。

大人になっても同じゲームで同じギルドに入って一緒に遊ぶ程なのだから、よっぽど姉弟仲が良いに決まっている。
「はぁ。何が全く、どうなってんだか……」
「てか、どうして姉貴がここに？」
「ある冒険者から聞いてってところだけど、話はあと。もうすぐ障壁が壊れるよ」
ぶくぶく茶釜を中心に張られたドーム状の障壁は今にも割れそうなほどヒビが走っている。
一時的にかなり強固な防壁となる特殊技能だが、光と音は内外で遮断されるため外の状況はわからない。
だが、状況からして殺された直後の切迫した局面に変わりないのは間違いないようだ。
「姉貴、白黒の少女がやべえ。あと一番後ろのチャイナの婆さん、あれは洗脳系のワールドアイテムらしい」
「は？　こちとら装備も不十分なのに、えらいもんにケンカ売ったね、この馬鹿弟は。もう動けるよな？」
「ああ。それと、人質を助けたい！『トレイン』頼む！」
「まったく。沢山借りが増えたこと、後悔するなよ？」
次の瞬間、ガラスが割れるかの如く障壁は飛散し、その破片は空気の中に溶けていった。
同時に十字の戦鎌を持った白黒少女が肉薄する。
立ちふさがったのは両手――に当たるであろう位置に盾を構えたぶくぶく茶釜。
相当な強撃だったはずだが、一切ノックバックはしない。
その隙きにペロロンチーノは上空へ飛び上がり距離を取る。
「ちッ！」
「おっと、行かせないぞ。カワイコちゃん！」
少女の舌打ちよりも幼い声がピンクの粘体から発せられ、その言葉通り白黒少女は戦鎌に引っ張られるような急停止を強いられた。
見れば左手の盾から伸びた鎖が戦鎌に絡みついている。
ＰｖＰ用特殊技能、鎖鉤縄だ。

しかし、攻撃を仕掛けてくる相手は白黒少女だけではない。
ぶくぶく茶釜を無視し、ペロロンチーノに迫るのは長い黒髪の少年。
突進の勢いを乗せた跳躍、引き絞った槍による強烈な刺突が放たれた。
間一髪。
自由に飛び回れる翼を持つことで可能とした空中での回避で、ペロロンチーノは直撃を免れたが、同時に発生した衝撃波がダメージを与える。
「くっ。流石にお行儀よく見ていてくれないか……！」
人質であるエモット姉妹の側にはチャイナ服の老婆を含む四名の人員を残し、後はこちらを狙って距離を詰めてきていた。
流石にこちらが二人に増えた以上、今まで通りの傍観者では居てくれないようだ。
とは言え、人質の周りから敵が減ったのは好都合でもある。
この数であれば姉妹に危害が及ぶ時間を与えずに倒し切る自信がある。
次にペロロンチーノを襲ったのはレイピアを手にした小柄な男。
高度をとられることを牽制したのか、ペロロンチーノの更に上空から斬りかかってくる。
投石機のように地上から放り投げたのは蛮人のような巨体な男だった。
これも空の利があるのはペロロンチーノの方であり、落下の軌道上から逃れれば避けるのは容易い。
しかし、完全に間合いから外れたと思われたペロロンチーノの横腹に痛みが走った。
受けたダメージ自体は小さいが、不可解な攻撃に困惑は隠せない。
だが、もう少し、攻撃がギリギリ届く位置で敵を引きつけ続けなければならない。
せっかく人質から離れてくれた敵がこんなにもいるのだ。
それらを一点に足止めさせるためにも、残りの数人をぶくぶく茶釜

の有効範囲内に入れる必要ある。
チャンスは一度切り。
失敗したら警戒され二度目はないだろう。
ペロロンチーノは自身が弱って反撃も碌に出来ず、ただ逃げ惑うだけのバードマンを演出する。
蘇生の知識がある者から見れば、むしろそれだけ動ける方が驚きで、それ以上の何かを隠しているなどと思わない。
思惑通り、戦いに参加してきた全員が漏れなく範囲内に収まった。
遂に、その瞬間がやってくる。
ペロロンチーノは一気に飛翔し、有効範囲内から離脱する。
「姉貴っ！　今だ！」
白黒少女とじゃれ合うように戦鎌を盾で受けてたピンクの粘体がブルっと震えた。
そして――
「みんな――っ！　ちゅーもくっ!!　おっにさん、こっちら！　てのなるほーえ！」
盾と盾を打ち鳴らしながら発せられたのは、ロリボイス全開の大声だ。
勿論、周囲の耳目を集めるためだけの大声ではない。
チャレンジシャウト――範囲系ヘイト獲得スキルであり、ユグドラシルでは一度に複数のモンスターを誘導できるタンク職の奥義。
ただ、個々のヘイト上昇値は控えめで、敵を集めすぎるとスキルの使用者本人が袋叩きにあって沈むことから使い勝手は難しい。
さらに付け加えると、このように自身の声で台詞を述べる必要は全く以てない。
しかし、ぶくぶく茶釜曰くこの方が効果がある気がするということで、日常的にロリボイスを付与していた。
そのせいで、範囲外から見知らぬ男性プレイヤーがひょっこり顔を出してきた事があった思い出も、今となっては懐かしい。
「あーんど、おーばーばいんどりーしゅっ！」
さらに、その時点で自身にヘイトが向いている相手を一箇所に集め

る特殊技能が発動する。
捕縛に対して対策がなされていた数名を除き、全員がぶくぶく茶釜の前に集められた。
本来であれば、束ねられた敵を集中砲火で倒すところだが、優先すべきは人質の奪還。
自由になったペロロンチーノは弓を引く。
一度死んだことで弓師職のレベルがダウンしている分、火力は落ちてしまっているはずだ。
しかし、ぶくぶく茶釜が作り出してくれたこのチャンス、絶対に失敗することは出来ない。
持てる全ての特殊技能、集中力を総動員し、同時に四本の矢を弓に番えて限界まで引き絞る。
人質前の四人もペロロンチーノの殺気に気が付いた様子であったが、奇怪なピンクの粘体に目が奪われていて反応が遅れている。
「――ッシ！」
全射命中。
盾を持った男がチャイナ服を庇うように前に立ち塞がったが、二本の矢はどちらも貫通し、二人は大きな風穴を空けて地に伏した。
他の二人も同様に息絶えたようだ。
その間もぶくぶく茶釜は敵十人を相手に防御を固め、背後を取られないように華麗なステップで立ち回っている。
フレンドリーファイアが有効であるため一箇所に纏められた敵が自由に攻撃出来るはずもなく、その攻防には余裕すら覗える。
ペロロンチーノはエモット姉妹を救出すると、抱え上げて上空へ退避した。
同時にチャレンジシャウトの効果が切れたらしく、地上では大混乱が起きている。
どうやらヘイト値というプレイヤーには意味がなかった効果も、今では精神支配に近い思考誘導という形で発揮していたようだ。
白黒少女もぶくぶく茶釜に有効なダメージを与えられていないせいか、喪失する生命力量が上回りだいぶ衰弱している。

ペロロンチーノにとどめを刺す前の少女の話が事実であれば、姉妹を誘拐した理由はペロロンチーノをおびき出し、ワールドアイテムで洗脳することだった。
だが、その使い手であるチャイナ服は死亡。
さらに人質を失ったことで作戦は完全に失敗したことになる。
最高戦力の白黒少女の命も危ぶまれる中、これ以上の戦闘は彼らにとって利にならないはずだ。
一方でペロロンチーノからすれば追い打ちを掛けるチャンスでもあった。
「いいの？　逃しちゃって」
ぶくぶく茶釜は隣に降り立ったペロロンチーノに問いかける。
死体と白黒少女を回収し、南へと撤収していく集団の姿を見送っている。
「両手が塞がってるし、それにいつかきっと分かり会える日が来るかもしれないじゃん？」
「ふーん……。殺されといてよく言えるな。どうせ下らないこと考えてるんでしょ？　あの子可愛かったしね」
姉には思考が全てお見通しらしい。
「それで、その子らが人質だった子？」
「うん。お陰で二人共無傷だ。ありがとう姉ちゃん」
ピンク色の粘体に眼球は無いが、ジトっとした視線がペロロンチーノに向けられている。
丁度魔法による催眠が解けたのだろうか、姉妹はほぼ同時に目を覚まそうとしていた。
「う……あれ？　私……ペロロン様？」
「うーん……ペロロンさまだーっ！」
目を覚ましたら愛しの王子様の腕の中に居たような、そんな恍惚とした表情をエンリは見せている。
「なぁ、お前。いたいけな少女に手を出してないよな？」
その声はペロロンチーノが今まで聞いた中で最大級の低さだった。
「ご、誤解だよ、姉貴！　まだ何もしてない！」

「……まだ？」
「あ……いやぁ……」
「すごいっ！　ピンクのぬめぬめが喋ってる！」
「ペロロン様、なんか怖いですっ」
　ぶくぶく茶釜はころっと声色を変えてみせる。
「怖くないよー！　私はこのバカ鳥のお姉ちゃんっ！　よろしくね☆
　よろしくついでに助言しとくけど、まじでそいつ碌でもないから、今すぐ離れなさい」
「「は、はい！」」
　有無を言わせない威圧は姉妹を素直に従わせてしまった。
「うわああ！　俺のハーレム計画がぁああ!!」
「弟よ……とんでもないこと口走ってる自覚ある？」

　こうして強力な姉、ぶくぶく茶釜が仲間に加わることとなった。
　この先、この異世界を生き抜く上では心強い存在となってくれるだろう。
　旅はこれからも続く。
　姉のぶくぶく茶釜がこの世界に来ていたのなら、他のアインズ・ウール・ゴウンのメンバー、たっち・みーやウルベルト、そしてモモンガがこの世界に来ていてもおかしくはない。
　ただし、ペロロンチーノの主目的であるハーレム計画は、前途多難であることは間違い無さそうだ。
　とは言え、ペロロンチーノがペロロンチーノである限り、どんな状況だろうと彼の煩悩が鳴りを潜めることにはならない。
　今までがそうであったように、きっとこれからもそうだ。

　ここでの『ペロロンチーノの煩悩』の話は、これにて終幕である。